文化財課
埋蔵文化財係

昭和56年度

遺跡現地説明会資料

1．池　上　北　遺　跡

2．北神ニュータウン内遺跡

3．史跡　処女塚古墳

4．神出古窯址群　宮ノ裏支群

5．舞子古墳群　西石ヶ谷3号墳・6号墳

6．神出古窯址群　釜ノ口支群

7．松　野　遺　跡

8．滝　ノ　奥　遺　跡

神戸市教育委員会

池上北遺跡現地説明会資料

神戸市垂水区伊川谷町所在

1981.7.19

神戸市教育委員会

伊川流域を中心とした年表

時代		
	明石原人	
縄文時代		狩猟 採取の生活
弥生時代	吉田遺跡 新方遺跡 池上北遺跡 池上口ノ池遺跡 南別府遺跡	稲作が始まる 国国のあらそい
古墳時代	天王山4号墳 白水薬師山古墳 王塚古墳 天王山1～3号墳 上脇群集墳　鬼神山古墳	古墳がつくられはじめる 五色塚古墳
奈良時代	吉田南遺跡	平城京の造営 律令による法治国家の成立
平安時代	南別府遺跡	平安京の造営
鎌倉時代	池上北IIIトレンチ 太山寺道の五輪塔 太山寺 衆徒の活躍	武家政治が始まる
室町時代	小寺大門遺跡	戦国大名の争い
江戸時代	明石城 林崎掘割	江戸幕府がひらかれる
明治時代		

はじめに

池上北遺跡は、昭和55年度より神戸市教育委員会が発掘調査を行っています。今回は、前年度調査（Ⅰ～Ⅲトレンチ）の概要と出土遺物の展示および、今年度調査の現地説明会を行います。

遺跡の立地

この遺跡は、伊川の中流域右岸に位置する標高30m前後の低位段丘上に立地します。

池上北遺跡の周辺には、数多くの遺跡が存在します。丘陵上には鬼神山古墳群、伊川対岸の段丘上には池上口ノ池遺跡、西方には北別府遺跡、南別府遺跡などがあります。また、永井谷を隔てた丘陵上には天王山古墳群、白水薬師山古墳、高津橋岡遺跡などがあります。明石川下流域には吉田遺跡、新方遺跡、「古代の木橋」で有名な吉田南遺跡などがあります。

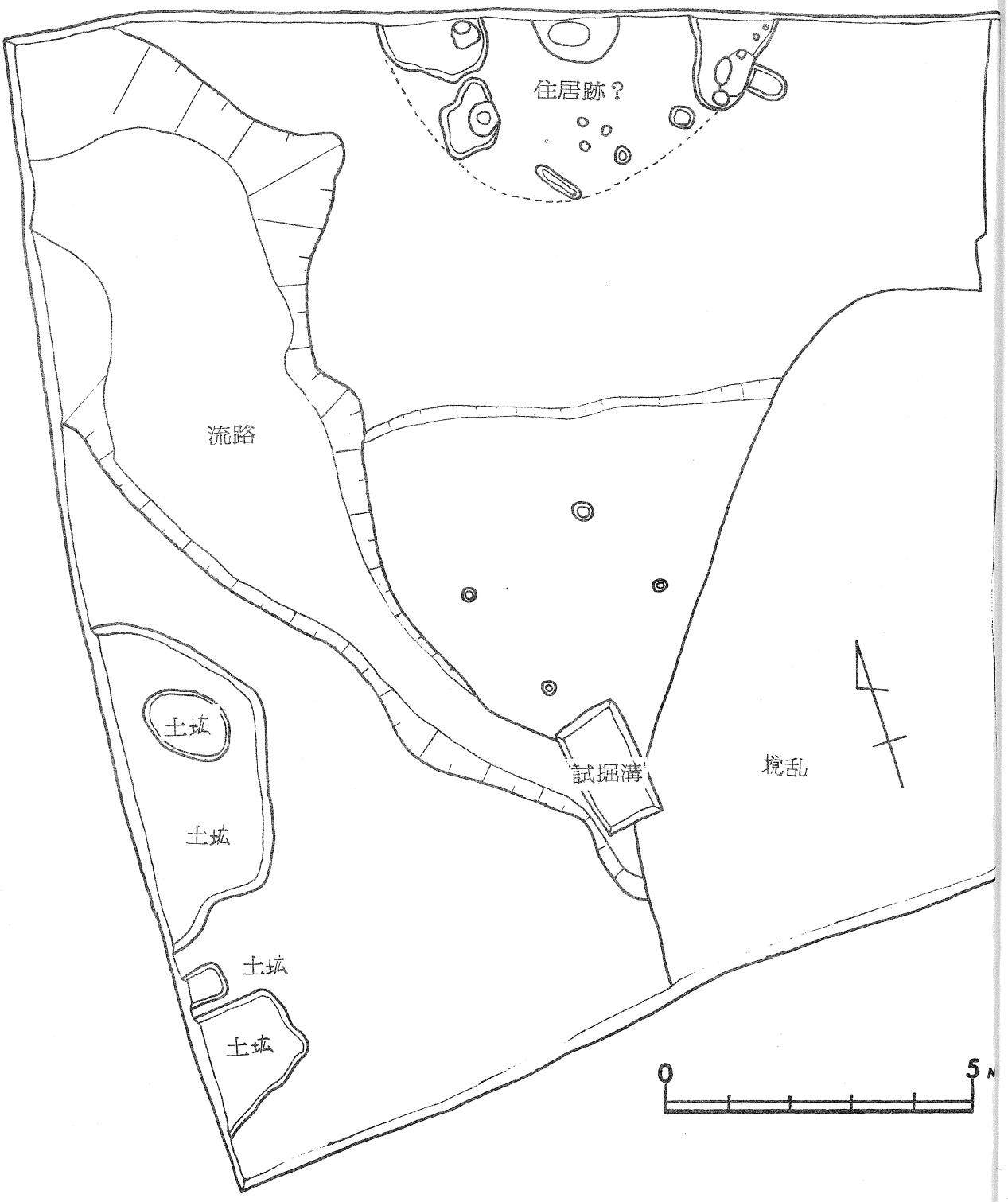
Ⅳトレンチ

このトレンチは、弥生時代の遺物を含む砂利層でおおわれていました。おそらく何度も洪水をうけた結果だと考えられます。

西側では自然の流路が検出されました。なかからは少量の弥生時代の土器が出土しただけです。西南部では大小4か所の土坑が検出されましたが、出土遺物は石鏃1点のみでその性格は不明です。北部ではピットや土坑が半円形にまとまって検出されたことから、円形の住居跡の半分がトレンチ内で検出されたのではないかと考えています。

このトレンチ内の遺構の時期は、遺物が少なく、判断する材料が乏しいのですが、次に述べるⅤトレンチと同じ、弥生時代中期と考えています。

IVトレンチ遺構配置図



前年度調査概要

Ⅰトレンチ

Ⅰトレンチからは、3軒の住居跡と土坑、ピット群が検出されました、1号住居跡は、方形で柱穴の中から小型の鉢形土器が出土しました。2号住居跡は、Ⅴトレンチの住居跡と同じくらいの大きな円形住居跡で、北側に出入口と思われる突出部があります。床面には粘土がはってあり、ベッド状遺構とよばれる高まりがつくられていました。中央には炭や灰の入った直径約2mの炉がありました。そして床面からは、甕や壺などをのせる器台が出土しました。

3号住居跡は、隅丸方形で、住居を構成していた4ケ所の支柱や梁、桁、垂木などが炭化した状態で出土しました。住居跡内からは、高坏や甕が出土しました。

他に、当時のゴミ捨て穴と思われる土坑や、数多くのピットが検出されました。

時代は、Ⅳ・Ⅴトレンチよりも新しい、弥生時代後期と考えています。

Ⅱトレンチ

北側で、当時の人々の一般的な墓である木棺墓が5基検出され、さらに南側で溝やピットなどが検出されました。溝は出土した土器から弥生時代中期と考えられ、その性格は農業用の水路か、生活の場の範囲を限る溝と考えられます。

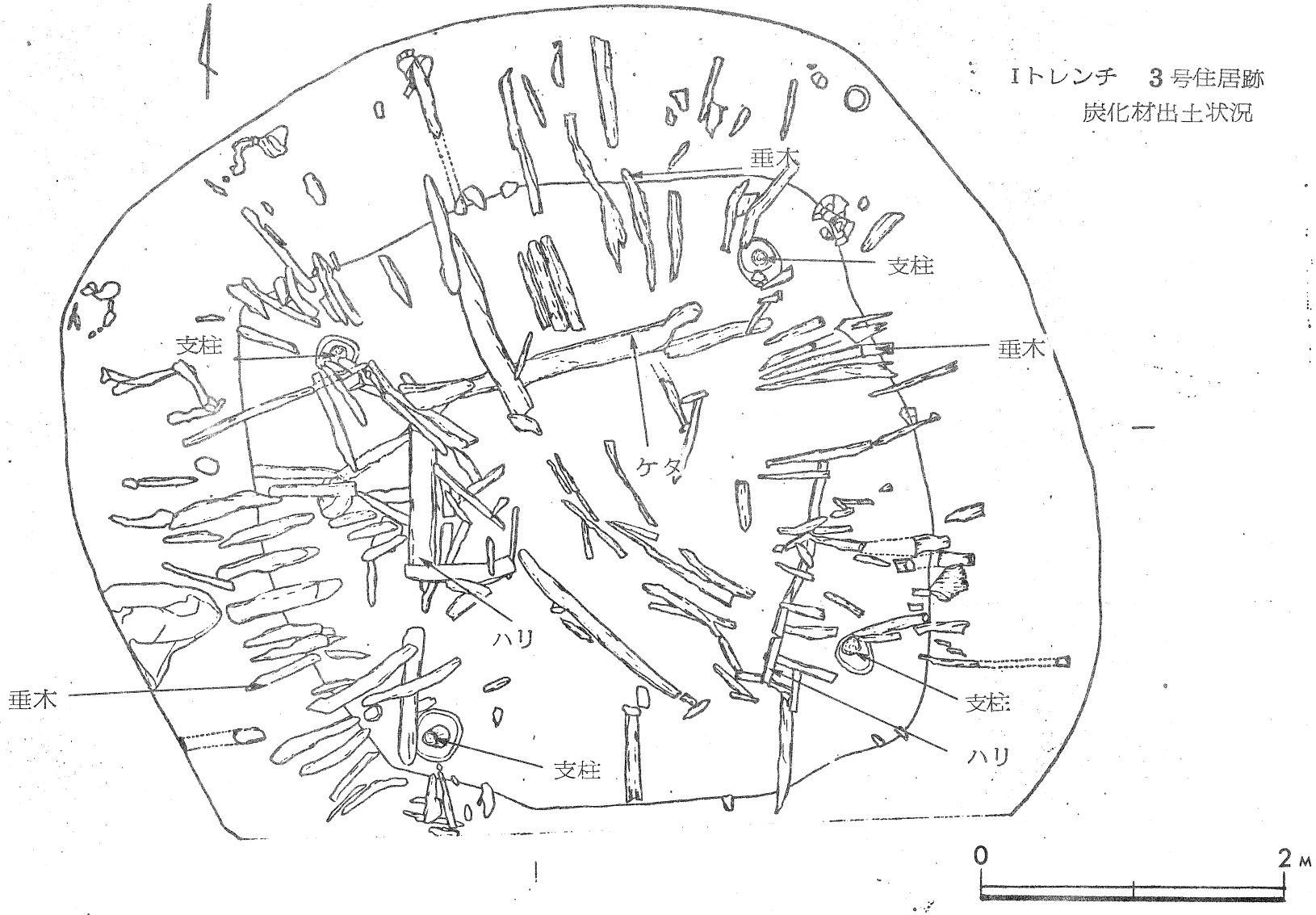
Ⅲトレンチ

Ⅲトレンチは、ⅠⅡⅣⅤトレンチの東に設定しています。検出された遺構は、ピットや溝、土坑などです。溝の中からは、須恵器の大甕が人為的に壊された状態で出土しました。

時代は、他のトレンチとはちがって鎌倉時代です。

まとめ

前年度と今年度の調査結果から、池上北遺跡のひろがりや、時期による集落のまとまりなどが少しずつですが明らかになってきました。これらの資料をもとに今後さらに検討を加えて、この地域の歴史の解明に努力するつもりです。



Iトレンチ　3号住居跡
炭化材出土状況

Ⅴトレンチ

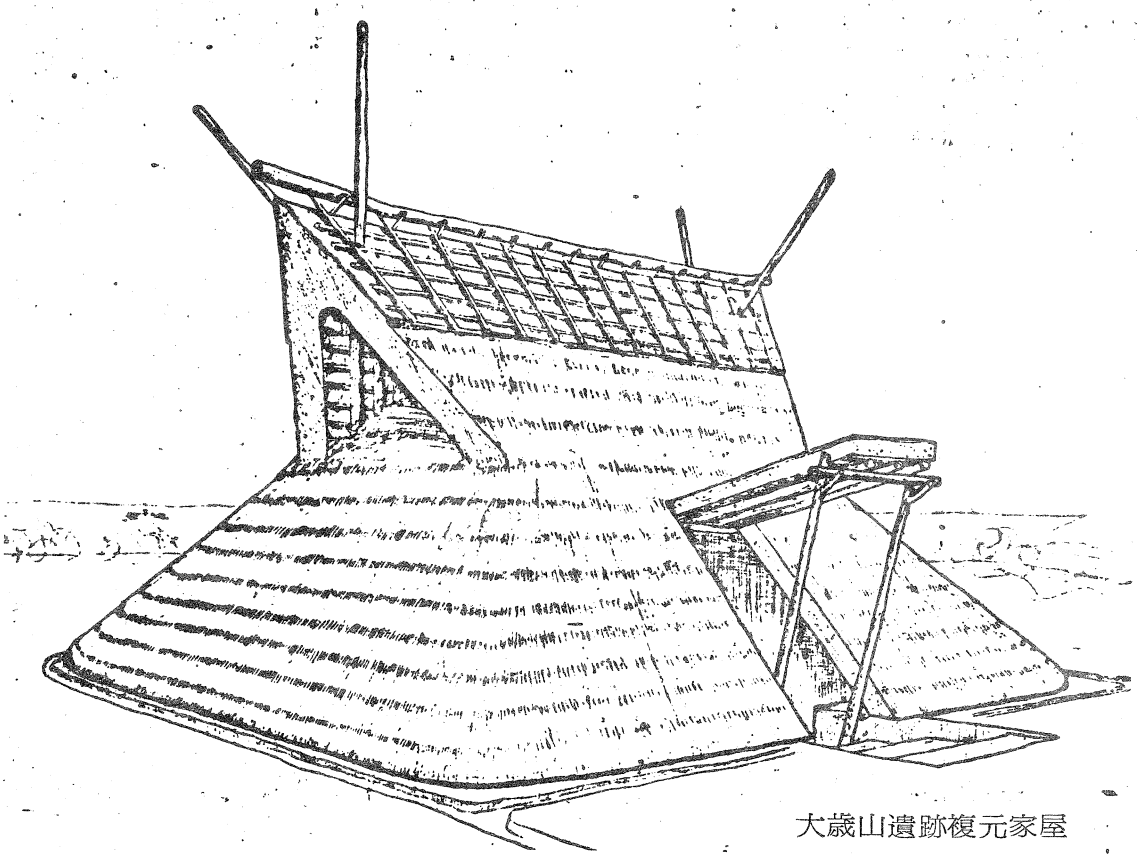
このトレンチは、先のⅣトレンチと同様に砂利層でおおわれています。この層をとりのぞくと、古代の人人の生活面が現われます。

このトレンチからは、直径8.5ｍの円形住居跡が検出されました。床面には、７か所の柱穴と中央には径1.1ｍの炉が存在しました。

当時の一般的な住居跡にくらべて大きく、集落全体のものとして利用されていた住居跡であったかもしれません。

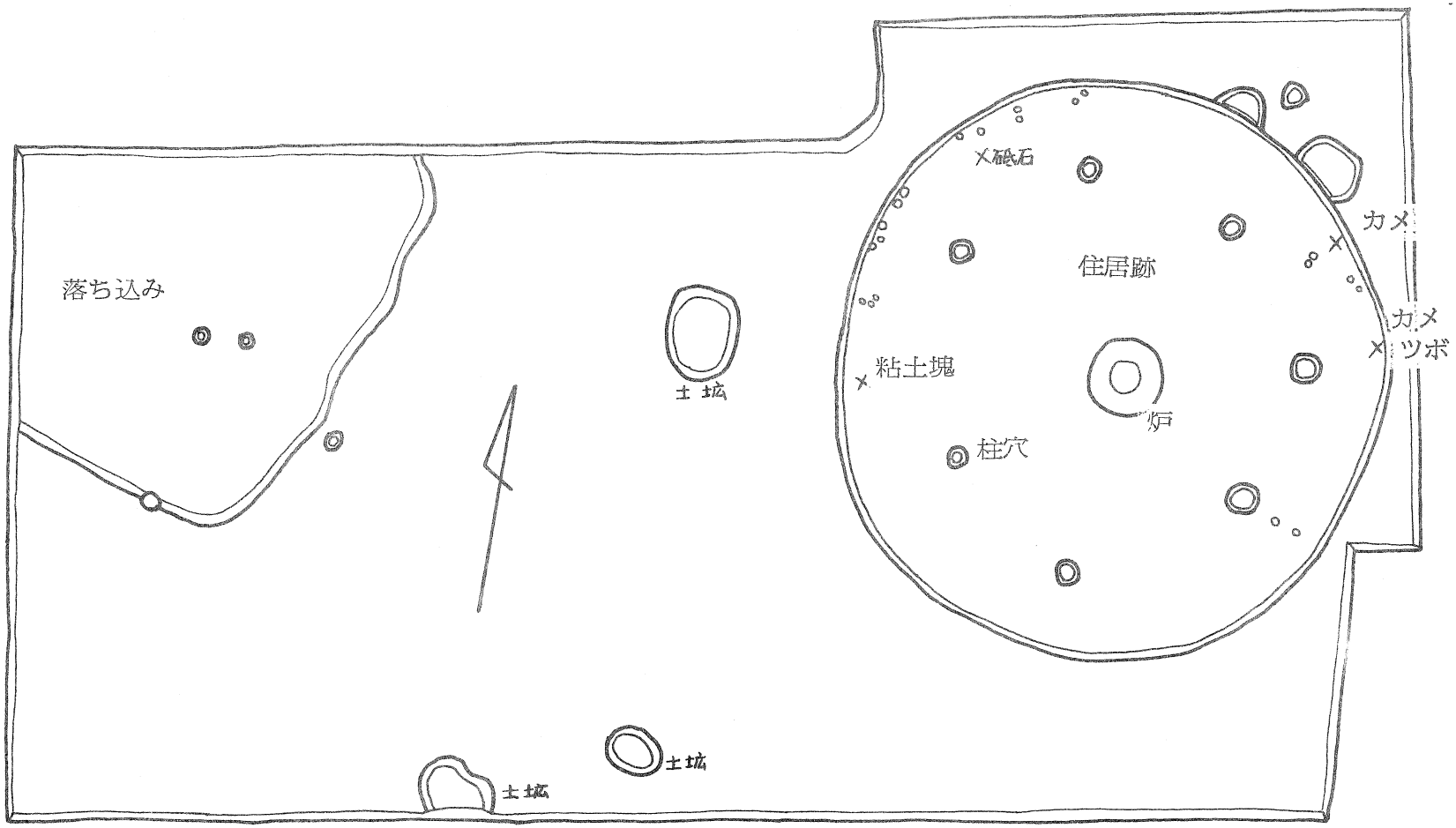
住居跡の中からは、壷や甕、砥石などが出土しておりそれらから、この住居跡は、弥生時代中期のものと考えられます。

他に土坑やピットなどが見つかっています。時期は、住居跡と同じであると思われます。



大歳山遺跡複元家屋

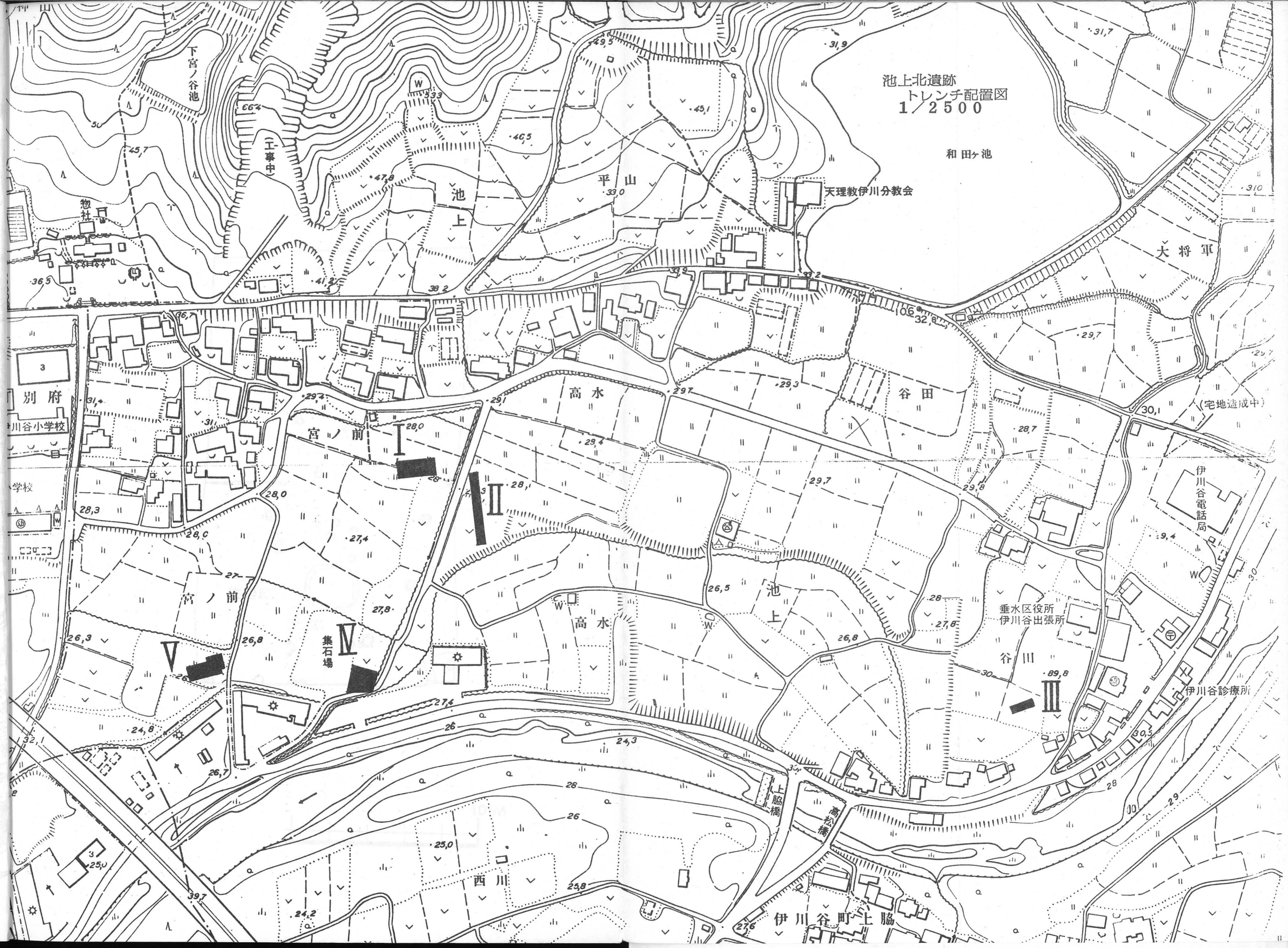
Vトレンチ遺構配置図



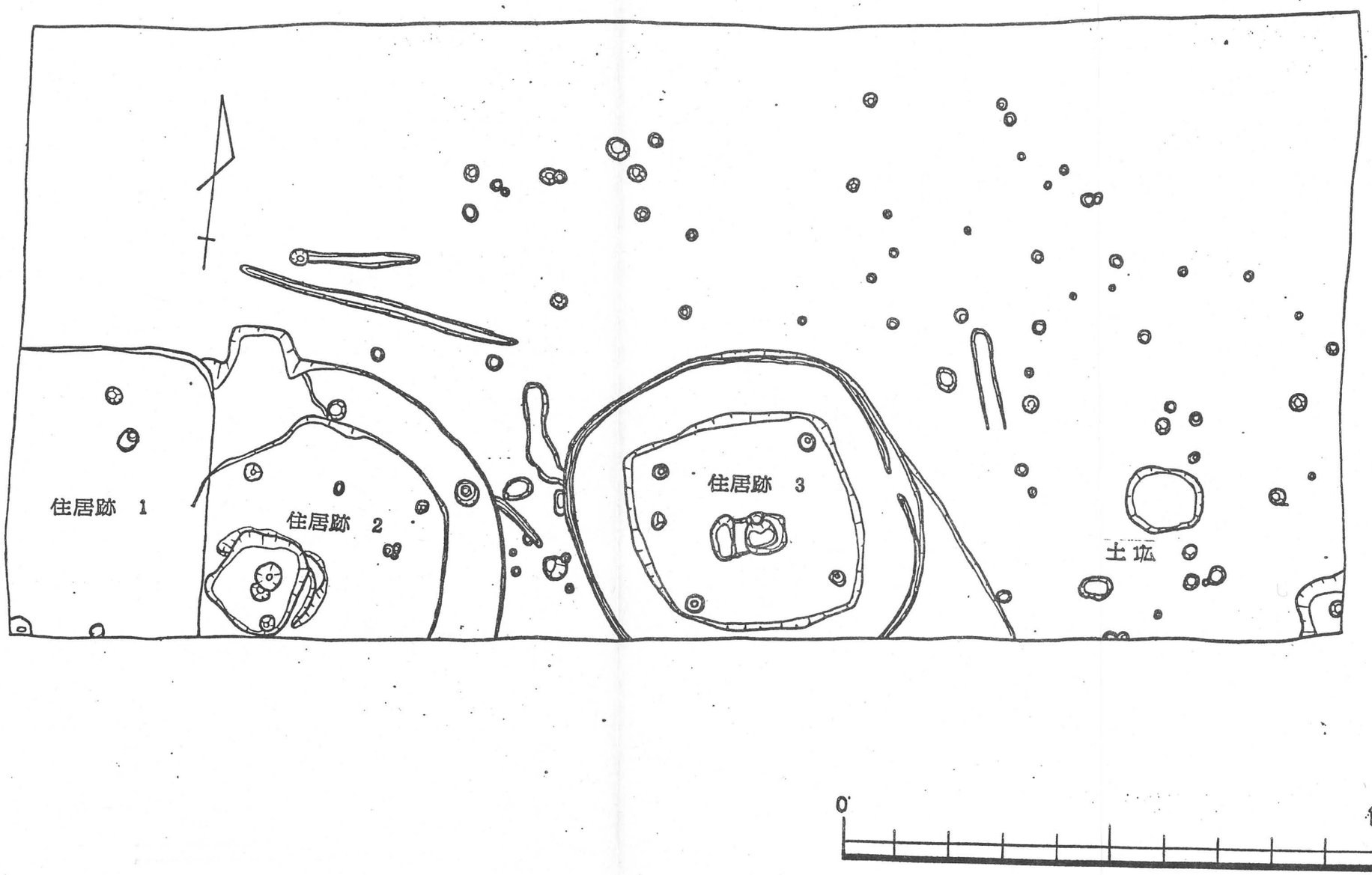
弥生遺跡分布図

弥生遺跡地名表

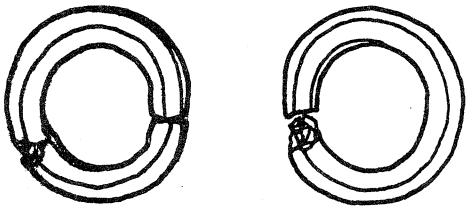
番号	遺跡名	時期	主な出土遺構
1	池上北	中後	住居跡、土坑墓
2	頭高山	中	住居跡
3	池上口池	後	住居跡
4	北別府	中	土坑
5	南別府	前中後	
6	青谷	前中	住居跡、石戈
7	高津橋岡	後	住居跡
8	今津	前中後	住居跡、土坑墓
9	新方	前中後	住居跡、周溝墓
10	居住	前中後	土坑
11	吉田	前	
12	片山	前	
13	吉田南	後	住居跡、大溝


池上北遺跡
トレンチ配置図
1／2500
和田ヶ池
天理教伊川分教会
下宮ノ谷池
工事中
惣社
池上
平山
大将軍
別府
川谷小学校
宮ノ前
高水
谷田
(宅地造成中)
伊川谷電話局
集石場
垂水区役所
伊川谷出張所
谷川
伊川谷診療所
上脇橋
高松橋
西川
伊川谷町上脇
I
II
III
IV
V

第1トレンチ遺構平面図1

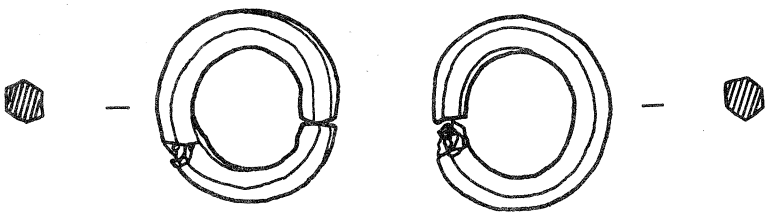


北神ニュータウン内遺跡
現地説明会資料



昭和56年7月19日

神戸市教育委員会



表紙解説　　金　　環

北区道場町出土

断面が六角形を呈する

1　はじめに

北神三団地（仮称）建設予定地は，神戸市北区道場町・長尾町・八多町・大沢町にまたがっています。

昭和 52 年に兵庫県教育委員会が，団地建設予定地内の分布調査を実施した結果，遺物散布地と遺跡の可能性がある地点約 40 ケ所を発見しました。

造成工事は，第一地区・第二地区・第三地区とに分けて行われることに決定していたため，第一地区内の地点から発掘調査を実施しました。

今回，見学していただく地点は昭和 55 年 1 月から 56 年 7 月までに調査したところです。

2　環　　境

第一地区は，長尾町・道場町・八多町に，第二地区・第三地区は長尾町・大沢町にまたがっています。第一～第三地区は，標高200メートル前後の丘陵がつらなっており，この丘陵を平担にして団地が造られます。

第一地区の東側と北側には，武庫川の支流である長尾川・八多川・有野川・有馬川が流れています。これらの川によって形成された沖積地には，土器片が多数発見されています。

また，東方には鏑射山，北方には有馬富士，南方には六甲山系の山々がつらなっています。昭和 28 年に鏑射山中腹から弥生時代の磨製石剣が工事中に発見されています。

第一団地予定地から数百メートルで三田市

となりますが，道場町・長尾町と三田市の市境附近の丘陵裾には，古墳群が点在しています。また，北西へ4～5㎞の三田市内では，北摂ニュータウン造成工事や青野ダム建設工事に先だつ調査で多くの遺跡が確認され，現在，兵庫県教育委員会が発掘調査を実施しています。

3　遺跡の概要

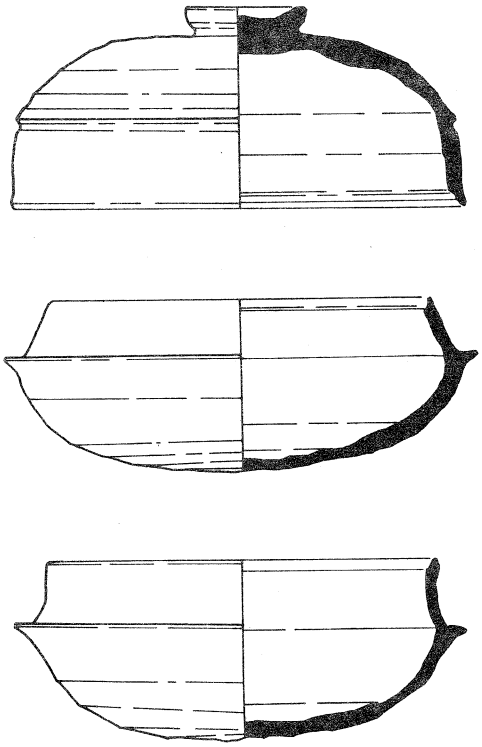
北神団地第一地区内の埋蔵文化財発掘調査は，昭和54年度から神戸市教育委員会が実施しています。その結果，新たに6ケ所の遺跡が発見されました。

(1)　No. 13 地点

標高208ｍの丘陵尾根部分に存在する円墳です。墳丘頂部は削平されており，現存する高さ約4ｍ，径約15ｍで，竪穴式石室を内部主体とする古墳です。石室の寸法は，内法で長さ2.4ｍ・幅0.7ｍ・高さ0.8ｍです。石室の構築方法は，河原石を5段に積み上げていますが，東側短側壁の下2段は，岩盤を側壁として利用しています

石室に使用された石材は，有馬川や有野川から運び上げたと考えられます。石室掘形は，東西約3.7ｍ・南北2.5ｍ・深さ0.8ｍです。天井石は，砂岩の板石で，石室内に落ちこんでいました。

副葬品は，盗掘を受けていたため，石室内からは刀子1口が出土したのみです。石



第13号地点出土須恵器

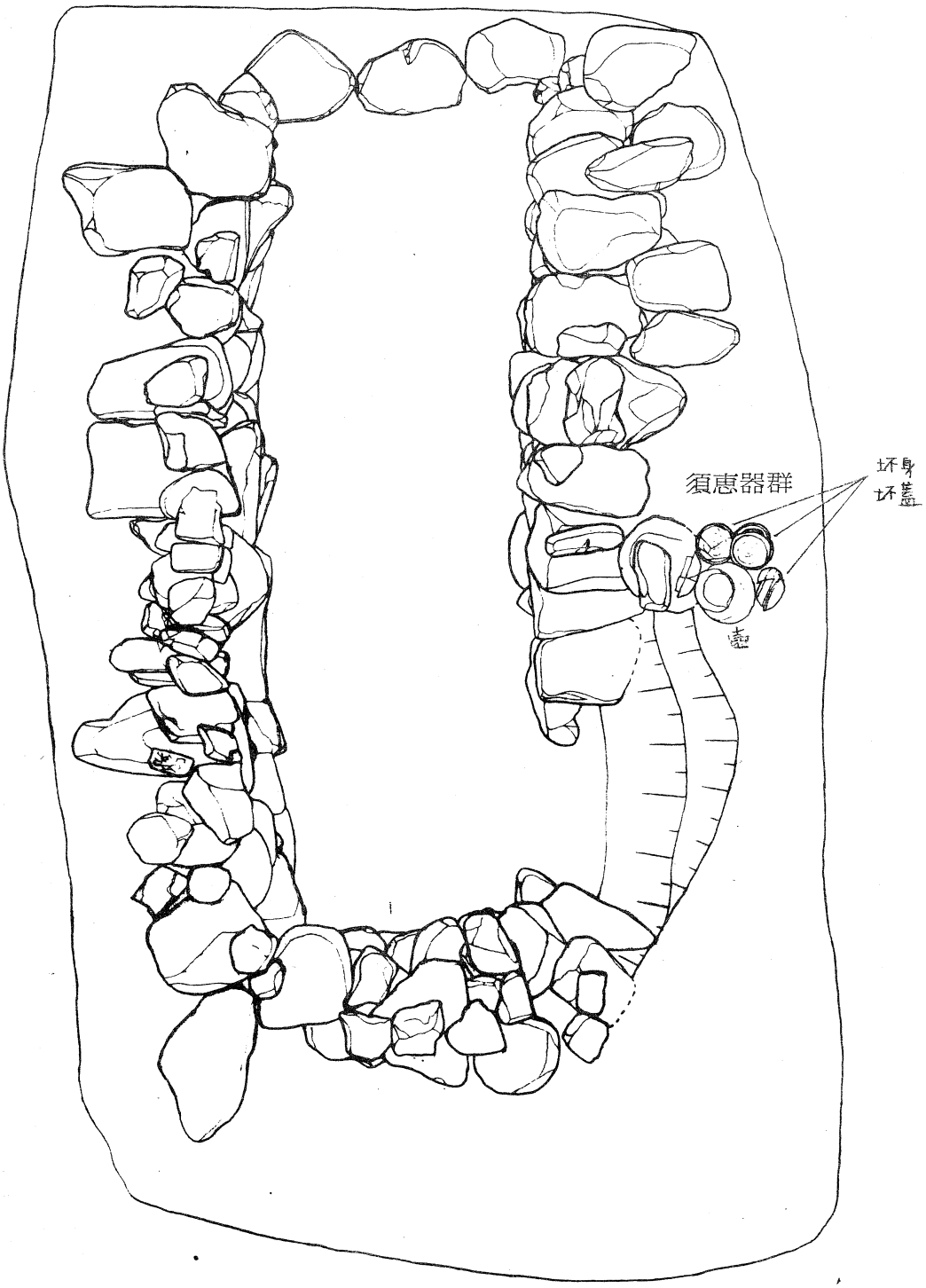
田市の市
していま
内では，
ム建設工
され，現
実施して

発掘調査
員会が実
ケ所の遺

在する円
り，現存
竪穴式石
室の寸法
・高さ
河原石を
短側壁の
していま

馬川や有野
。石室掘
・深さ
板石で，石

ため，石室
みです。石



第1図　　第13地点 石室平面図　S＝1：20

室掘形内から須恵器壷を中心に，杯身・杯蓋が出土しています（第13図）。

このほかに墳丘上から杯身・甕の破片が出土しています。供献用土器として置かれたものと考えられます。

当古墳の築造時期は，出土遺物から5世紀末から6世紀初頭と推定されます。

(2) No. 14 地点，No. 46 地点

両地点からは数多くの火葬墓が発見され一連の遺跡と考えられます。

No. 14 地点

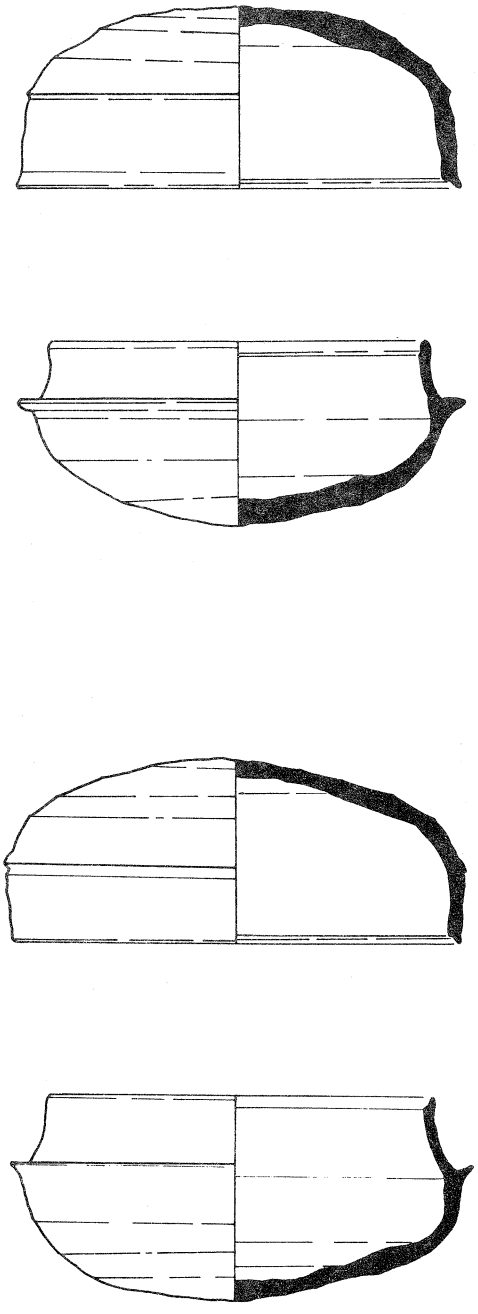
No. 13 地点から南へ突出した尾根上にNo. 14 地点があります。本地点からは，径1m・幅0.6m・深さ0.3m程度の楕円形をした土坑が5基検出されました。そのうち2基は火葬墓と考えられるもので，3基は土葬墓と考えられるものです。

火葬墓の1基は，土坑内に河原石を置き，まわりに5～6個の石をたてていました。石を取り除くと赤く焼けた壁があらわれ，炭，灰とともに人骨，鉄釘が出土しました。土坑の底には，焼けた石が4個おかれていました。本地点の火葬墓の年代は，埋葬施設の類似性からNo. 46 地点と同じ江戸時代頃と思われます。

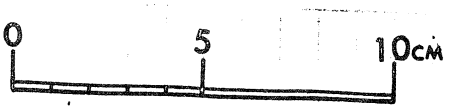
No. 46 地点

No. 13 地点から南へ降る尾根の斜面から谷地にかけての範囲がNo. 46 地点です。

この範囲内から 30 基の土坑が検出され



第13号地点出土須恵器



身・杯

の破片

して置か

から5世

す。

発見され

根上にNo.

は，径1

楕円形を

そのうち

3基は

石を置き，

ました。

らわれ，

しました。

かれてい

，埋葬施

江戸時代

斜面から

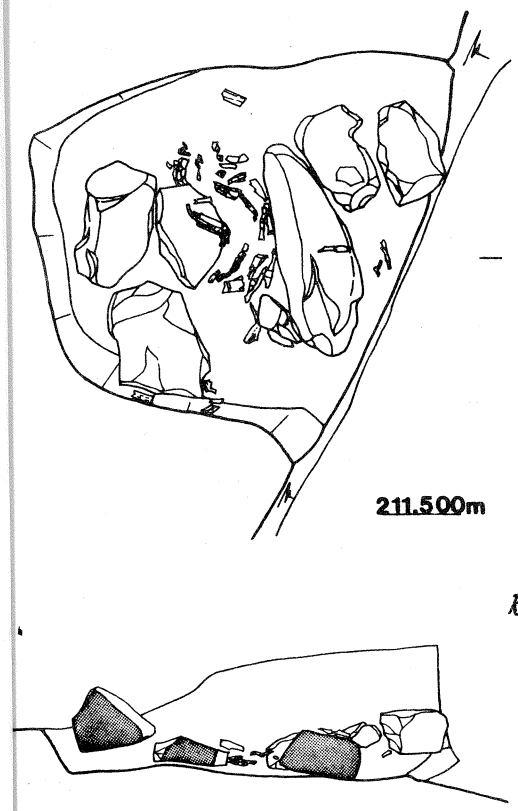
です。

検出され

第2図

第36号地点火葬墓

S＝1：20



ています。土坑は，長さ1m・幅0.6m・深さ0.4mで，長方形及び楕円形を呈し，1基を除くすべてに焼けた痕跡がみられました。土坑内からは，焼土，炭，人骨片，鉄釘が出土し，土坑の底には，棺台に使用した石がおかれていました。

副葬品は非常に少く，古銭，土師器杯皿，陶器杯皿が出土しているのみです。火葬墓群の形成時期は，古銭の中に「寛永通宝」がみられることから江戸時代頃と考えられます。

なお，本地点内から長さ5m・幅0.3m・深さ0.15mの溝が検出されています。火葬墓群との関係は不明ですが，溝内からは鉄鎌が2点出土しています。

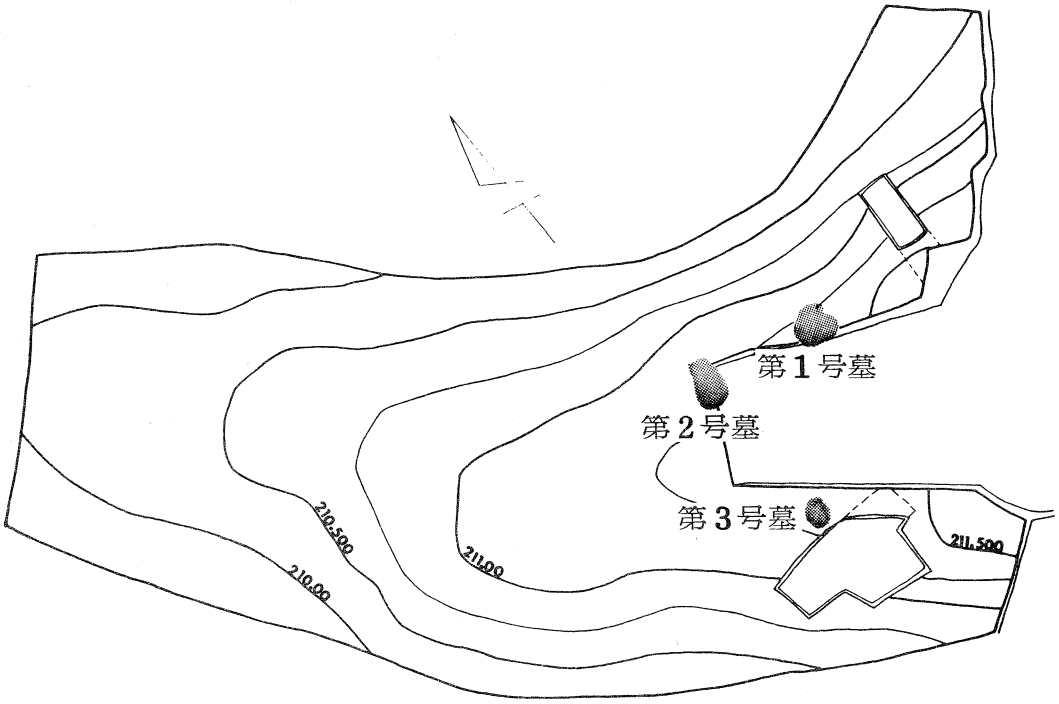
No.36地点

No.35地点から南へ約100mに位置し、火葬墓3基が検出されました。西へのびる尾根上最頂部付近の標高211.0～211.5mの平担面ですが、工事中に発見されたため一部はすでに削平され、もとは3基以上の火葬墓群であったと思われます。

1号墓、3号墓は保存状態がよく、木炭、人骨片が残存していました。1号墓は、棺台に使用したとみられる30～50cm大の角礫が6個検出され、いずれも火を受けた痕跡が確認されました。出土遺物は、木炭、人骨片のほかは、3号墓より棺に使用したとみられる鉄釘片3点のみでした。火葬墓

の平面形は、楕円もしくはそれに近い長方形をしており、規模からみて座棺と推定できます。

時期は、No.14・46地点から出土している火葬墓35基と同様の時期（江戸時代）と考えられます。



第3図　　第36号地点地形実測図

S＝1：200

方
で
い
と

形実測図
1：200

(3) No. 35 地点

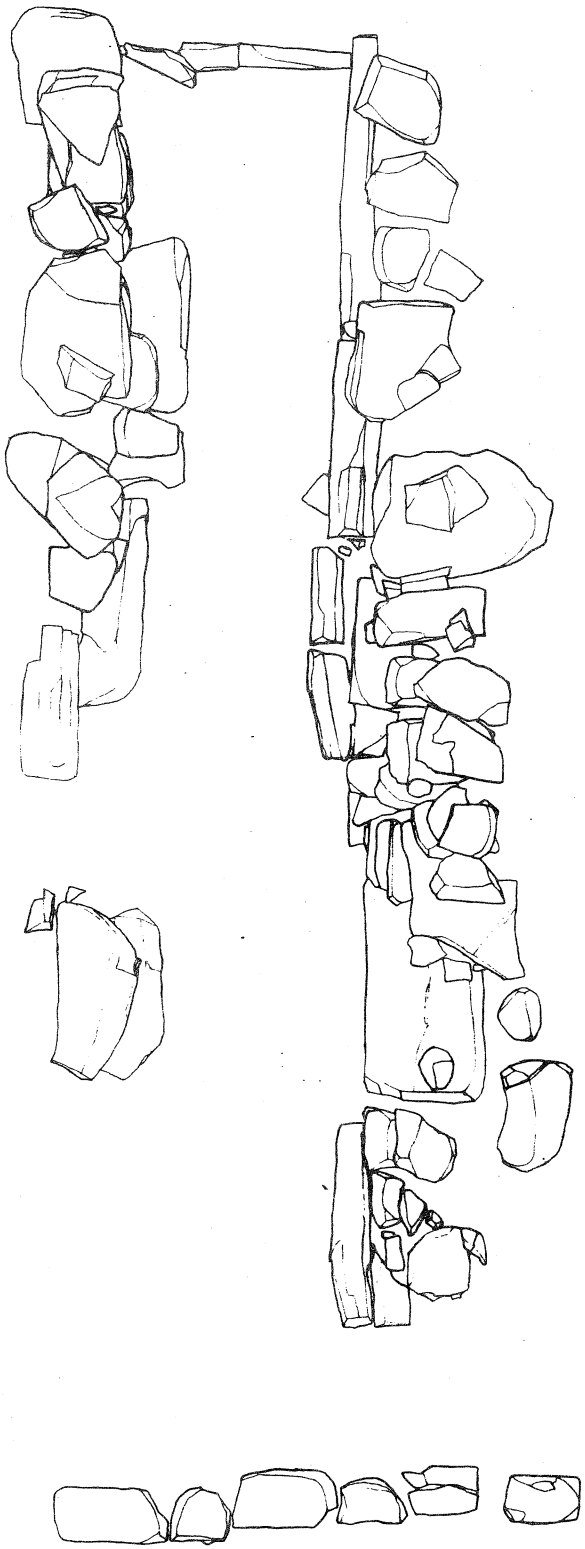
標高 216 mの丘陵尾根上より，やや下った斜面に構築された古墳です。現存するマウンドは，径 10 m・高さ 3 mで，古墳の西側の斜面上方は溝により区画されています。

主体部は，長さ6 m・幅1.2 m・現存高1.6 mの東に開口する無袖の横穴式石室です。石材は，凝灰岩質砂岩の切り石を用い，長さ1.4 m・厚さ0.2 m程度の板石を両側面にたて，その上に比較的小さな石を小口積みにしています。控え積みは存在せず，天井石もすでに失われていました。石室の開口部には，石室構築材と同質の石を6個石室主軸と直交する方向に一列に並べています。

この凝灰岩質砂岩は，北神ニュータウン内の丘陵地にはありません。神鉄道場川原駅前の花山や三田市内の横山付近には露頭しており，このあたりから運び上げたと思われます。

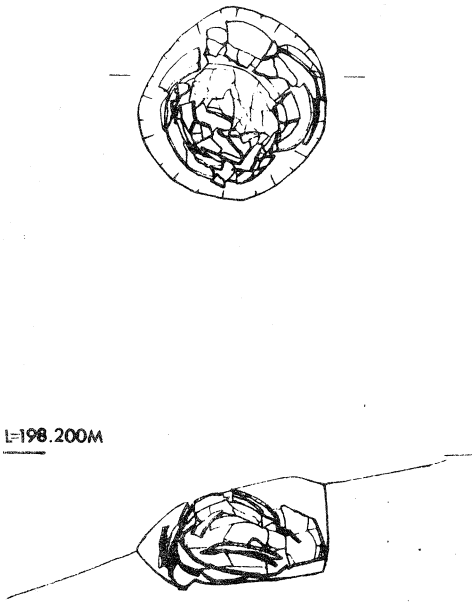
当古墳は，昭和初期に地元住民により発掘され，すでに遺物の取り上げが終っていました。今回出土した遺物は，土師器片，須恵器杯蓋片が数点だけでした。

当古墳の築造年代は，遺物，石室構築方法から6世紀末ないしは，7世紀初頭と考えられます。



第4図　第３５号地点石室平面図　　S ＝１：４０

土　器　棺　1



第5図

(4)　No. 42 地点

No. 42 地点は，No. 46 地点の南に位置する尾根上に存在しています。径1 m・深さ0.4 mの円形をした土坑が1基検出され，土坑内からは河原石が約 20 個壁に貼りついた状態で出土しました（第 8 図）。

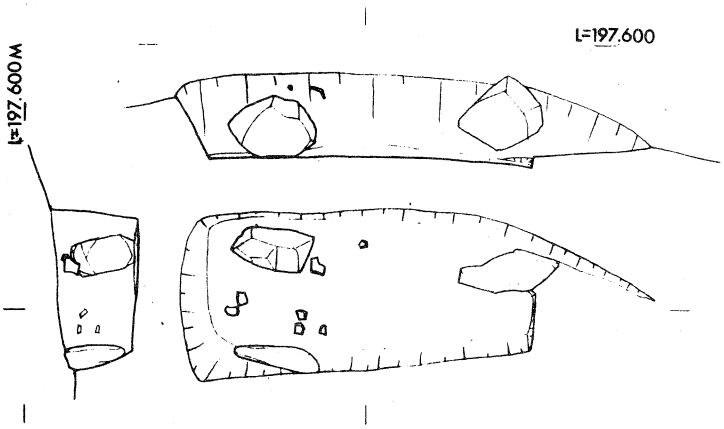
石組の内径は，南北 0.5m・東西0.3 m・深さ0.4 mです。

副葬品は皆無ですが，床面から鉄釘が出土しており，埋葬施設に間違いないと思われます。恐らく小さな箱形木棺を埋葬したのでしょう。時期は不明です。

(5)　No. 45 地点

No. 13 地点の南東約 50 mに位置し，標高 199 mの丘陵尾根上よりやや下ったところに存在しています。

丘陵斜面に土器棺3基・木棺墓1基が，弧を描くように存在していました（第5,6,7図）。



第6図　第45号地点木棺墓　　S＝1：20

土器棺は，いずれも弥生時代終末期に属するものです。

木棺墓は，長さ1.0 m・幅0.45 m・深さ0.25 mで三隅に河原石が置かれていました。埋土内からは，弥生土器片が数点出土しています。

(6) 掖谷遺跡

掖谷遺跡は，丘陵に狭まれた狭い谷部に存在する遺跡です。

掖谷調整池工事に伴う市道掖谷線のつけ換え工事中に発見され，緊急調査を実施しました。

現水田面に，南北 28 m・東西 10 mのトレンチを設定し調査した結果，掘立柱建物址 2棟が検出されました。1棟は，2間×3間（柱間1.8～2.1 m）の総柱建物で，もう1棟は，2間×2間以上のものです。（第10図）

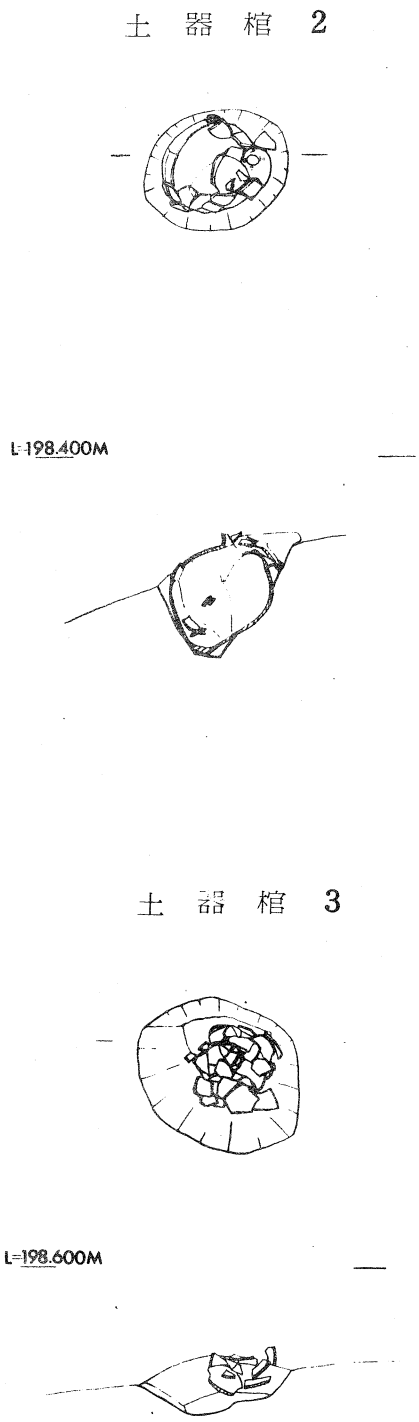
また，建物群の南 10 mで，長辺1.3m・幅0.4m，現存している高さ7 cmの割竹形木棺が出土しました（第11図）。

木棺内からは須恵器片が出土しています。

時期は，建物址・木棺とも鎌倉時代から室町時代にかけてのものです。

中世の木棺墓は，ほとんどが箱形木棺墓で本遺跡のような古墳時代の様式をもつ割竹形木棺の出土例は，極めて珍しいものです。

なお，木棺の材質は，「モミ」であることが判明しています。



S＝1：20

第7図

末期に属

5 m・深
れていま
が数点出

い谷部に

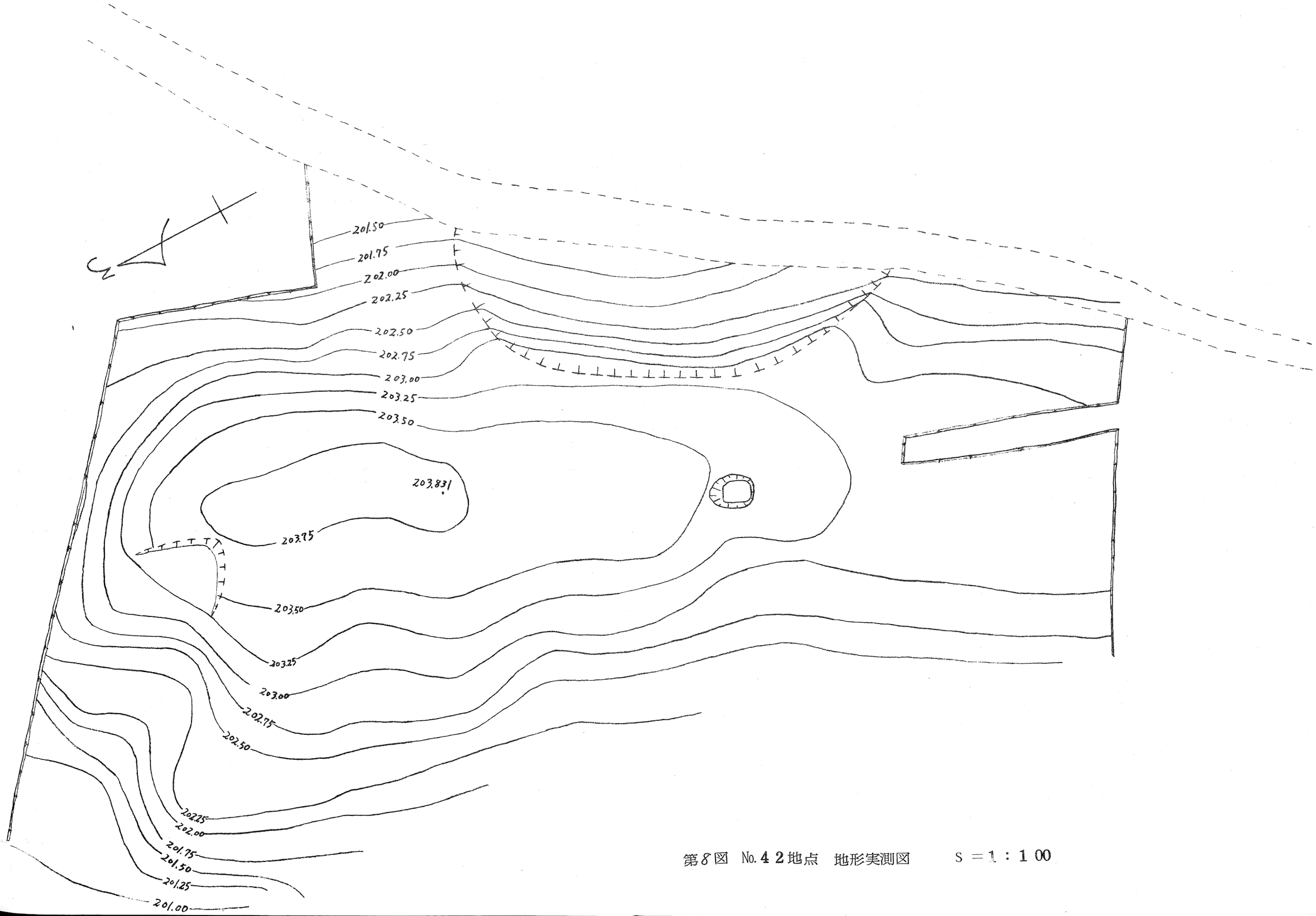
線のつけ
を実施し

10 mの
掘立柱建
は，2間
柱建物で，
のです。

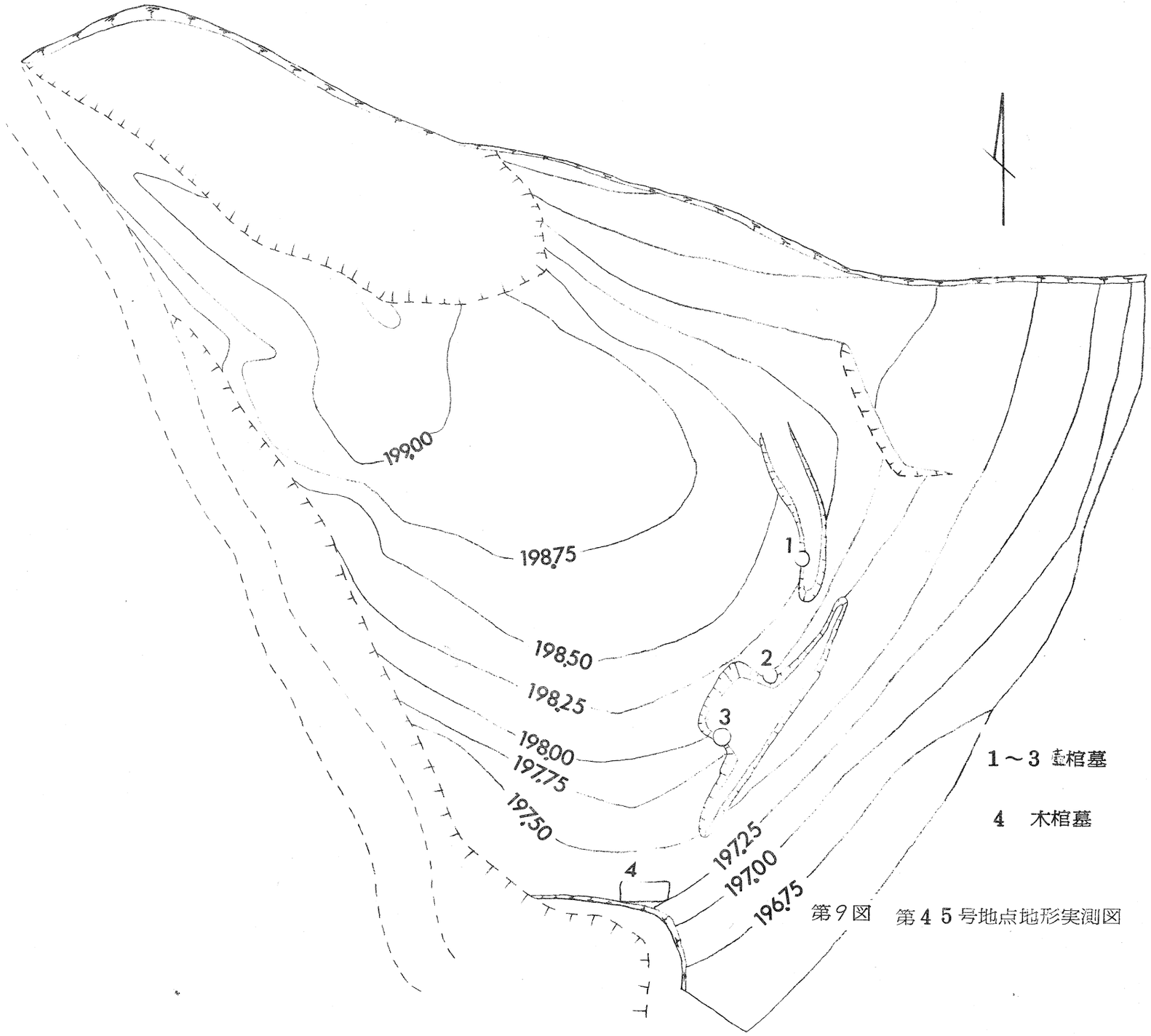
辺1.3m
の割竹形
。
ています。
時代から

形木棺墓
をもつ割
いもので

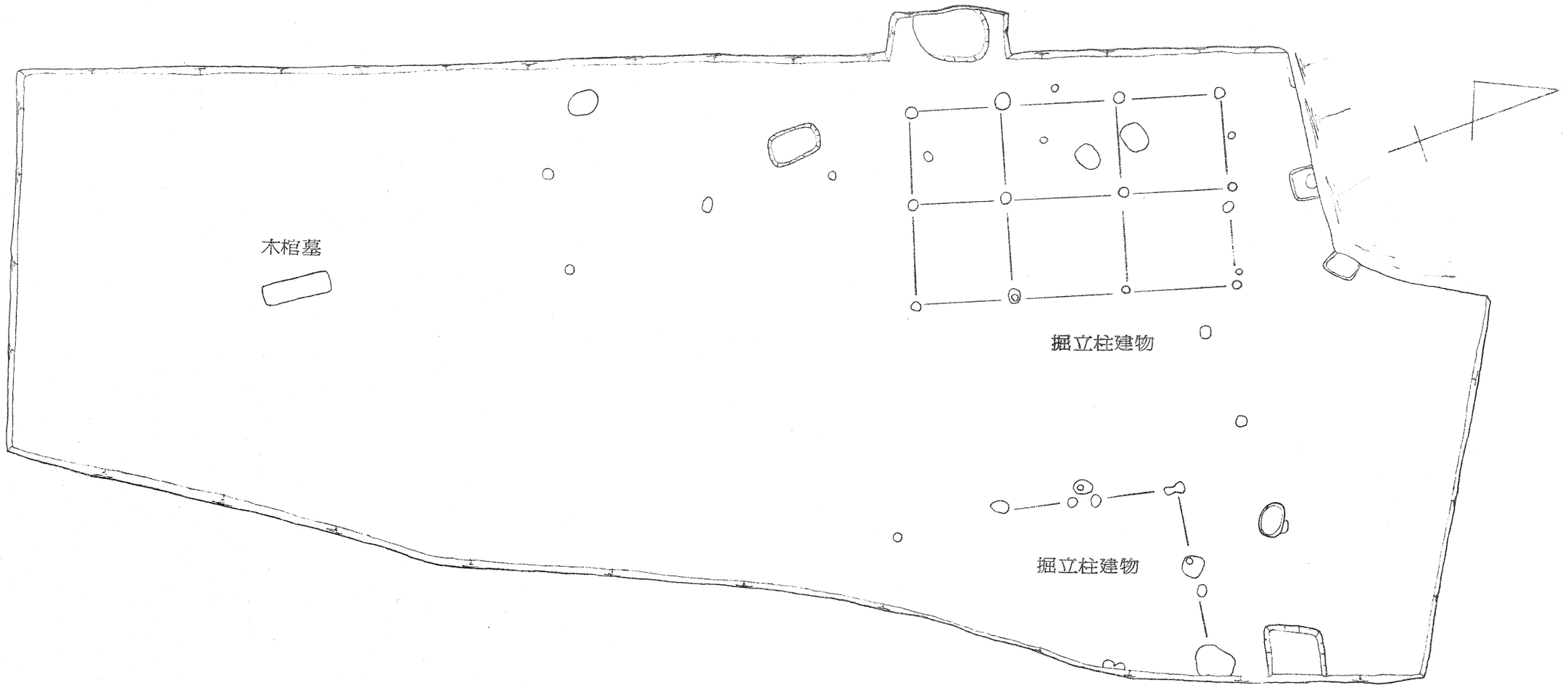
であるこ



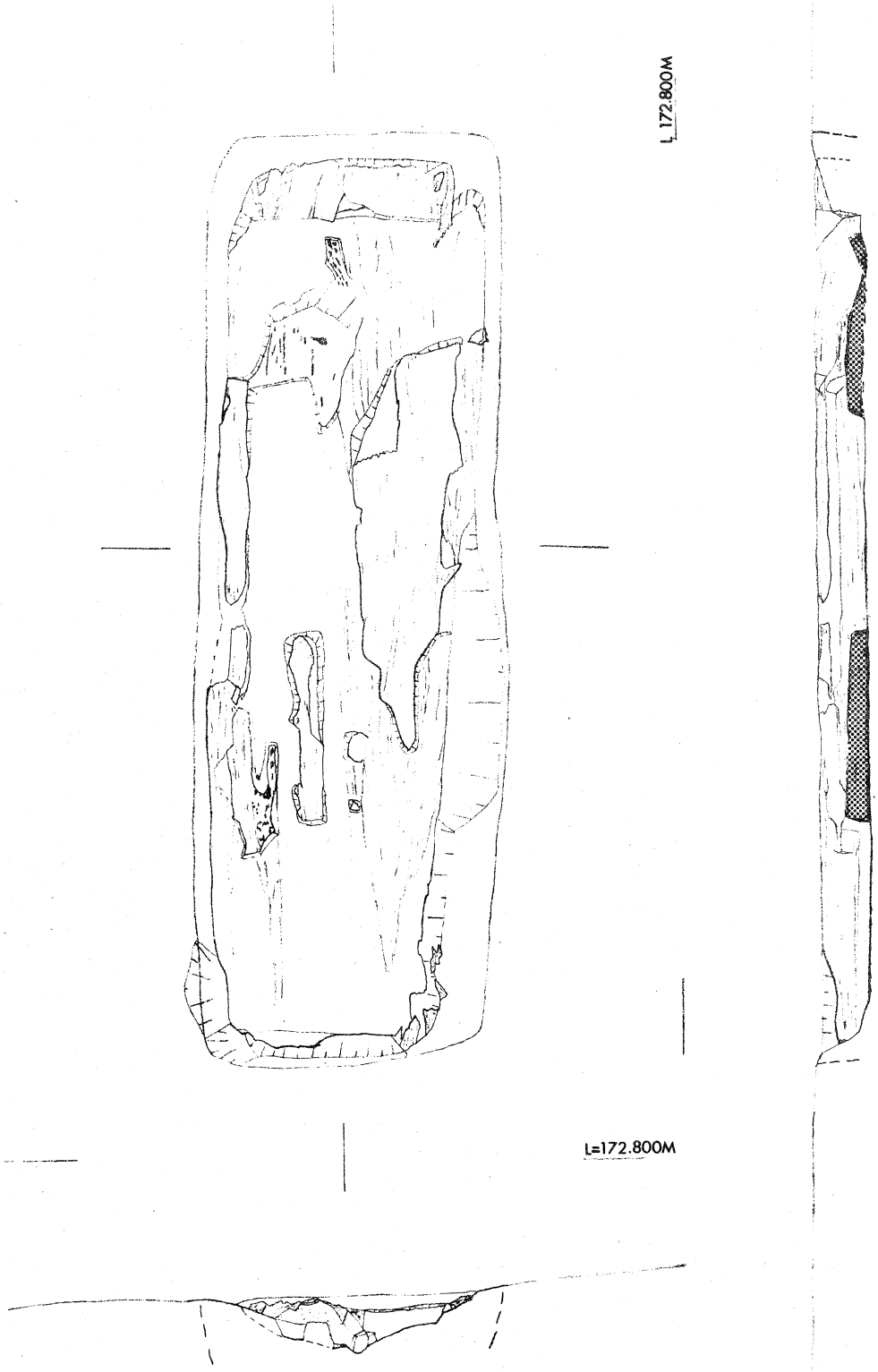
第8図　No.42地点　地形実測図　　S＝1：100



第9図 第45号地点地形実測図



第10図 榎谷遺跡遺構配置図　S＝1：100



第11図 城谷遺跡木棺実測図　　S＝1：10

(7) 掖谷南遺跡

掖谷遺跡の南500 mに位置する遺跡で，主な遺構は2間×5間（柱間2.5 m）と1間×2間の掘立柱建物址2棟，一辺約0.9 m・深さ0.8 mの六角形の井戸，それに3条の溝です（第12 図）。

出土遺物は，包含層から縄文時代の石鏃と須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器，溝内から挟形鉄鏃・須恵器・土師器が出土しています。

遺跡の年代は，遺物から 10 世紀から11世紀に属するものと考えられます。

本遺跡からは，一般集落ではあまり出土しない灰釉陶器・緑釉陶器が出土しています。

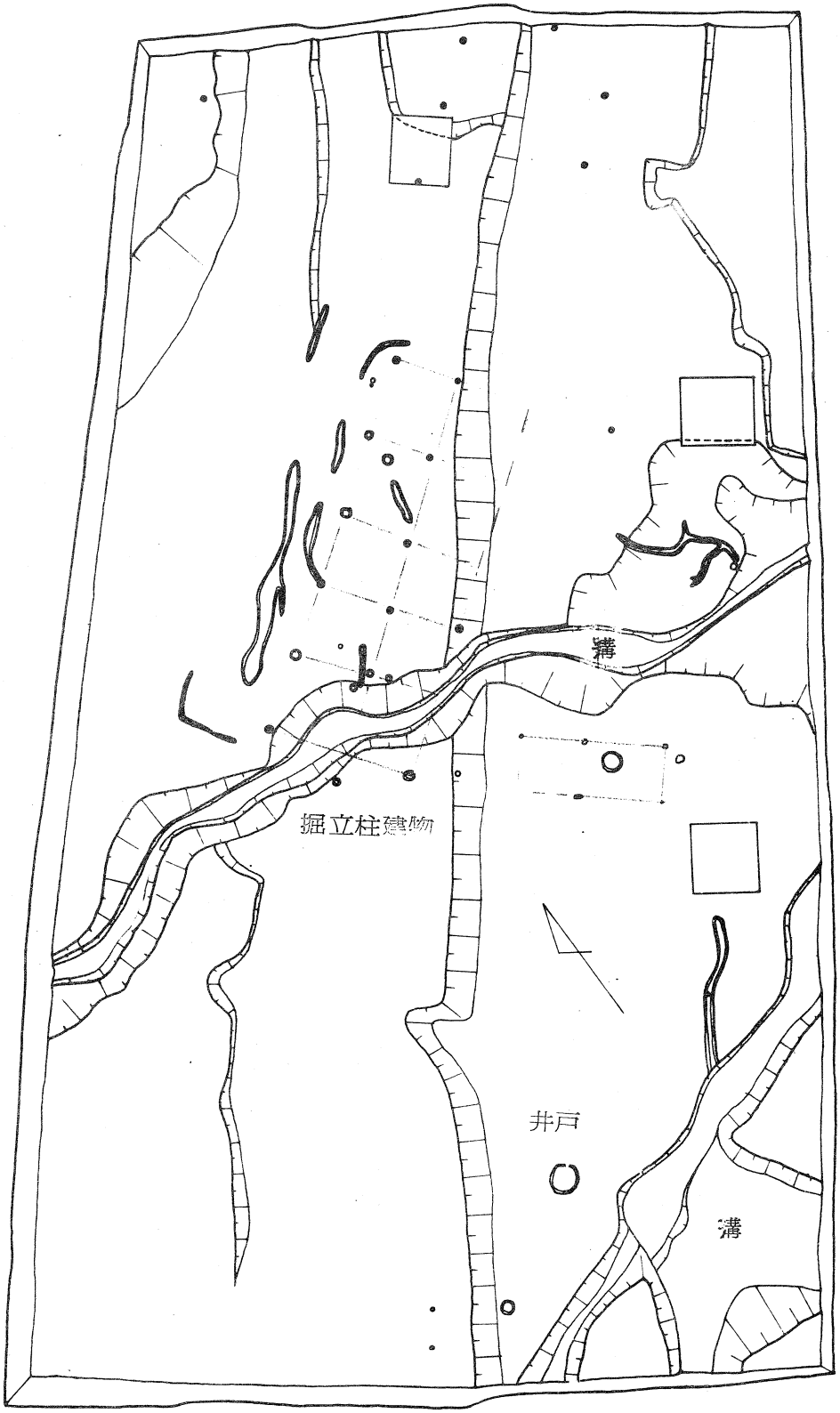
このことから，本遺跡が在地領主層の居館等の性格をもつ遺跡ではないかと思われます。

4 おわりに

三団地内の遺跡約 40 ケ所のうち，今回，見学していただいた地点も含めて，年代の判明しているものは，No. 4 地点（弥生時代中期集落址），No. 45 地点（弥生時代終末～古墳時代前期の墓），No. 2 地点・No. 3 地点・No.13 地点・No. 35 地点（古墳時代後期の古墳），No. 20 地点（中世山城　茶臼山城），掖谷遺跡・掖谷南遺跡（中世・住居址），No. 14 地点・No. 36 地点・No. 46 地点（近世・墓址）です。

弥生時代から江戸時代までの遺跡が存在しており，今後の調査によって，この地域の歴史が相当解明されるものと考えられます。

北区における文化財調査は，これまで，あまり行われていませんので，今後の成果に期待したいものです。



第12図　椒谷南遺跡遺構配置図

0　5M

地点	種別
1	古墳
2	古墳（横穴式石室）
3	〃
4	弥生時代高地性集落跡
5	古墳
6	〃
7	〃
8	〃
9	〃
10	〃
13	〃
14	近世火葬墓群
15	古墳
16	〃
17	〃
18	〃
19	遺物散布地
20	山城（茶臼山城）
21	〃
22	古墳
23	〃
24	〃
25	〃
26	〃
27	〃
28	〃
29	〃
30	〃
31	〃
32	遺物散布地
35	古墳（横穴式石室）
36	近世火葬墓群
42	弥生時代墳墓
45	時代不明埋葬地
46	近世火葬墓群
A～H	遺物散布地

北神ニュータウン内遺跡分布図

第13図

●＝調査済箇所
○＝未調査箇所

城谷遺跡　中世建物跡・中世墓

城谷南遺跡　中世建物跡

史跡　処女塚古墳現地説明会資料

昭和56年8月9日

神戸市教育委員会

経　　過

処女塚古墳は，大正１１年３月８日に国の史跡に指定された古墳です．近年，墳丘が流れ出したり，周囲の石垣の傷みがひどくなってきました．そのため，古墳の墳丘と周囲の石垣の整備を昭和５４年度から行っています．

第１次調査は，昭和５４年１２月から昭和５５年３月まで行いました．

調査の結果，(1)墳丘の斜面には石が葺き上げられていること．(2)前方部は二段の斜面でできていること．(3)前方後円形の可能性が高いことなどがわかりました．しかし，この調査では，墳丘整備を行うのに十分な資料が得られませんでしたので，今回第２次調査を行うことになりました．

立　　地

前回の調査で確認されていましたが，洪積台地上に立地するのではなく，砂堆状地上に立地しています．

現在では，埋め立てにより海岸線からかなりはなれたところに位置していますが，古墳が造られた当時は，瀬戸内海航路からよく目

につく所であったと思われます。

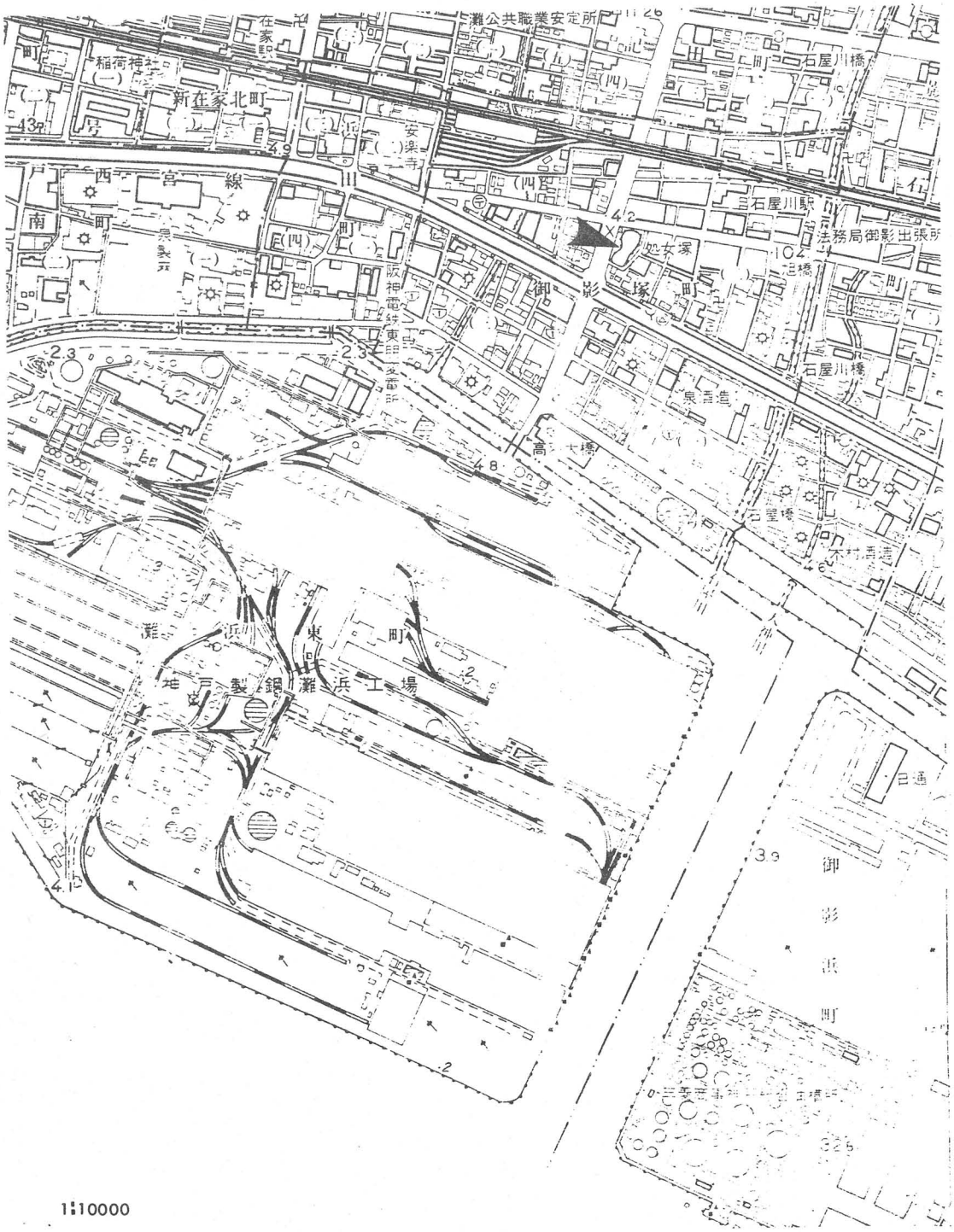
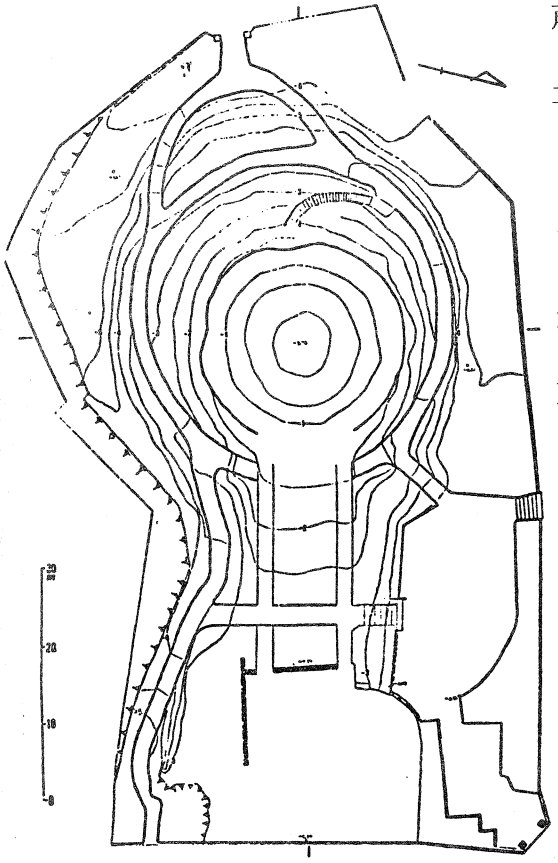


図１　処女塚古墳位置図　現在の海までの距離は３００m

環　　境

処女塚古墳周辺の遺跡（図　2 参照）をみてみると，まず旧石器時代の遺跡として芦屋市の朝日ヶ丘遺跡があげられます．縄文時代の遺跡も東灘区内では知られていませんが，芦屋市山芦屋遺跡で縄文時代前期の石器が出土しています．



西求女塚古墳

六甲山系の山復には，中期の高地性集落として有名な伯母野山，金鳥山，会下山遺跡などが点在しています．１４口の銅鐸と７口の銅戈の出土で知られる桜ケ丘遺跡や，渦ケ森，保久良神社遺跡などからも銅鐸や銅戈が出土しています．処女塚古墳に最も近い弥生時代の遺跡としては，現在のところ郡家大蔵遺跡があります．

古墳時代の遺跡としては，東求女塚古墳，西求女塚古墳，処女塚古墳，芦屋市の親王塚古墳などと，現在ではなくなってしまったヘボソ塚古墳などがあげられます．また，国鉄住吉駅の北側に「坊ケ塚」の字名が残っていることから，かってはここにも古墳があったと思われます．後期古墳としては神戸女子薬

大構内，三条，城山南麓，八十塚群集墳などが数えられます．

処女塚古墳の墳頂には，田辺福麿の「古の小竹田壮士の妻問いし菟原処女の奥津城ぞこれ」（万葉集）の歌碑があります．これは処女塚古墳を中心に東西それぞれ約2㎞の所に処女塚に前方部を向けた2基の前方後円墳（東求女塚古墳，西求女塚古墳）があり，それをめぐる悲恋の伝説によるものです．

また平安時代に成立した大和物語によると舞台は生田川に移っています．

このように3基をめぐる伝説は，かなり古くから長い間人々に伝えられてきたと思われますが，この物語はあくまでも伝説であり史実とは考えられません．

墳頂のもう一つの碑は，湊川の戦い（1336）に敗れた新田義貞を東に逃れさせ，かわりに敵を防ぎ処女塚の上で討たれた小山田太郎義家の碑で『太平記』に描かれた武勇を記念し，弘仏3年（1846）に立てられたものです．

トレンチの概要

第1・6トレンチは前回，調査したトレンチです．第1トレンチでは中段のテラスと墳端部の貼り石が検出されています．墳丘盛土は砂を利用しています．

第2・3トレンチは攪乱が著しく，旧状を保っていませんでした．

第4トレンチは，墳丘がえぐられて，盛土が露出しています．

第5・7トレンチも攪乱（かくらん）を受けていますが，上段の段築と思われる面が検出されています．第5トレンチの盛土も砂が利用されていました．

第8トレンチは後（円）部の下段の根石と葺石が検出されました．

第9トレンチは，前方部中段の根石列と葺石が認められました．

後（円）部について

第8トレンチは戦後の攪乱（かくらん）が著しかったものの，遺構面までは乱されていませんでした．下段の根石とそれに続く斜面の葺石が確認できました．しかし，この平面形をみるかぎりでは，後円形か後方形かを判断することができません．（註1）

第１～７トレンチにおいて，中段ないし上段の段築及び墳丘斜面の葺石の検出に努めましたが，いずれにおいても明確な事実は認められませんでした．ただ，第１・第５トレンチにおいて，段築と推定できるところがみつかっていますが，根石は，発見できませんでした．（註２）

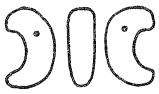
註１　後円形と判断する場合は，京都府椿井大塚山古墳や奈良県桜井市纒向勝山古墳で復元推定されているように倒卵形を呈する可能性がある．

註２　第１トレンチの標高１２.３０ｍで検出されている面は前方部東側斜面で検出されている段築面の標高１１.５０～１２.００ｍにほぼ対応すると考えている．また，第５トレンチの標高１４.５０ｍの面は，前方部墳頂レベル（約１３.５０ｍ）に対応する上段の段築面と推定されるが，面的広がりが他のトレンチで確認できなかったために，推測の域を出ていない．

前方部について

前方部は東側斜面を集中的に調査しました（第９トレンチ）．その目的は中段の段築の平面的な広がりを確かめるためです．

中段の根石列は検出できましたが，段築面はかなりの削平を受けていました．その平面形は，はっきりとした直線ではありませんでした．また，根石の高さについては前方部中央が最も低く，前方部端とくびれ部に向って高くなるという，大変特徴的なあり方をしています．（註１）



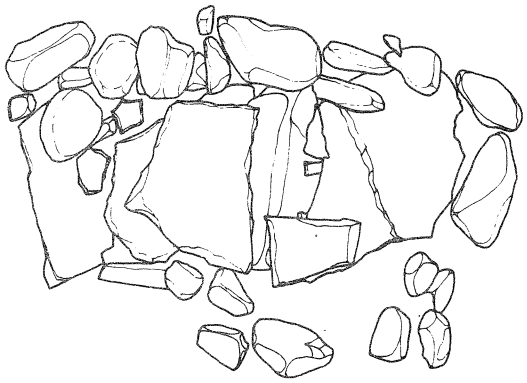
勾　玉

さらに，くびれ部付近に箱式石棺一基が存在していました．これは小型のもので棺の長さ９２.５cm，北側の幅３０cm，南側の幅２５cmです．しっかりと蓋がされていましたが，棺内には土が流れこんでいて，副葬品や人骨片などはありませんでした．しかし，蓋石の真上からは，勾玉１個が発見されました．石材は凝灰質砂岩と花崗岩です．

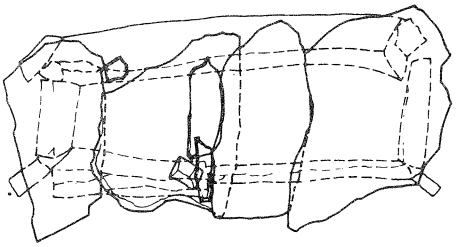
この箱式石棺は中段の段築を掘りこんで造られていることから，古墳がつくられたあとで，追葬されたものと考えられます．

註1　根石のレベルは，現存する前方部南端付近で標高11.85m，中央部で11.52m，くびれ部付近で11.72mを測る．

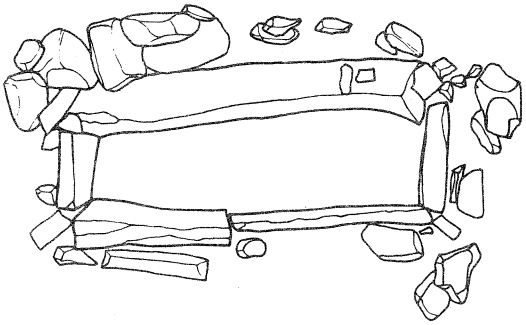
1　蓋石がでてきたところ



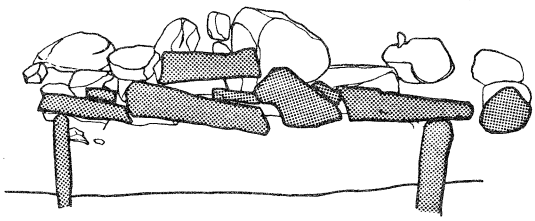
2　一枚目の　蓋石をはずしたところ



3　蓋石をはずし，中の土をだしたところ



4　石棺を横から見たところ



遺　　物

遺物としては，土師器，弥生式土器，勾玉1個が出土しています．

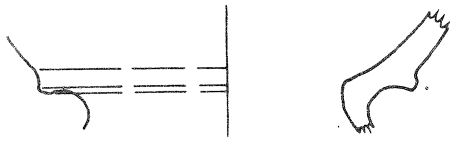
土師器，弥生式土器は，墳丘斜面の流土から出土しました．弥生式土器は，前期～後期まで確認しており，これらは古墳の盛土の中に含まれているものです．

土師器には，内面が一方向のハケ目，外面がタテとヨコ方向のハケ目で調整された厚手のものと鼓形器台（つつみがたきだい）を含む薄手のものがあります．

厚手のものについては，外面に半截竹管（はんさいちっかん）のスタンプ文をもつものがあり，完全な器形復元はできませんでしたが，壺形土器の一部であると思われます．

スタンプ文に対応する内面がやや盛りあがっているものがあります．そして，その部分のハケ目が消えていることから，施文の際に内側に何かをあてていたと考えられます．

スタンプ文土器（又は埴輪）については奈良形桜井市纒向（まきむく）遺跡の「山陰系埴輪」，京都府与謝郡加悦町谷垣遺跡の「特殊円筒形埴輪棺」が知られています．しかし，スタンプ文



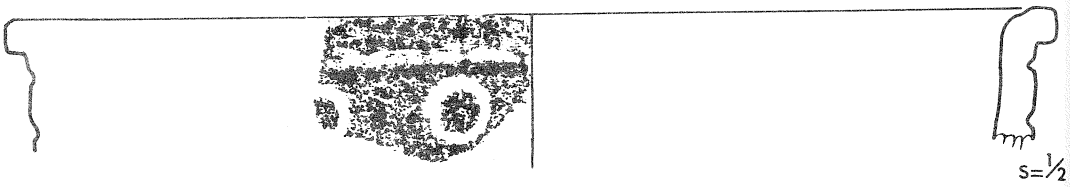
鼓形器台　　s=1/2

s=1/2

s=1/2

土器は山陰地方の弥生土器や古墳時代初頭の土器に顕著にみられることから，当古墳例も山陰系の影響を受けていると考えられます．

勾玉の材質はやや質の悪い硬玉で形態，製作技法から4世紀後半（古墳時代前期）のものと考えられます．



墳形・規模について

墳形については，下段の根石と斜面が確認されたものの，前方後円墳であるのか後方墳であるのか判断できません．それはこの古墳が本来少し変った形をしていたことによるものと思われます．攪乱や雨水による変形が著しいものの，本来の姿を明らかにする手がかりはまだ土中に埋もれているものと思われます．

箱式石棺

市内での発見は2例目です．他の1例は垂水区伊川谷町潤和の延命寺古墳で，主体部が凝灰質砂岩の箱式石棺でした．この石棺も遺物がなく，時期は，はっきりしていません．摂津での発見例は，たいへん珍しく貴重な資料といえます．

箱式石棺は，播磨に若干例と但馬などに多くみられますが，この埋葬方法は，弥生時代にはじまり古墳時代前期から後期にかけて長く利用されています．

築造時期

はっきりとした手がかりは，今回の調査によって得ることはできませんでしたが，スタンプ文土器や箱式石棺の存在，勾玉などから考えて，およそ4世紀後半と考えられます．

処女塚古墳の評価

この古墳は何と言っても「海」を意識して築造されている点が，最も重要な特徴であると思われます．両求女塚古墳をはじめ，県下では，市内の五色塚古墳（前方後円墳194m），加古川市の聖陵山古墳（前方後円墳80m），姫路市おたび山2号墳（円墳），

同じくおたび山６号墳（前方後円墳），揖保郡輿塚（こし）古墳（前方後円墳１１０ｍ）など海岸線沿いに前・中期古墳が点々と存在しています。

岡山県・広島県をみても，海岸沿いや小島に１００ｍ前後の前方後円墳が点在しており，瀬戸内海の海上の道と密接な関係をもっていたと考えられます。

神戸はこの当時も，海から見られていたのではないでしょうか。

番号
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N

周辺遺跡地名表

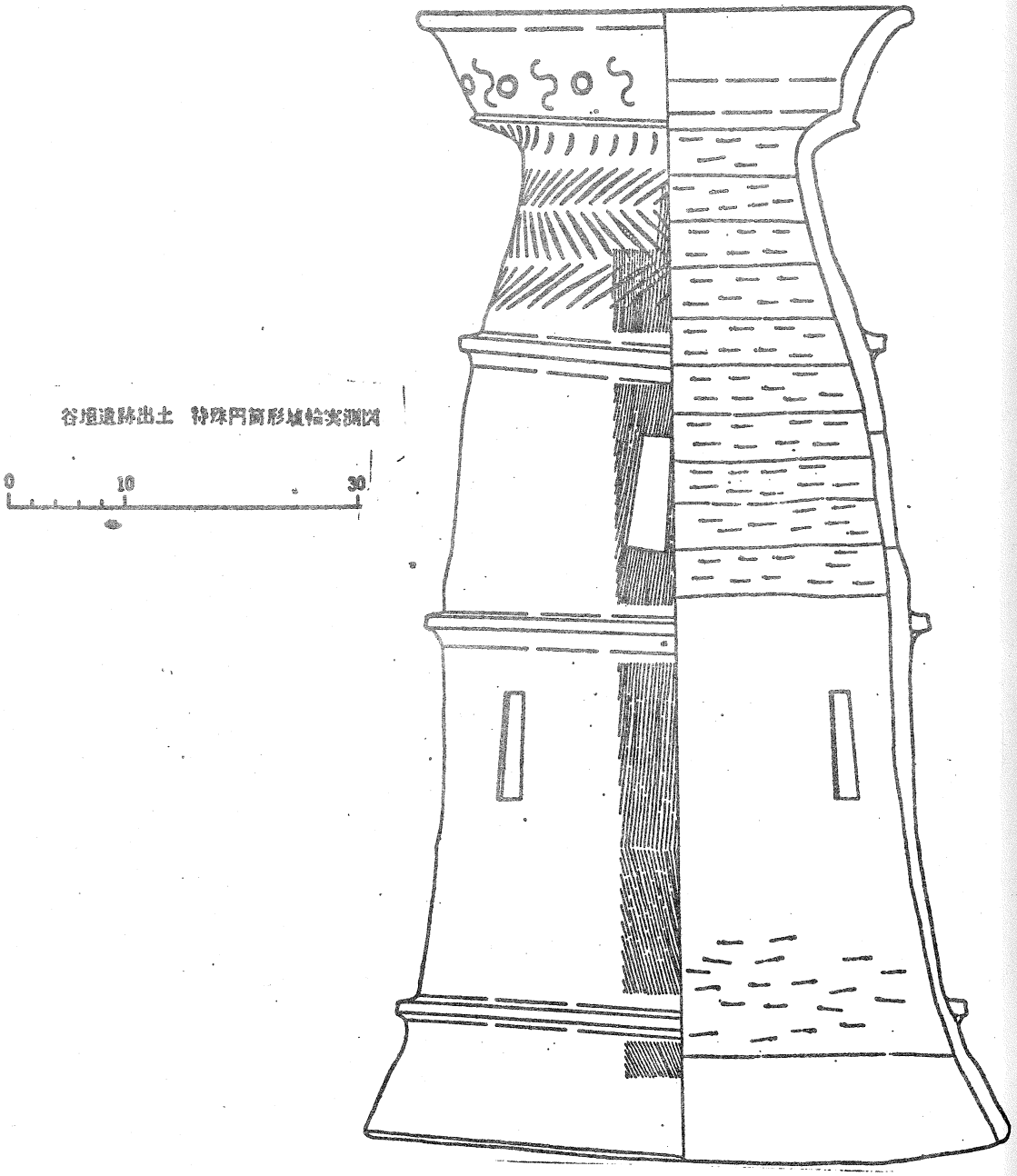
番号	遺跡名	墳形	規模全長	出土遺物等	備考
A	西求女塚	前方後円	東面約90m		封土有
B	処女塚	前方後円	南面約69m	葺石，箱式石棺，勾玉	〃
C	東求女塚	前方後円	西面約40m	鏡6，車輪石，刀	消滅
D	伊賀塚			詳細不明	〃
E	坊ヶ塚	前方後円	南面約40m	詳細不明	〃
F	ヘボソ塚	前方後円	西面約60m	鏡6，石釧，車輪石，玉類	〃
G	鴨子ヶ原群集墳			詳細不明	〃
H	岡本梅林群集墳			刳抜小型石棺，家型石棺，刀，土器	〃
I	生駒群集墳（神戸女子薬大構内古墳）	円		横穴式石室	半壊
J	城山南麓群集墳	円		横穴式石室	〃
K	三条群集墳				
L	一王山			鏡2，勾玉，鉄鏃，管玉，小玉，甲冑，鉄鏃	消滅
M	親王塚	円？	約36m	鏡4	現存
N	庚申塚			詳細不明	消滅

周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	立地	出土遺構・遺物等
1.	篠原	縄文晩期 弥生中・後		土器
2.	伯母野山	縄文後期 弥生中期	山頂 山腹	住居址，壺棺，土器，石器，鉄器
3.	桜ヶ丘(B)	弥生中期 (旧石器)	尾根	住居址，土器，石器
4	桜ヶ丘 (中新田)	縄文前期	山腹	(玦状耳飾)
5	桜ヶ丘	弥生	山腹	銅鐸14口，銅矛7口
6	滝ノ奥	弥生 平安 (旧石器)	尾根	現在調査中
7	郡家大蔵	弥生後期 奈良・平安		掘立柱建物，土器
8	赤塚山	弥生中期	山腹	土器
9	荒神山	弥生中・後	尾根	住居址，土坑，土器，石器
10	岡本梅林	弥生	山腹	土器，石器
11	金鳥山	弥生中期	山腹	住居址，土器，石器
12	保久良神社	弥生中期 奈良，平安	山腹	土器，石器，銅矛，瓦，
13	生駒	弥生	山腹	銅鐸
14	森北町	弥生中後	山麓	土器，石器
15	三条岡山	弥生後期 鎌倉，室町		土器 陶器
16	山芦屋	縄文早期		押型文土器，石器

周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	時期	立地	出土遺構・遺物等
17	会下山	弥生中・後	尾根	漢式三角鉞、住居地、墓地、土器、石器
18	朝日ヶ丘	旧石器 縄文前期	……	ブレイド 石鏃、石匙
19	深江	弥生	扇状地	土器、石器
20	溜ヶ森	弥生	山腹	銅鐸
21	坂下山	弥生中期	山腹	土器、石器
22	森興	弥生後期	尾根	土器
23	森	弥生	山腹	銅鐸



谷墳遺跡出土　特殊円筒形埴輪実測図

図2　処女塚古墳周辺の遺跡分布図

図3　処女塚古墳トレンチ配置図

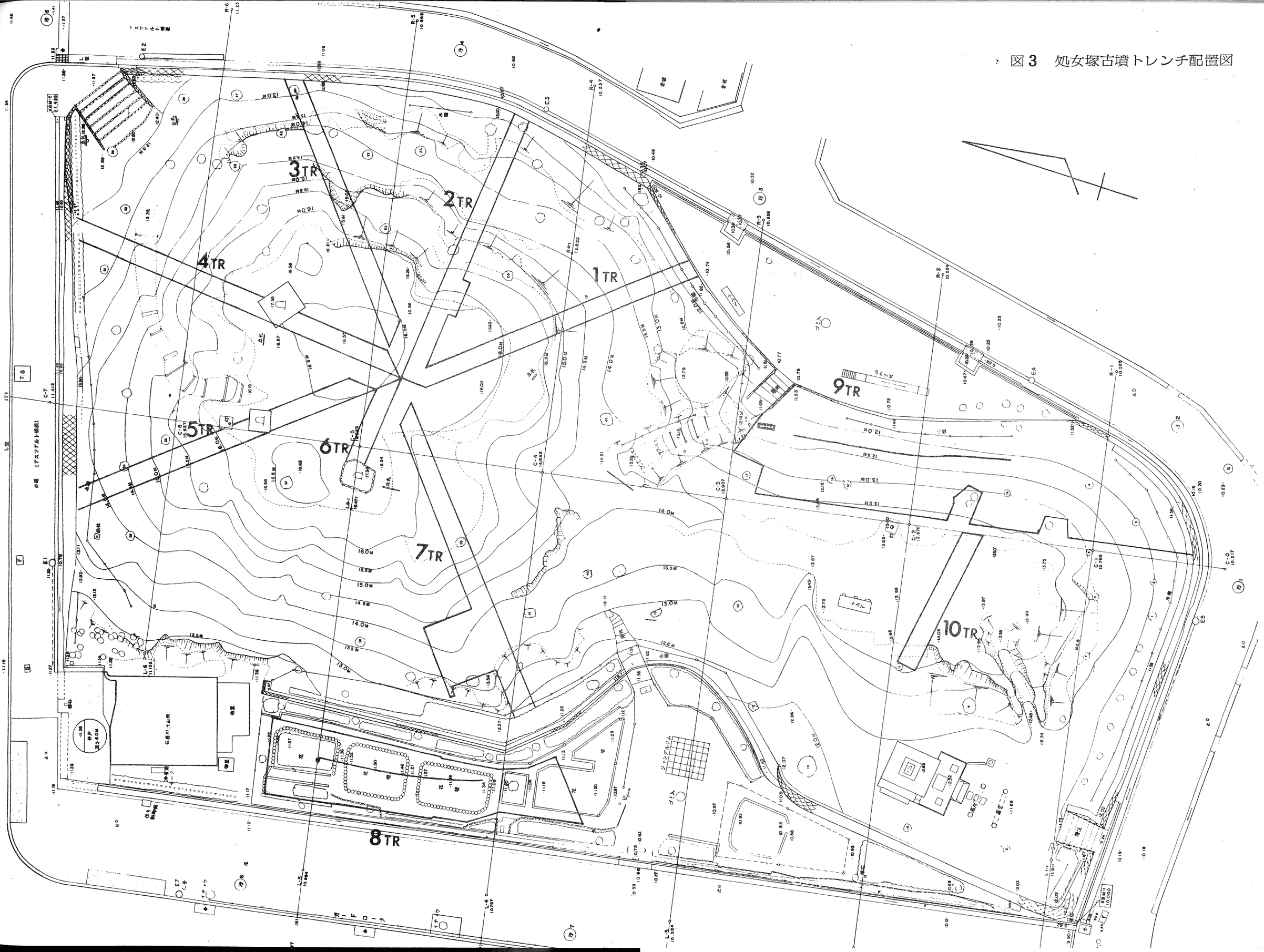
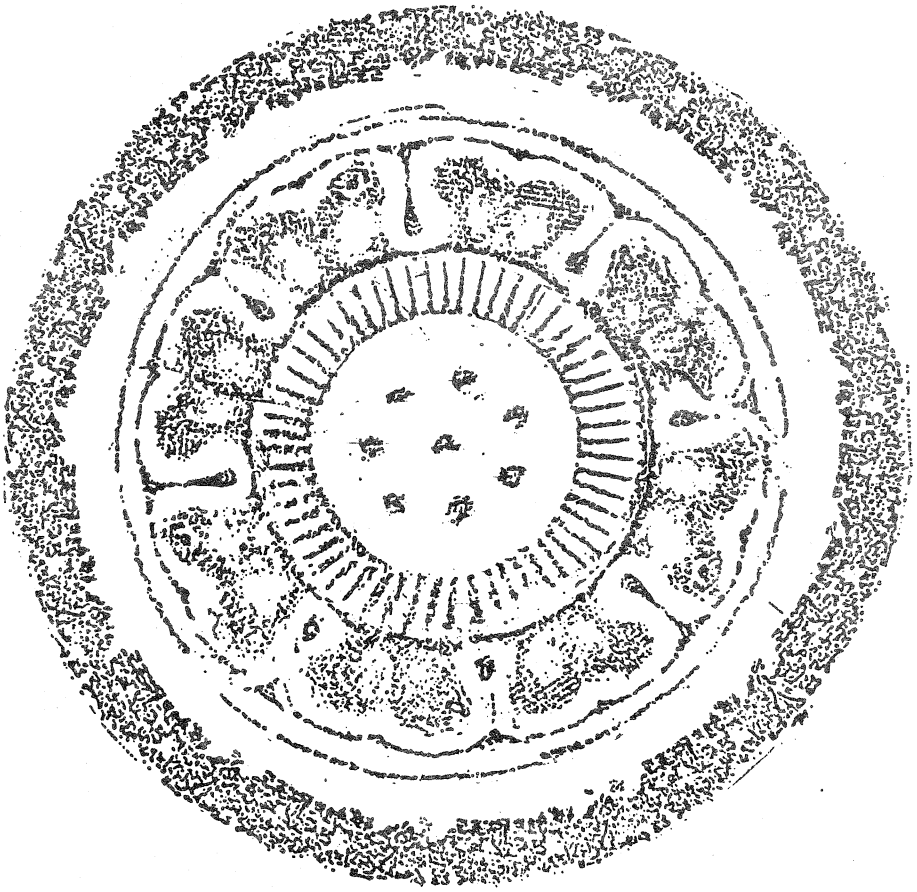


図 4　処女塚古墳前方部東斜面上段葺石平面図

神出古窯址群　宮ノ裏支群　現地説明会　資料



昭和56年8月30日

神戸市教育委員会

表紙は、宮ノ裏支群出土の瓦をもとに復元したものです。

神出古窯址群宮ノ裏支群の調査には、神戸市神出土地改良区、神戸市農政局・調査に参加いただいたり、事務所の土地を借していただいた地元の方々の協力を得ました。

また、神戸市文化財専門委員会の野地修左・小林行雄・樽上重光の三先生、それに、奈良国立文化財研究所　上原真人氏・兵庫県教育委員会　大村敬通氏の指導を得ました。

現地説明会資料作成にあたっては、今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」播磨考古学研究・上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」古代研究13・14　真野　修「雌岡山周辺の古窯址群（1）」神戸古代史1－3　「魚住古窯ニュース」魚住古窯址調査事務所　原口正三「須恵器」日本の原始美術などの文献を参考にしました。

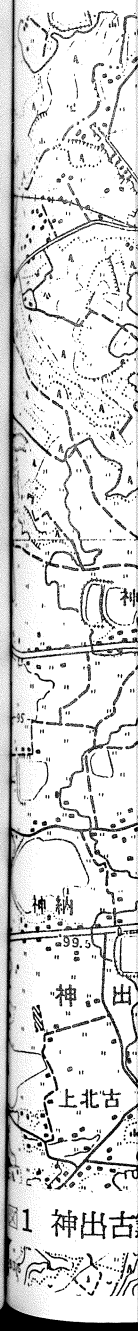


図1 神出古

はじめに

神出古窯址群は，神戸市垂水区神出町にあり，平安時代後期（１１世紀末ごろ）から鎌倉時代（１３世紀）にかけての窯址が存在していることで知られています．

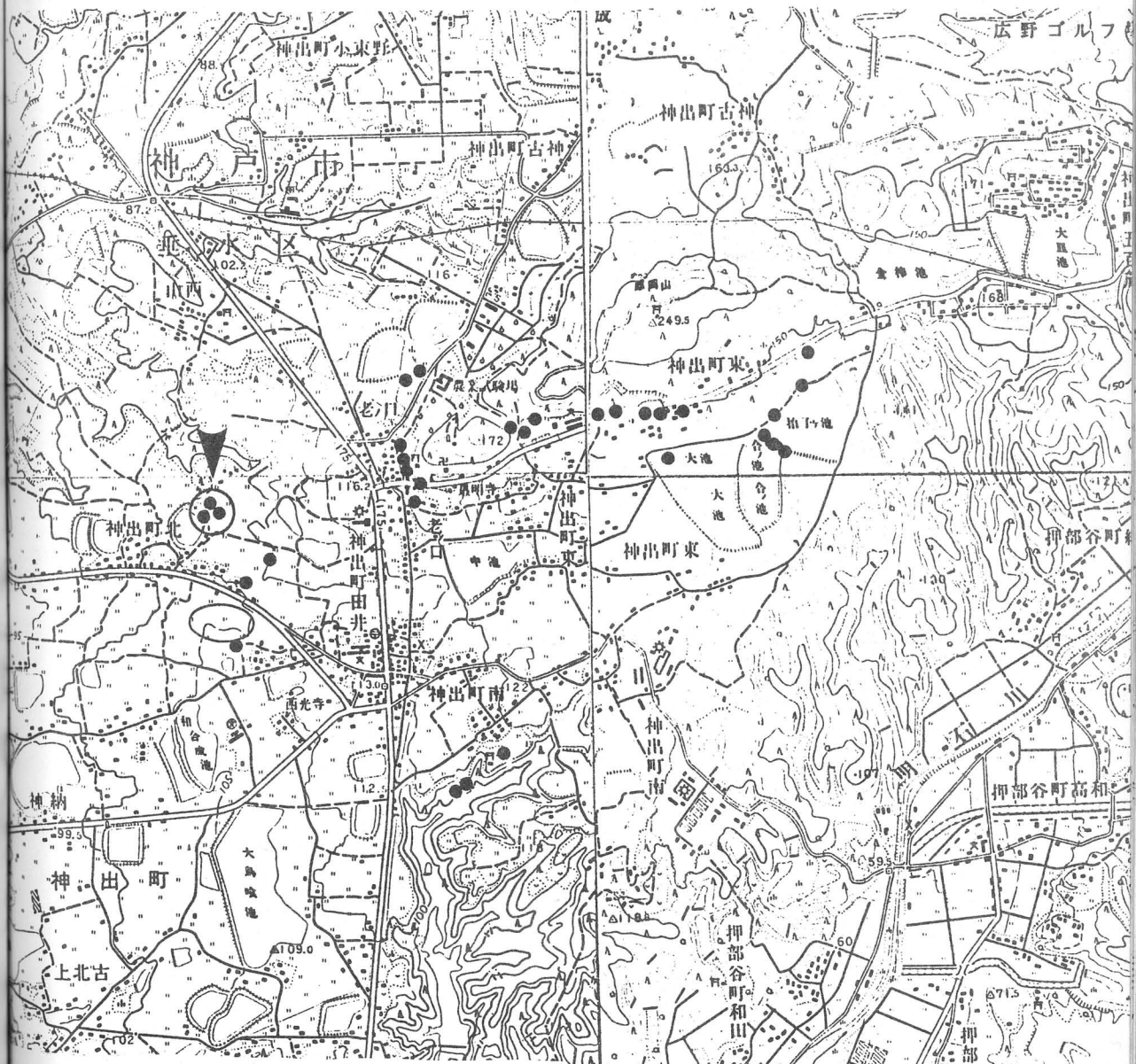
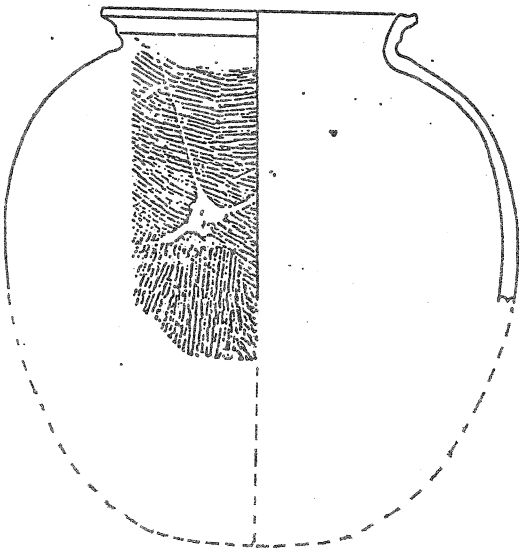
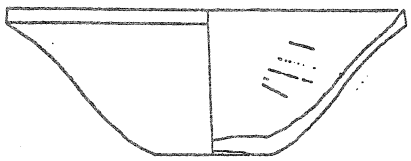


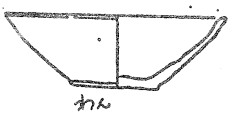
図1 神出古窯址群窯址分布図　　● は窯址



須恵器甕



須恵器 捏鉢



須恵器 椀

須恵器 皿

現在までの分布調査で，雌岡山・雄岡山の南斜面，神出町東・北・南，神出町老ノ口の一帯に窯址が確認されています．

これらの窯址は，２基から数基が集まっており，小さなグループに分けることができます．

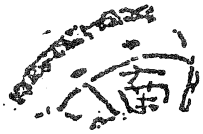
古窯址群を，拍子ケ池支群，茶山支群，老ノ口支群，宮の裏支群などと小字名をとってグループ分けを行っています．

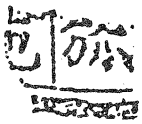
現在までのところ，表面採集などで神出古窯址群から発見されている遺物は，須恵器甕，捏鉢，椀，皿などの容器のほか瓦などがあります．

神出古窯址群で焼かれた瓦は，京都府下の数ケ所で出土しており，兵庫県下では，小野浄土寺（小野市）で発見されています．また，須恵器の甕，捏鉢は，県内での発見はもとより，瀬戸内海に面した各県下，和歌山県下，京都府下，大阪府下の各地の遺跡で発見されています．

しかし，今までの資料は表面採集のものがほとんどで，神出古窯址群の実態がよくわかりませんでした．

小野浄土寺出土





拍子ケ池出土

環　　境

ところが，昭和５４年度から神出地区の農業基盤整備事業が開始されることになり，工事に先だち遺跡分布調査を行いました。その結果，須恵器片を多量に採集した田圃を数ケ所発見しました。今年度，調査を実施している宮ノ裏支群もその内の一つで，遺跡確認の坪掘調査の結果，田圃の下に窯が残っていると考えられました。

そのため，工事で窯址がこわされないようその実態を調べる発掘調査を行うことにしました。

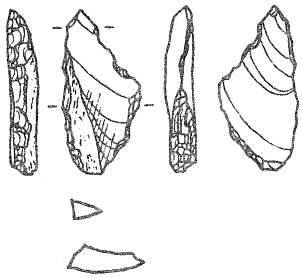
調査は，昭和５６年６月から開始し窯址の位置，方向，形態・灰原（はいばら）の広がりを知ることを目的として行っています。

神出町周辺は，雄岡山（おっこやま）・雌岡山（めっこやま）から西方に向いて緩やかに傾斜する旧扇状地が隆起した地形で，印南台地と呼ばれる洪積世の高位段丘面上にあります。

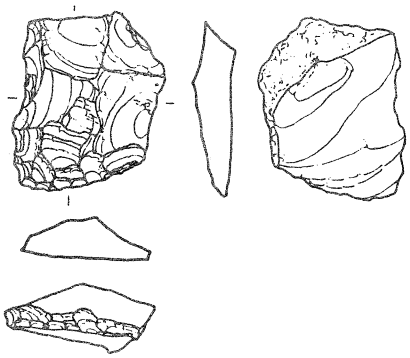
この周辺では，旧石器時代から平安時代の遺跡が数多く，遺物も採集されています。

旧石器時代の遺物は，雌岡山（めっこやま）の南側の拍子ケ池，笹池，大池，東側の金棒池などで採集

旧石器時代



石製の槍先　金棒池出土



石製ナイフ　金棒池出土

されています．これらの遺物は，石製の槍先やナイフなどで，今から約２万２千年から１万年前のものです．このことから当時の人々が，このあたりを獣の狩場として，生活していたことがわかります．

この周辺では，次の縄文時代（約１万年から2,３００年前）や弥生時代（2,３００年前から1,８００年前）の石器も見つかっていますが，土器が少ないことから，あまり多くの人々は住んでいなかったようです．

近くにある縄文時代の遺跡としては，押部谷町元住吉山遺跡（後期）があり，炉跡が発見されています．

平野町常本遺跡では，弥生時代前期（約2,２００年前）の住居址がみつかっています．

明石川の東岸，西神ニュータウン予定地内では，山頂に弥生時代中期の住居址が，数多く発見されています．

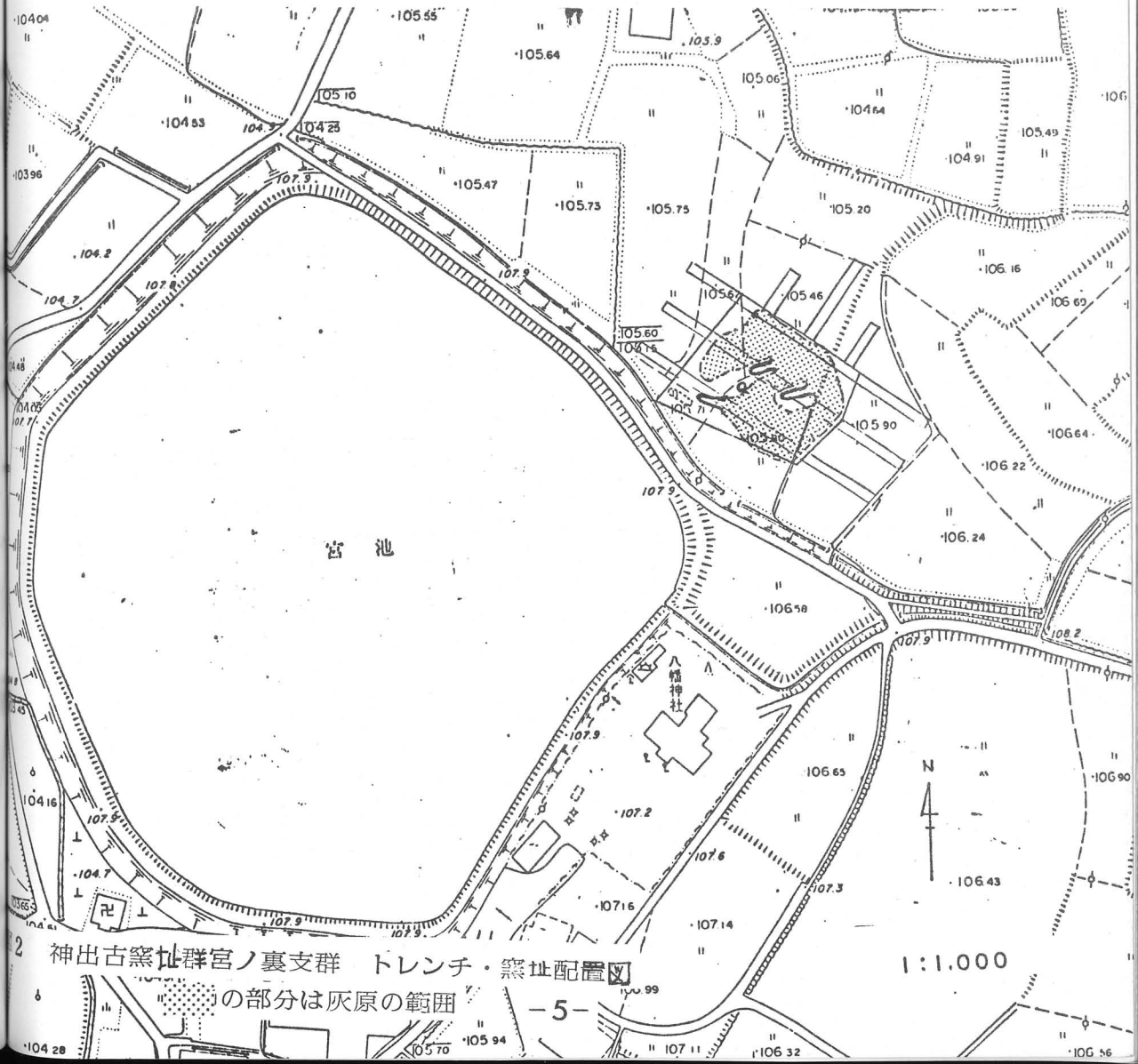
また，明石川流域には，多数の古墳があり，古墳時代後期の住居址が黒田遺跡などで発見されています．

神出町にある古墳としては，金棒池の前方後円墳や雌岡山頂の古墳群などが知られています．

なお神出町一帯に開墾の手が加えられたのは，近世になってからのことです．

宮ノ裏支群の概要

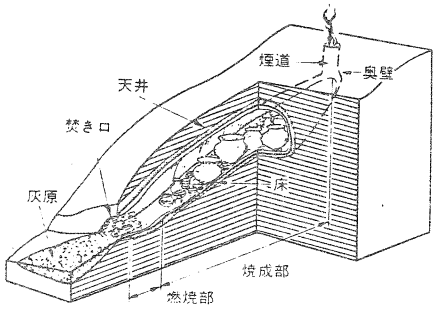
調査は坪掘の結果をもとに，幅２ｍ・長さ６０ｍのトレンチを３本設定して行うことにしました．その結果，２基の窯址と灰原（はいばら）を発



神出古窯址群宮ノ裏支群　トレンチ・窯址配置図

の部分は灰原の範囲

見しました。灰原の範囲は，東西約３５ｍ・南北約３０ｍにおよんでいます。そのため，調査範囲を拡張し，窯址全体を検出することにしました。調査を進めるうち，さらに窯址が２基発見され，灰原の堆積状態も明らかになりました。



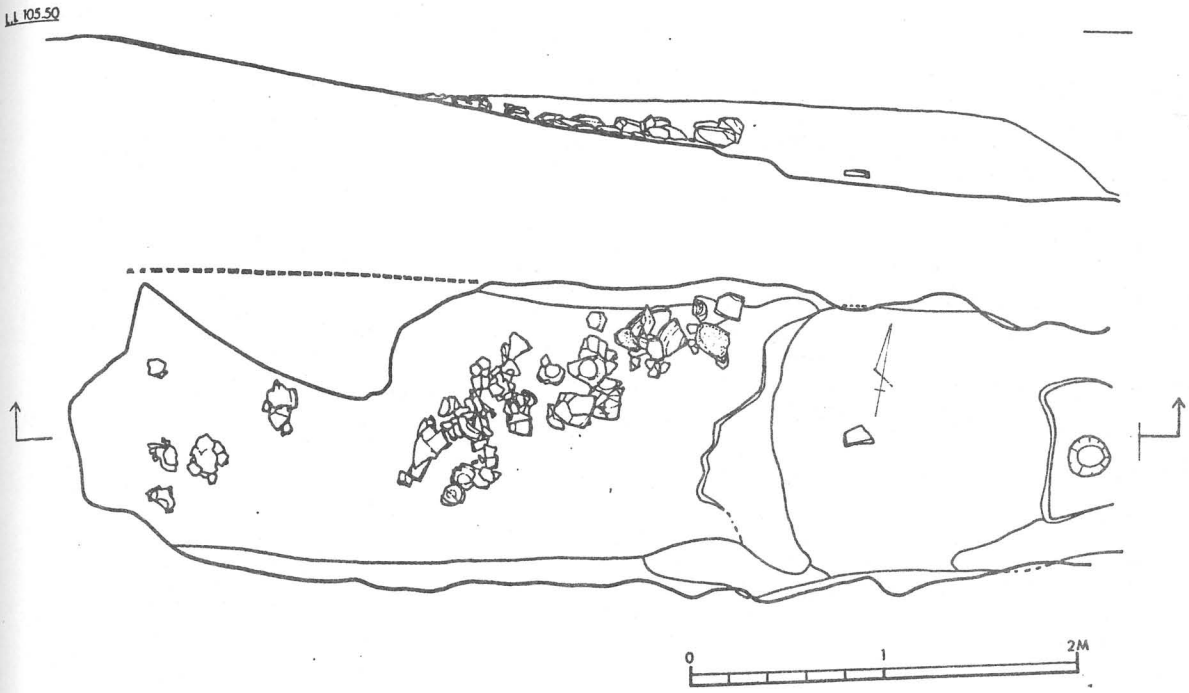
須恵器窯の模式図

窯址４基のうち，３基は穴窯[註1]と呼ばれる長細い窯ですが，１基は非常に小型のもので「ダルマ窯」[註2]と呼ばれているものです。

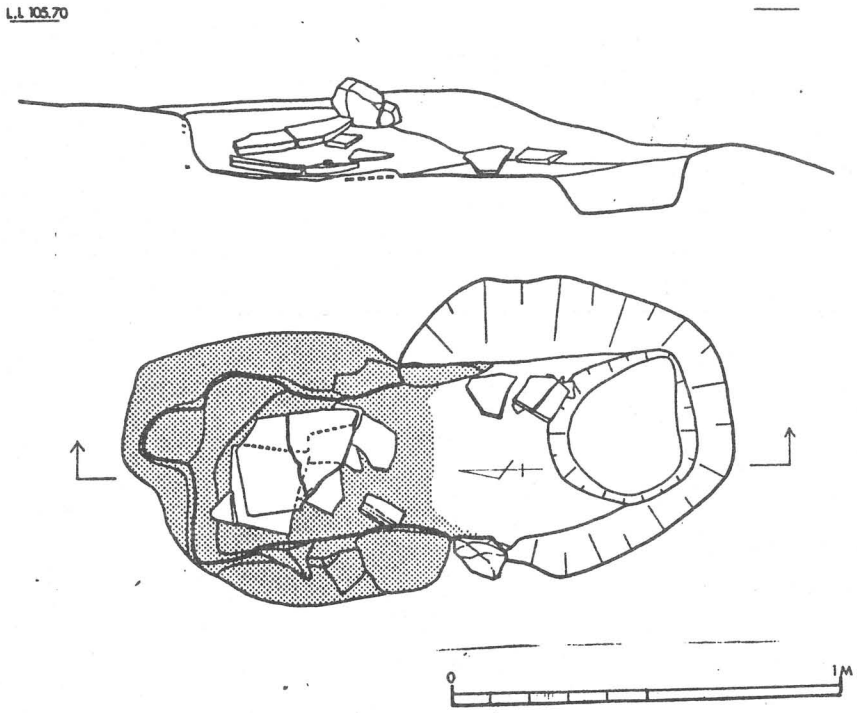
この付近は調査前，平担な田圃でしたが，調査によって北西部から南東部に入り込んだ小さな谷であることがわかりました。当窯址群はこの谷の最も奥の部分に位置しています。

１号窯・２号窯はこの谷に直角に交わる方向（ほぼ西向）に築かれており，灰原によって谷の一部が埋っています。１号窯と２号窯の間は地山を谷状に掘り込んでいます。ここから出た土を盛土した部分に１・２号窯が作られています。

３号窯・４号窯（ダルマ窯）は，１号窯・２号窯の西に位置し，焚口を東に向けて築かれています。１号窯・２号窯から続く谷状の掘り込みに灰や土器を捨てています。



宮ノ裏支群1号窯　遺物出土状態



宮ノ裏支群4号窯（ダルマ窯）　実測図

各窯とも使用中に，つぶれた所を2～3回，修築して使用した痕（壁の貼りかえ）が見つかっています．

それぞれの窯の大きさは，

	現存長	最大幅（焚口付近）	現存高
1号窯	5.2 m	1.8 m	0.4 m
2 〃	4.7 m	1.7 m	0.4 m
3 〃	1.5 m	1.5 m	0.2 m
4 〃	0.8 m	0.5 m	0.2 m

となっています．

各窯址とも，焚口から燃焼部は残っていますが，煙道部や天井部は，開墾時に削られたようです．

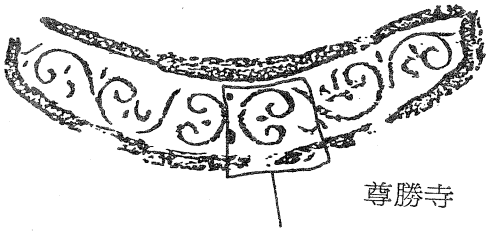
註1. 傾斜地の下方から燃焼室，焼成室をトンネル状に掘り込み，煙道へと導いた形態の窯を，こう呼びます．

註2. 中段にすのこ状の桟を架け，その上に製品を置き，下から燃焼したと思われる構造の窯で，外形がダルマ形を呈したと想定されるところから，仮りにこう呼ん

でいます．

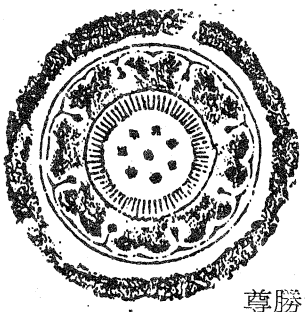
明石市魚住古窯でも，同様の例が発見されています．

出土遺物

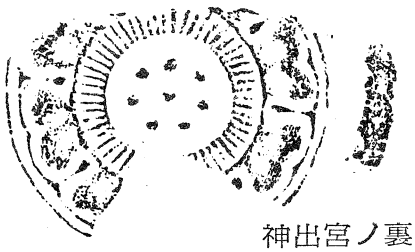


尊勝寺

神出宮ノ裏



尊勝寺



神出宮ノ裏

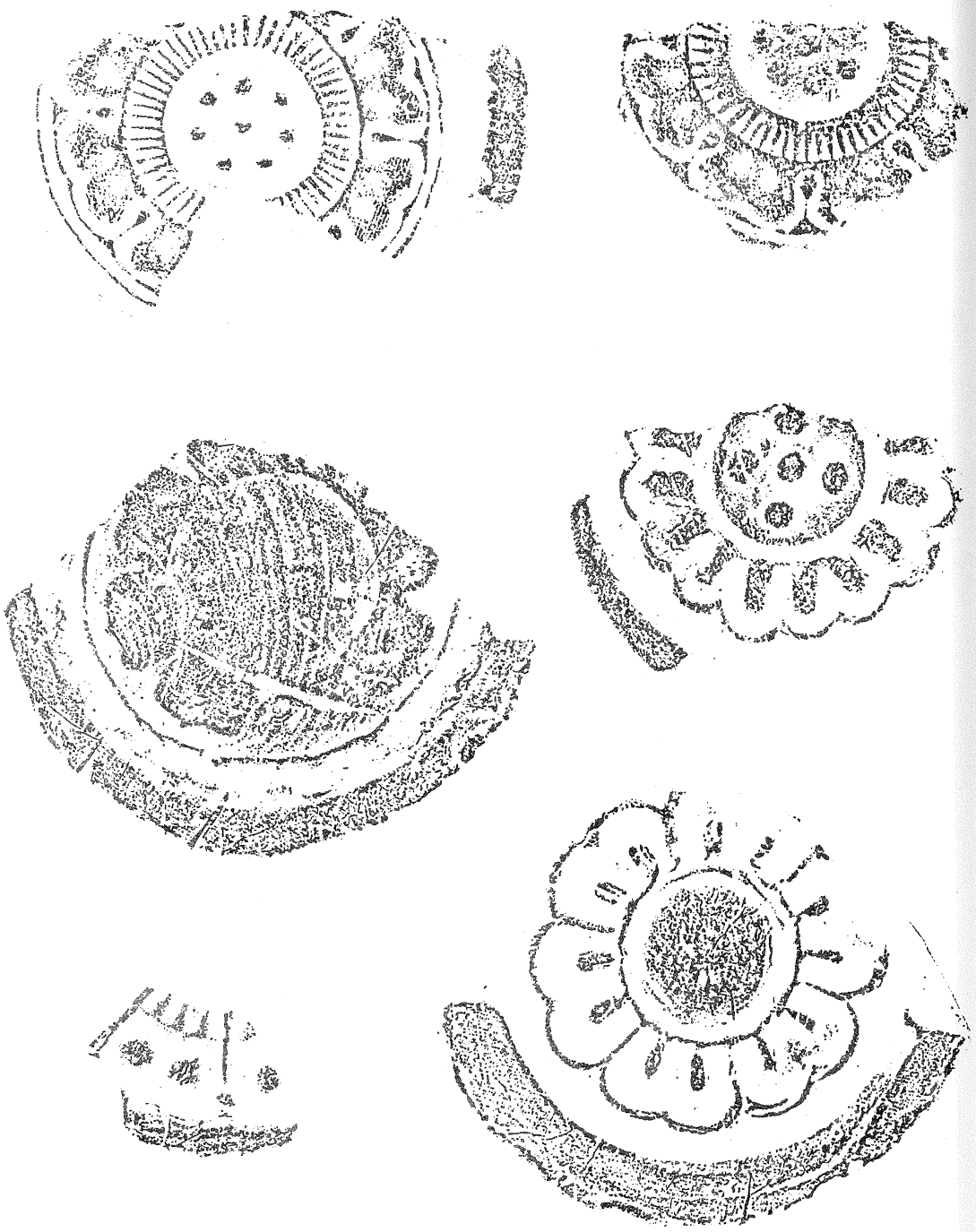
尊勝寺出土の同文の瓦

今回の発掘調査で出土した遺物は，整理箱（２８ℓ）にして８５０箱の須恵器と瓦類です．まだ，整理が進んでいませんので，正確な出土遺物の比率はわかりませんが，瓦類は土器類の約１０分の１程度だと思われます．

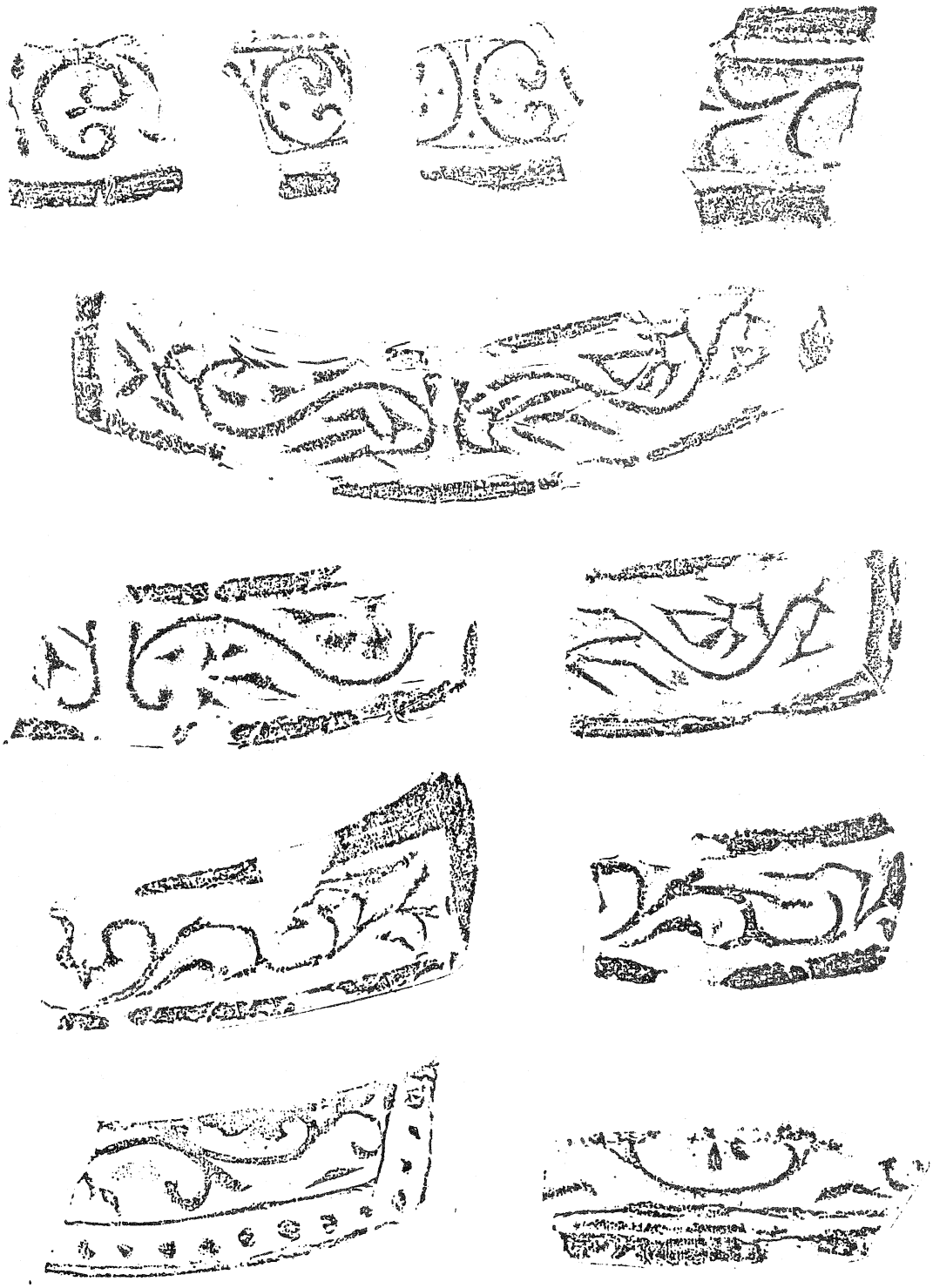
出土している須恵器には，捏鉢（すり鉢の一種）・椀・小皿の器種がありますが，捏鉢が多く，椀や小皿は少ないようです．甕や羽釜はほとんど見つかっていません．

瓦には丸瓦や平瓦のほか，軒平・軒丸瓦など各種の瓦が発見されています．軒丸瓦には各種の蓮華文や巴文があり，軒平瓦には各種の唐草文や巴文のものがあります．

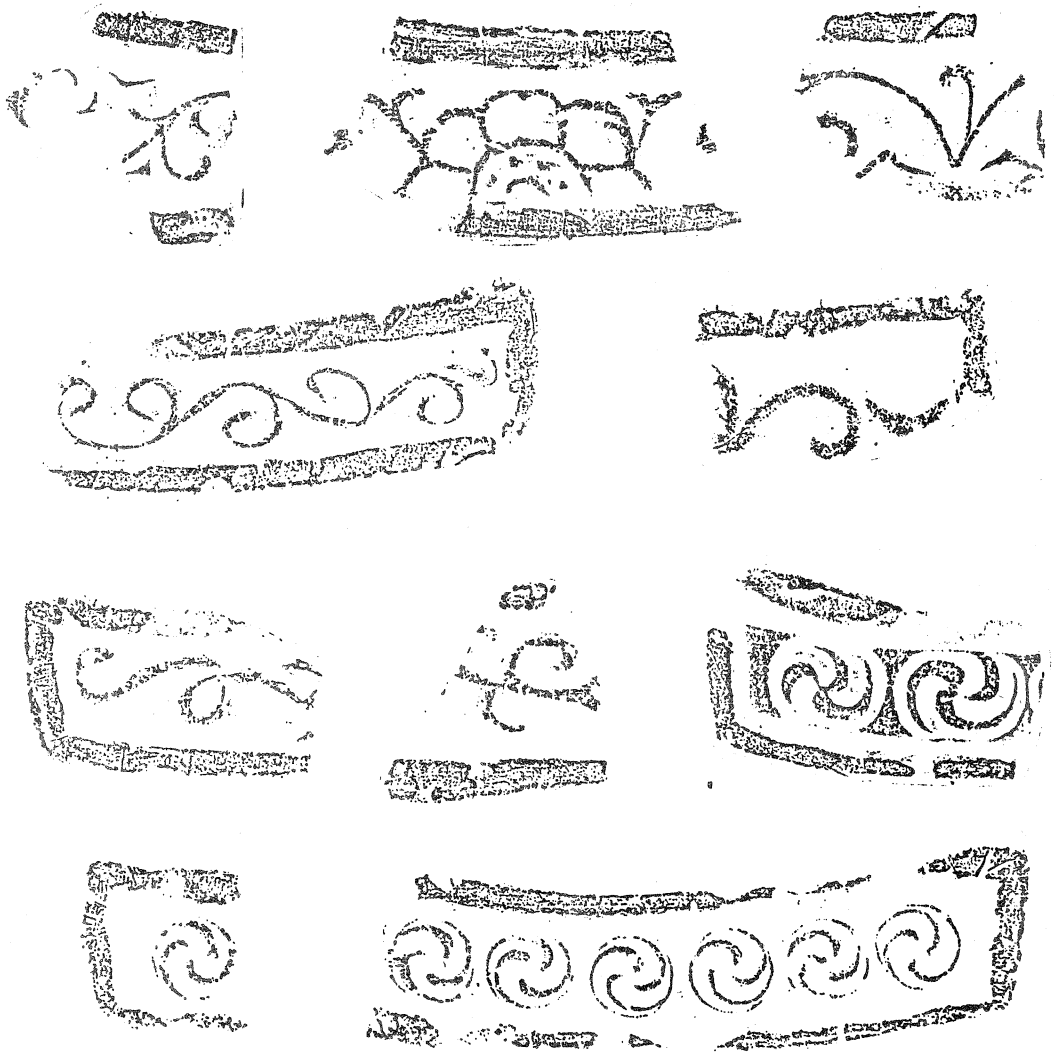
これらの瓦は京都の尊勝寺や法金剛院・鳥羽離宮南殿に葺かれたものと同一の文様のものがあり，ここで焼かれた瓦が，遠く京都で使われていたことが知られます．これらの瓦や須恵器は，その文様や形から，平安時代末（１２世紀頃）の院政期のものと思われます．



宮ノ裏支群出土　古瓦拓影１　(S＝½)



宮ノ裏支群出土　古瓦拓影２　（S＝½）



宮ノ裏支群出土　古瓦拓影３　(S＝½)

ま　と　め

今回の調査の結果をまとめてみますと

① ４基の窯址と，灰層・灰原の調査結果から１・２号窯が古く，３・４号窯が新しいと考えられます．

１・２号窯は，１２世紀中ごろ，３・４号窯は，１２世紀後半に製品を焼いていたと思われます．

② 今回発見した窯址の構築方法は，平担な地山を削り，削り取った土を盛り上げた後，掘りくぼめて窯を造っています．

その結果，窯は他地域の窯に比べ傾斜がゆるくなっています．

傾斜角度は，1号窯が9度，2号窯が7度と非常にゆるやかです．

そのため，調査前に考えていたより窯址の残存状況がよく，この様子では，神出地区の田圃のどこに窯が残っているか，表面で判断することは不可能です．

私達の考えている以上に，窯が築かれ，現在も田圃の下に眠っていると思われます．

③ 神出古窯址群では，瓦と須恵器が同じ窯で焼かれているであろうと以前から推定されていましたが，今回，窯址内より瓦と須恵器が同時に出土し，瓦陶兼用窯であることが証明されました．

④ 灰原から出土する須恵器は，捏鉢がほとんどで，甕，椀，皿などはほとんど見つかりません．宮の裏支群では，捏鉢を主に焼いた窯址群であろうと考えられます．

⑤　瓦は，窯址内や灰原から数多く発見されましたが，京都府下では，寺院址，離宮址から発見されています．

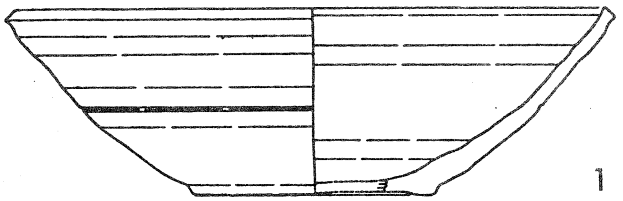
寺院址や離宮址は，文献から造られた年代がはっきりしており，瓦の焼かれた時代を決めることができます．このことから，同じ窯で焼かれた須恵器についても，年代を明確にすることができます．今までのように，表面採集の瓦や須恵器では作られた年代について推測の域を出ませんでしたが，確かな年代を決めることができた意義は大きいといえます．

また，兵庫県下や京都府下で出土している寺院址や神社，離宮址の瓦が，どの支群で焼かれたか，明確にすることができました．

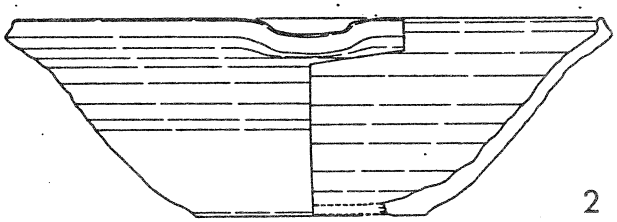
このことは，生産地と消費地を考える上で重要な意味をもっています．京都府下で出土しているところは，当時の朝廷と関係をもつところばかりで，神出地域と朝廷との政治的なつながりを考える上で重要な資

料が得られたことになります．

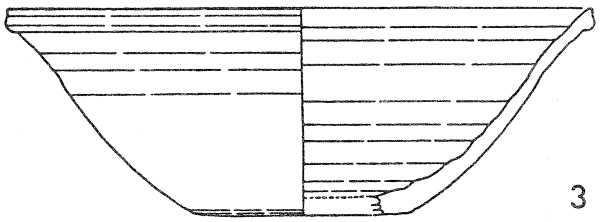
ただ，神出古窯址群のうち，一支群だけの資料のため，まだわからないことも多くあります．研究の一歩を踏み出したところです．今後の神出地域の調査に期待したいと思います．



1



2

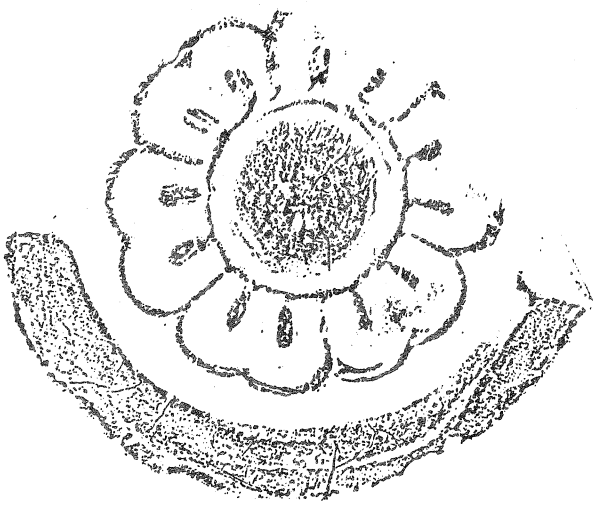


3

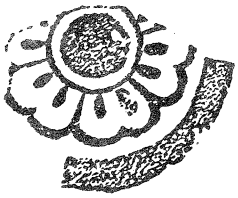
宮ノ裏支群 出土 捏鉢（こねばち），

生産地・消費地　出土の同文の瓦

生産地

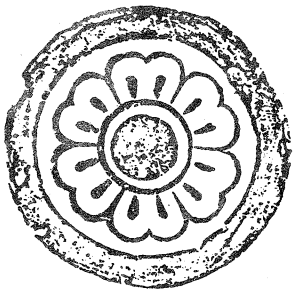


神出宮ノ裏

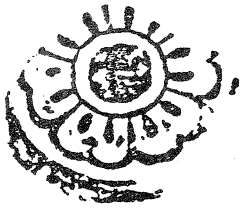


高砂市魚橋瓦窯

消費地



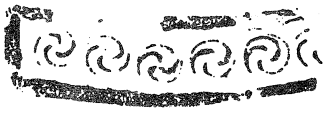
京都　鳥羽離宮



京都　浄瑠璃寺

神出宮ノ裏

高砂市魚橋瓦窯

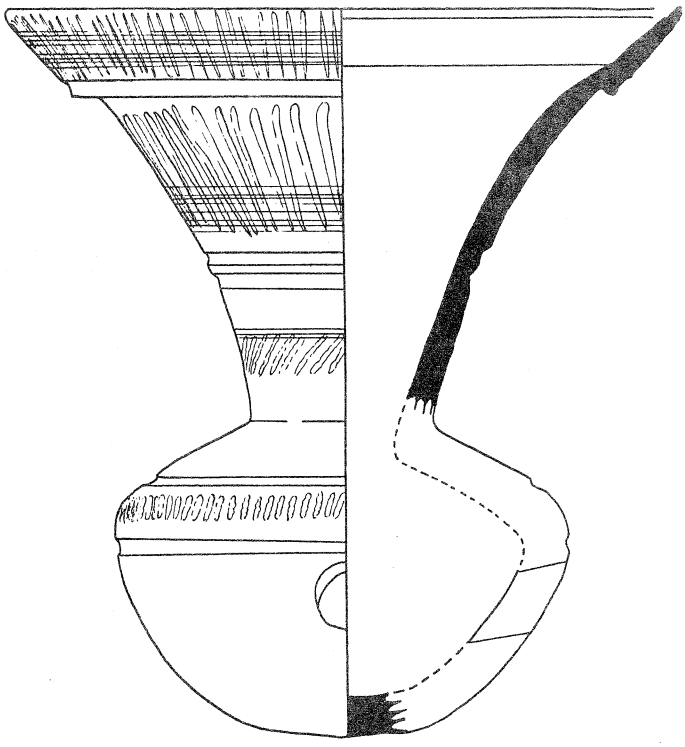


京都　法金剛院

舞子古墳群西石ケ谷3号墳・6号墳

現地説明会資料

神戸市垂水区舞子坂二丁目所在



昭和56年12月6日

神戸市教育委員会

西石ケ谷３号墳の発掘調査については、電気通信共済会・大末建設の協力を受けました。
また西石ケ谷６号墳の発掘調査では神戸市都市計画局の協力を受けました。

表紙説明
西石ケ谷３号墳から出土した須恵器 瓶
はそう

1　舞子古墳群

神戸市垂水区舞子坂２丁目，３丁目及び舞子陵に所在する後期古墳を総称して舞子古墳と呼んでいます．

かつては，数多くの古墳がこの舞子丘陵上に存在していました．ところが，昭和４０年以降，舞子坂２丁目，３丁目に存在した古墳があいついで姿を消し，今では２０基を残すのみとなりました．

古墳は，尾根ごとに数基がまとまって存在しており，西から大歳山支群，東市ケ坂支群，西市ケ坂支群，毘沙門塚支群，西石ケ谷支群，東石ケ谷支群，尼ケ谷支群，山田台支群，舞子台支群，星陵台支群に分けられます．その範囲は東西１.５㎞南北８００ｍにも及んでいます．

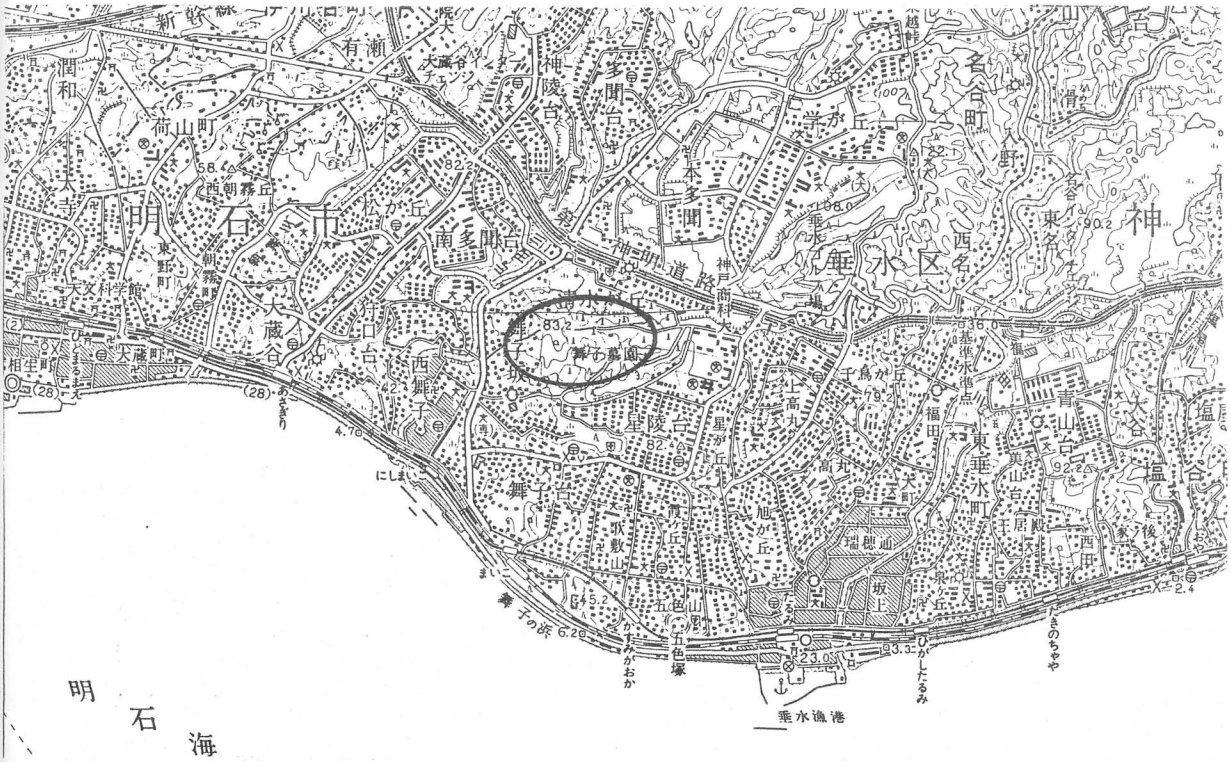


図１　舞子古墳群位置図

1：25000

2　従来の調査

これまで，舞子古墳群では，昭和３９年に尼ケ谷支群の３基，昭和５２年に東市ケ坂支群の２基，昭和５５年に西石ケ谷支群で４基の調査を実施してきています．いずれも横穴式石室を内部主体とする古墳で，６世紀前半～６世紀末にかけて築造されたことが判明しています．

3　今回の調査

今回は西石ケ谷支群に属する３号墳，６号墳の調査を実施しました．３号墳は，舞子丘陵の頂部から南へのびる尾根のなかほど（標高６２ｍ）に位置し，６号墳は，そこから派生したやせ尾根の先端，標高５６ｍのところに位置しています．

(1)　西石ケ谷３号墳

古墳の形と大きさ

３号墳は墳丘がほとんど削平され，古墳の西側がわずかに盛土を残しているのみです．推定される古墳の大きさは，直径約１２ｍで，円墳と考えられます．内部主体は南に開口する右片袖の横穴式石室で，その大きさは別表に示すとおりです．

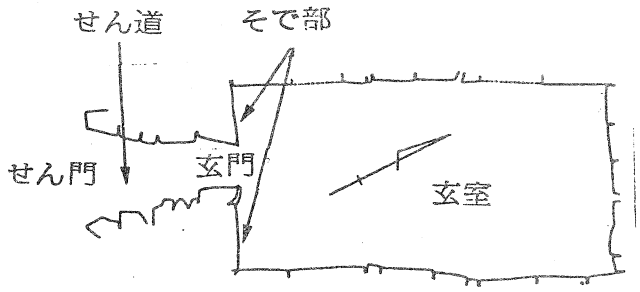
羨道内から東側の谷に向けて排水溝が掘りこまれていました．また，葺石，埴輪などの外部施設は発見されませんでした．

被　葬　者

３号墳には，玄室右側壁ぞいに一体，羨道内に一体の被葬者が確認されました．少くとも２人以上の人が葬られていたと思わ

れます．羨道内の一体は，赤色顔料を塗布した木棺に納められていました．木棺は，幅６０㎝，長さ２.１ｍで棺内には刀子（小刀）が副葬されていました．

横穴式石室の細部名称



出土遺物
（別表参照）

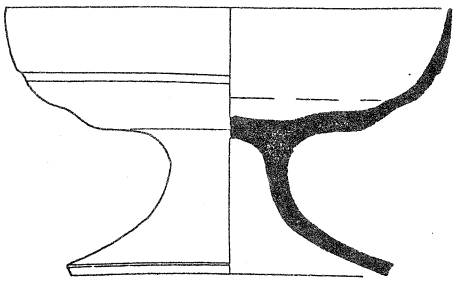
遺物は玄室内と羨道内から出土しています．これらは，死者に供えられた数多くの須恵器や鉄製の馬具や武具などの他に，被葬者が身につけていた金環．棺に打ちつけられた釘やかすがいなどです．

築造時期

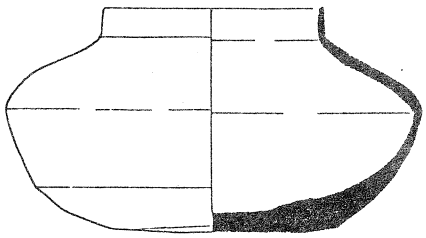
古墳のつくられた年代は，出土した須恵器から６世紀のおわりごろと考えられます．

石室の規模

	玄室長	玄室幅	玄室残存高	そで幅	羨道長	羨道幅	羨道残存高
３号墳	３.７	1.3	0.８	0.3	3.2	0.9	0.9
６号墳	4.4	1.1	1.3	0.4	3.4	?	0.7

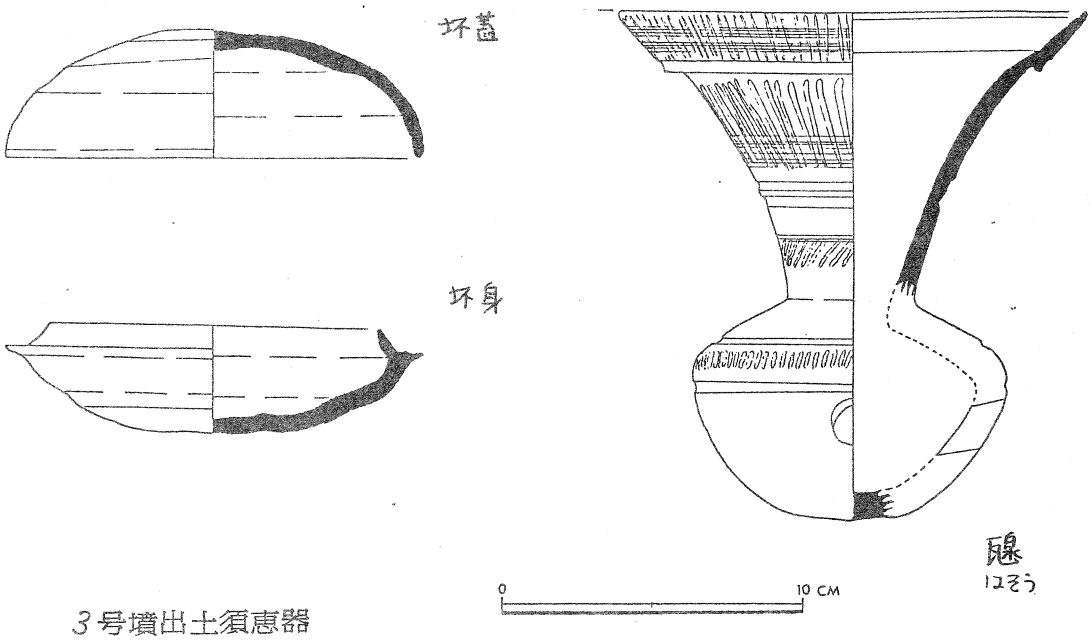


高　坏



短頸壺

３号墳出土須恵器



3号墳出土須恵器

(2)　西石ケ谷6号墳

古墳の形と大きさ

6号墳は，東半分が道路によって切断されていましたが，西側は良好に残っていました．また，北側では古墳の裾を画する溝がみられ，直径12mの円墳であることが明らかとなりました．

内部主体は，南に開口する横穴式石室です．葺石，埴輪などの外部施設は発見されませんでした．石室内はすでに床面まで削平されておりそのため被葬者数は不明です．

出土遺物

遺物は，玄室奥壁隅で須恵器，鉄製品が出土したのみです．また石室を破壊した際の攪乱土中から金環が1点出土しています．

築造時期

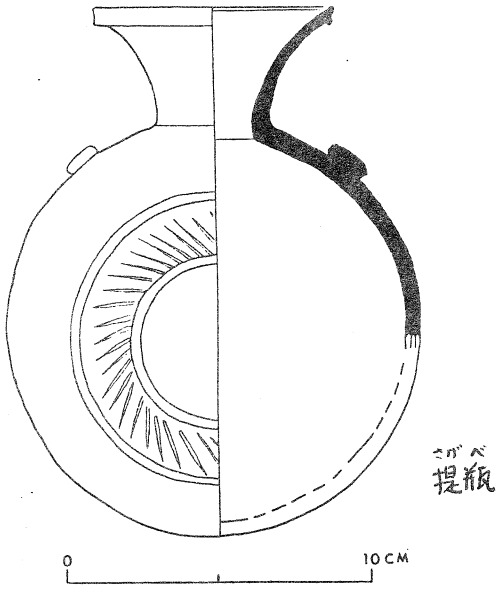
6号墳がつくられた時期は6世紀の中ごろ以降と考えられます．

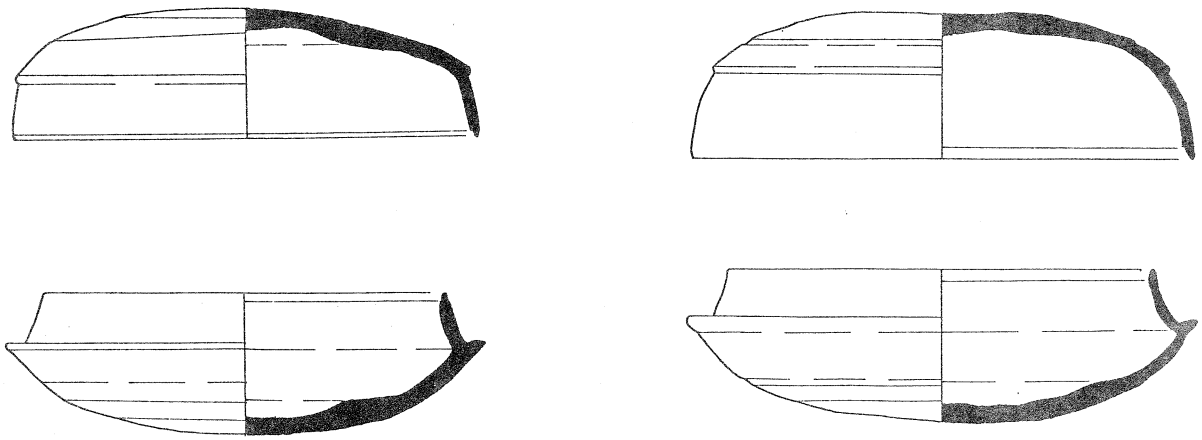
(3) 西石ケ谷4号墳の補足調査

昨年度調査を実施した4号墳の北側墳丘裾の検出を目的として，今回調査を行いました．

その結果，古墳の北側に幅約2mの溝がみられ，古墳の裾を確定することができました．これによって，古墳の直径は約13mであることが判明しました．

溝内からは，多数の須恵器片や弥生土器片が出土しています．須恵器は短頸壺，横瓮，提瓶，坏などがみられます．





4号墳溝内出土須恵器 0 10CM

4。まとめ

今回実施した3号墳、6号墳の調査で、西石ケ谷支群に属するほとんどの古墳の調査を終えたことになります。そこで、これまでの調査成果をまとめてみたいと思います。

立　地　　1号墳から5号墳は尾根の主脈上に立地し、6号墳は、主尾根から派生するやせ尾根上に立地しています。標高は、最高所に位置する1号墳が73m、一番低い所に位置する6号墳が56mで、その間に2、3、4、5号墳が点在しています。

古墳の大きさ　　古墳の形はいずれも円墳で、その大きさは1号墳が最大で18m、2号墳、5号墳が一番小さく10m、他は、12～13mです。

石　室　　石室の平面形態は、無袖式の2号墳を徐き、他は、すべて右片袖式です。袖幅は、0.3～0.4mで一定しています。

石室の開口方向は南をむくものが多く、例外は南西に向く1号墳と南東を向く2号墳です。

玄室の長さに羨道の長さを加えた石室長では、1号墳が最も長く8.7m、2号墳が最も短く5.0mです（表参照）。

古墳名	1号墳	2号墳	3号墳	4号墳	5号墳	6号墳
石室長	8.7	5.0	6.9	7.0	5.5	7.8m

排　水　溝　　羨道内から谷へ向けて排水溝が掘られていたのは1号墳、2号墳、3号墳です。

石　　材

石室の石材はいずれも花崗岩で、袖石を縦積みにするほかは、基本的に横積みして構築しています。天井石を支える下から4段目、5段目の石は、長さ1mに及ぶ大きな石を用いるという特徴がみられます。

出土遺物

各古墳から出土している遺物は、土師器、須恵器鉄器、装身具類です。各古墳には、きまって1点の土師器が収められていました。須恵器の器種構成は多様で、特に提瓶、平瓶、甕などの多いのが注目されます。鉄器には、武具の刀、刀子、などは普遍的にみられますが、農耕具はみられません。

また、馬具を副葬する古墳が2基（3号墳、4号墳）存在していたことも注目されます。

古墳の築造順序

西石ケ谷支群の中では、最初に築造されたのは4号墳です。そして、5号墳、1号墳、6号墳があい前後してつくられ、やや遅れて3号墳、そして最後に2号墳がつくられたと思われます。

最　後　に

今回の調査で、一つの尾根上に存在する古墳をほとんど完掘しました。舞子古墳群の中では、西石ケ谷支群がはじめてです。

今後、舞子古墳群内の他の支群の様相が明らかになれば、西石ケ谷支群の位置づけも可能になると思われます。

古墳から古代家族の実態を究明することはなかなか難かしいことですが、西石ケ谷支群の各古墳は

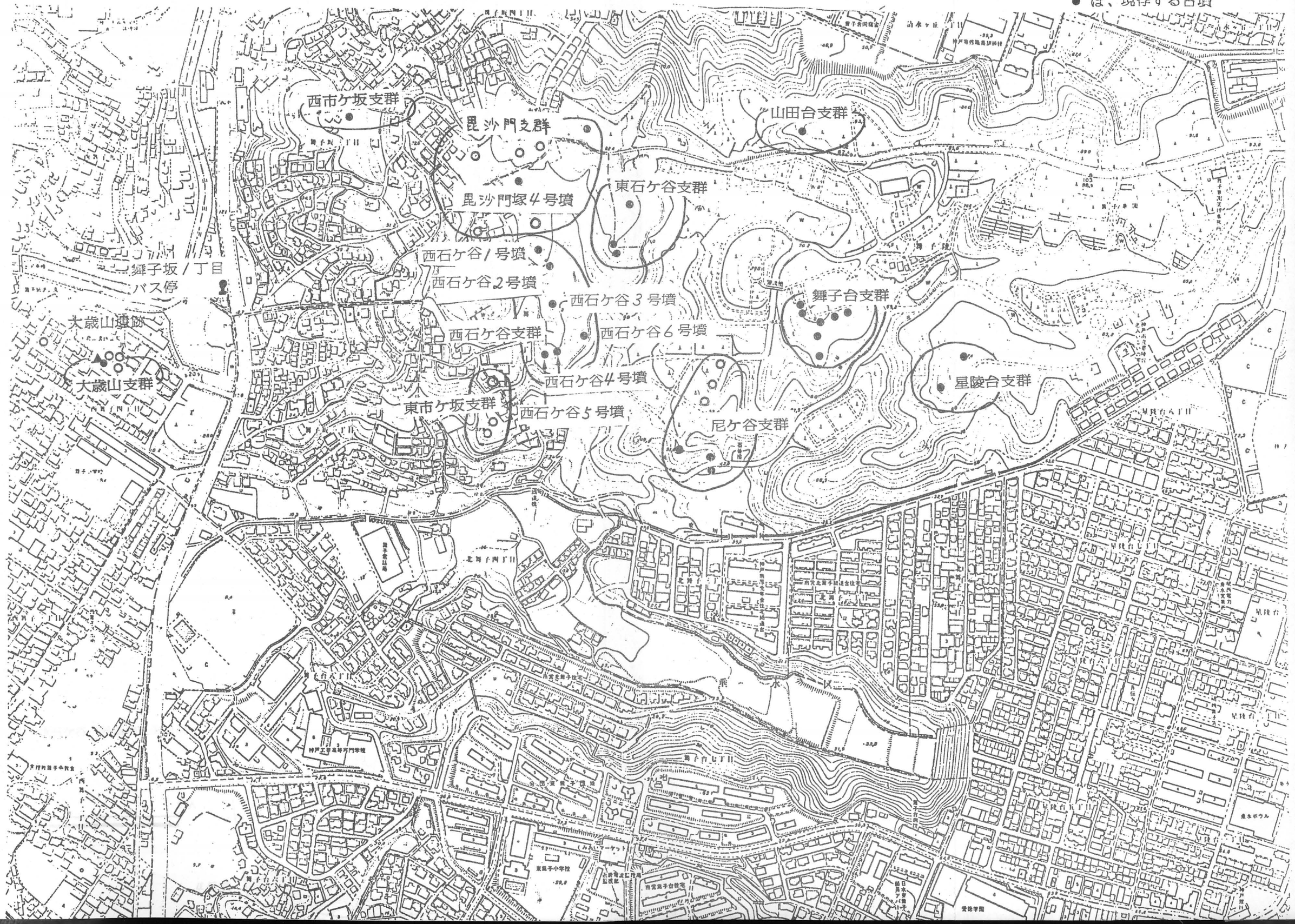
それらを探る上で貴重な資料を提示してくれました。それらの断片的な資料をつなぎあわせ、古墳を造営した人々の生活を復元していくことがこれからの課題です。

出土遺物一覧表

遺物＼古墳名		3号墳	6号墳	4号溝内
土師器		1		
須恵器	坏身	1		2
	坏蓋	2		2
	提瓶	3	1	1
	甕	2		
	長頸壺	1		
	台付壺	1	1	
	〃〃〃蓋	1		
	高坏	3		
	短頸壺	2		1
	横瓶	2		2
鉄器	刀	1	1	
	刀子	3		
	釘	4	1	
	カスガイ	1		
	鏃	3	1	
	帯金具	1		
	くつわ	2		
金環		1	1	
石鏃		1		
合計		36	6	8

図２　舞子古墳群古墳分布図

○は、すでに消滅した古墳
●は、現存する古墳



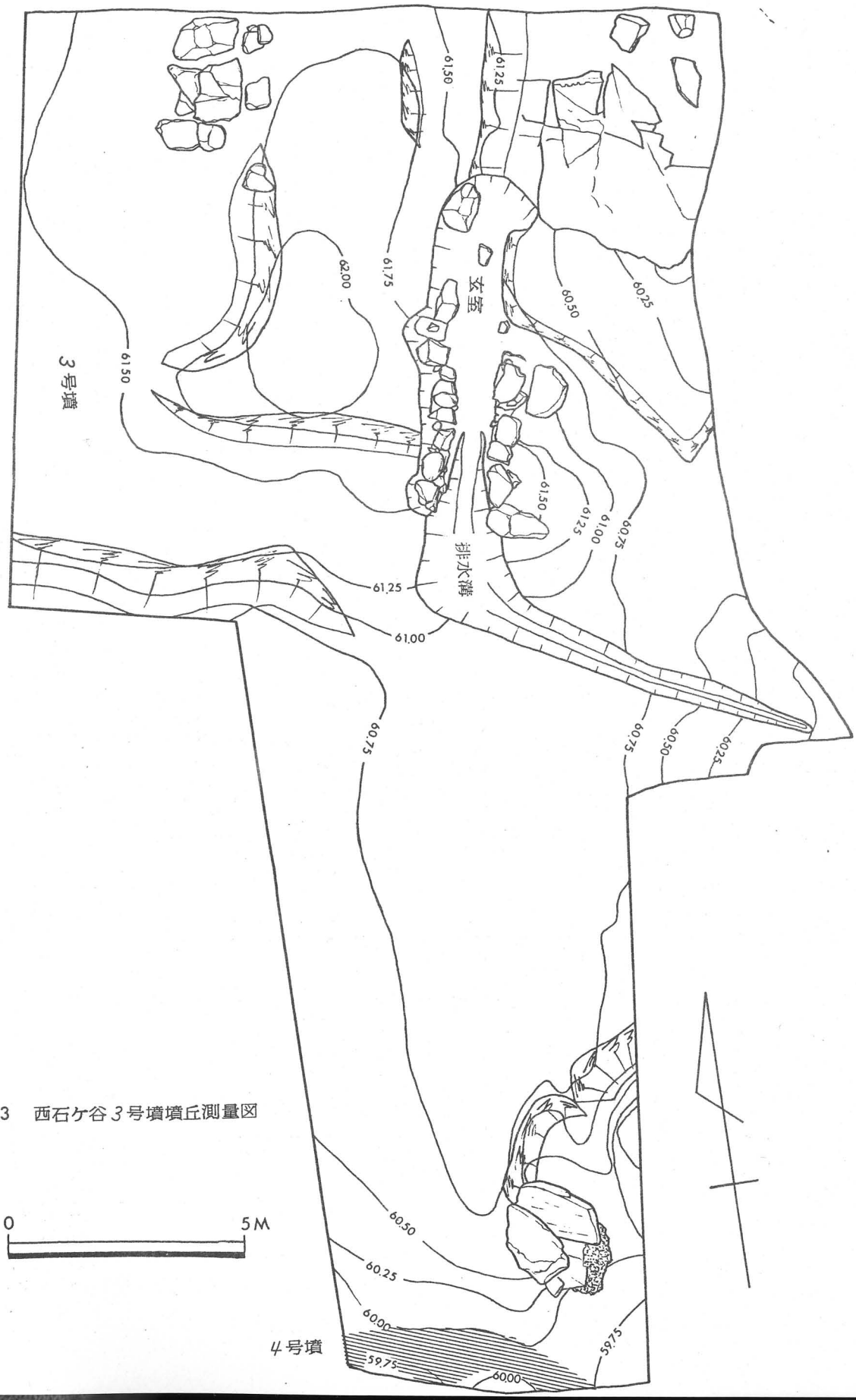


図3　西石ケ谷3号墳墳丘測量図

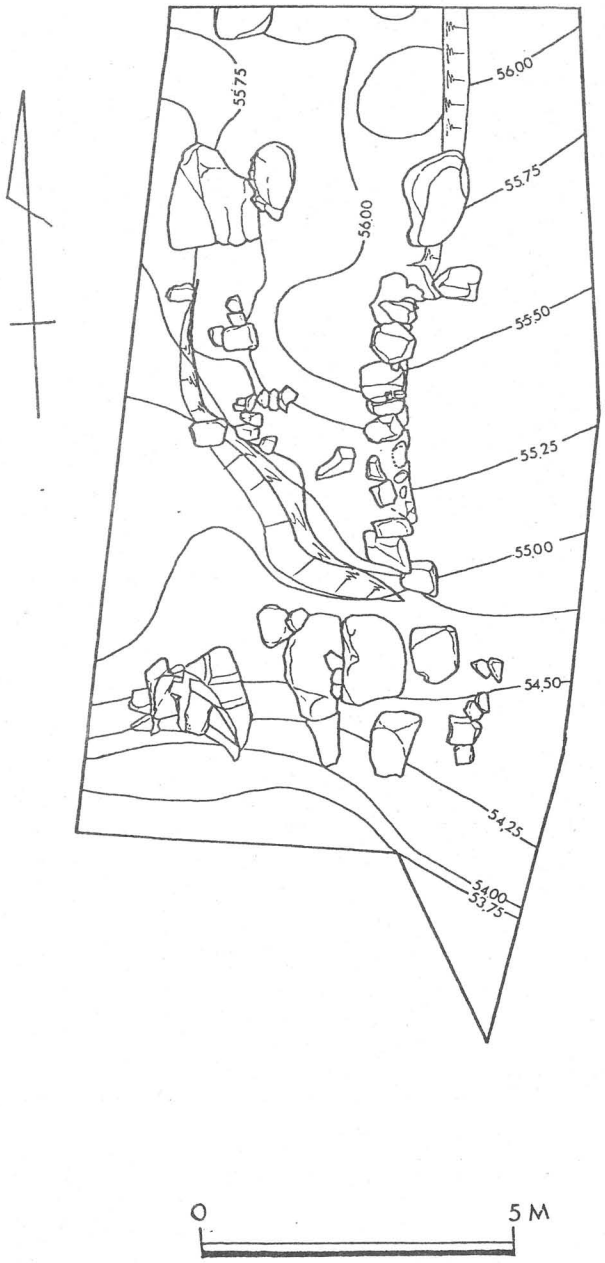
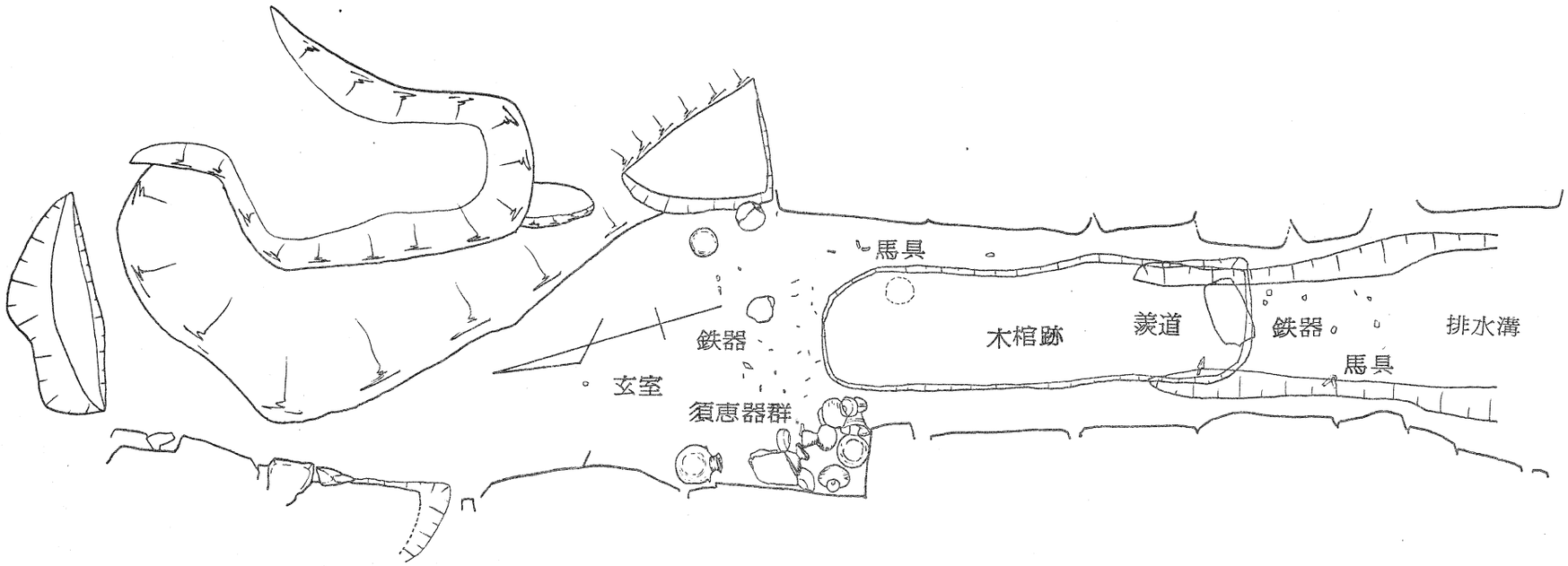


図4　西石ケ谷６号墳墳丘測量図



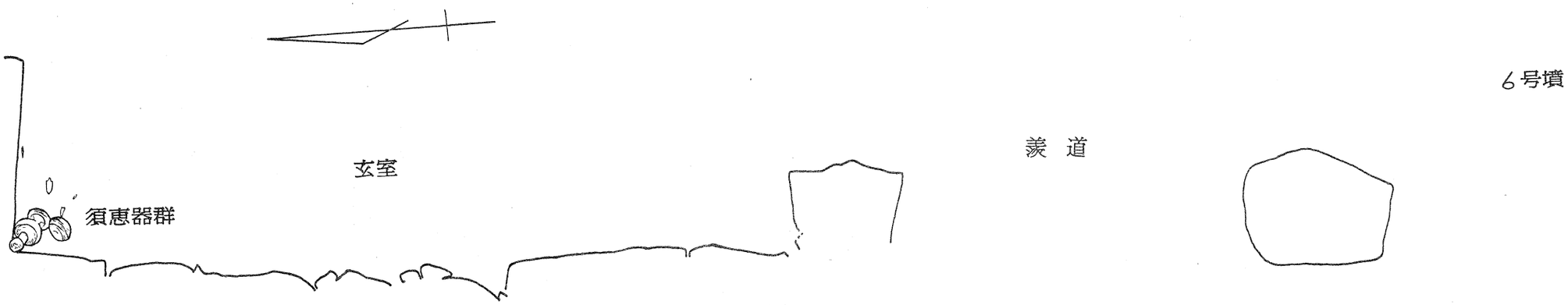


図5　西石ケ谷3号墳・6号墳石室平面図

0　1M

神出古窯址群　釜ノ口支群

現地説明会　資料

昭和　56　年　12　月　13　日

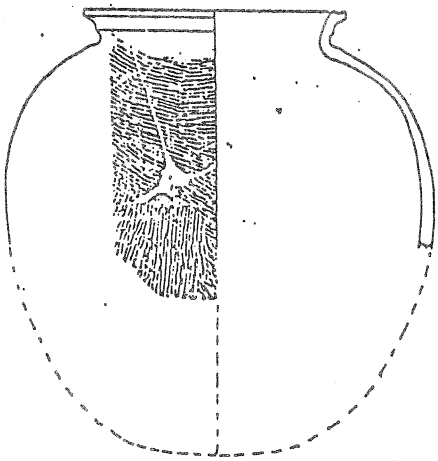
神　戸　市　教　育　委　員　会

神出古窯址群 釜ノ口支群の発掘調査については、神戸市農政局、神戸市緑農公社、県営ほ場整備神出地区土地改良区、調査に参加いただいた地元の方々の協力を得ました。

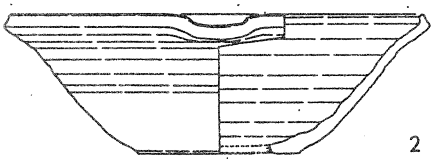
表紙説明

3号窯から出土した鬼瓦

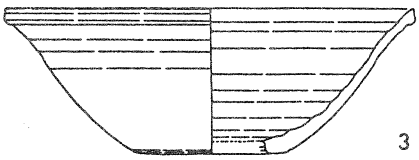
1. はじめに



須恵器甕(かめ)

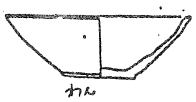


2



3

宮ノ裏支群 出土 捏鉢(こねばち)



須恵器 椀(わん)

須恵器 皿

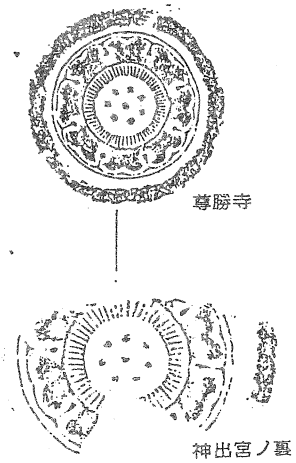
神戸市垂水区神出町一帯には，平安時代後期（１１世紀末）から鎌倉時代（１３世紀）にかけての窯址が多数存在しており，これらを総称して神出古窯址群と呼んでいます．

現在まで分布調査などによって確認されている窯址は４０基を数えることができます．しかし，今年度の調査結果から判断すると，地下に埋没して未確認のものも相当存在していると思われます．

古窯址群の分布は，雌岡山の南斜面，神出町東，北，老ノ口，田井に広がっています．

これらの窯址は，数基が集まり小さなグループを作っています．これらの小さなグループは，小字名や付近の地名などから，拍子ケ池支群，茶山支群，老ノ口支群，宮ノ裏支群などと呼ばれいてます．

神出古窯址群で焼かれた土器は，須恵器という暗青灰色をした硬質のもので，器種としては，捏鉢(こねばち)，椀，皿，甕などのほか，屋根瓦などがあります．



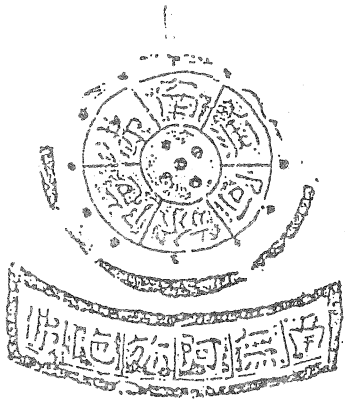
尊勝寺出土の同文の瓦

神出古窯址群から出土する瓦と同じ文様の瓦が京都市内の寺院や宮殿址から出土することから，神出で生産され，遠く京都まで運ばれていたことが知られています．また，県下では，小野の浄土寺の瓦も神出で焼かれたものです．

また，捏鉢（こねばち）や甕などは兵庫県下だけではなく，近畿地方の中世遺跡から出土しています。

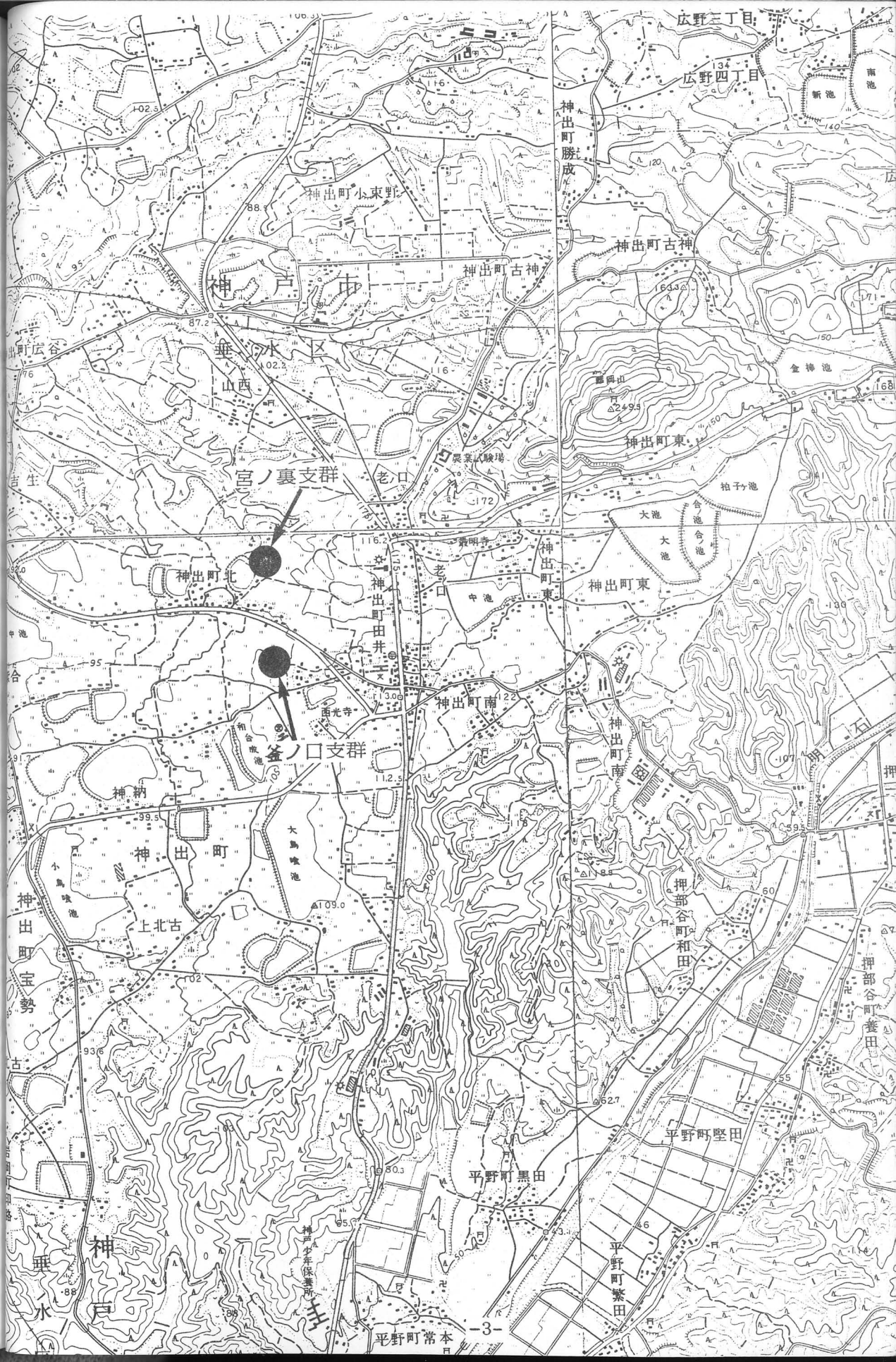
2. 宮ノ裏支群の調査

宮ノ裏支群は，神出町北にあり，農業基盤整備事業に先だち，昭和５６年６月２２日から８月３１日まで実施した発掘調査によって確認された支群です。


小野 浄土寺 出土

拍子ケ池出土

窯址は４基発見され，内１基がダルマ窯と呼ばれる小型の窯でした．他の３基は窖窯（あながま）と呼ばれるものでした．この時に出土した土器，瓦は整理用コンテナ（２８ℓ）で８５０箱を超え，瓦と須恵器を同時に焼く瓦陶兼用の窯でした．また，瓦当文様から京都の勅願寺の瓦や宮殿の瓦を焼いていることから，当時の朝廷との政治的な結び付きが知られるように



広野三丁目
広野四丁目
神出町勝成
神出町小東野
神出町古神
神戸市
垂水区
山西
宮ノ裏支群
老口
神出町北
神出町田井
神出町東
神出町南
釜ノ口支群
神納
神出町
上北古
神出町宝勢
押部谷町和田
押部谷町養田
平野町堅田
平野町黒田
平野町繁田
平野町常本
神戸少年保養所

なりました．

3. 今回の調査

今回の釜ノ口支群の調査も宮ノ裏支群同様，農業基盤整備事業に伴うもので，１１月初旬から調査を初めました．

発見の契機

当古窯址群は，古くから「釜ノ口」という地名を残すことや，今回検出した１号窯の断面の一部が露出していたことなどから，多くの窯址の存在が予想されていました．

調査の方法

調査は，窯址の確認と灰原の広がりを知るために，谷に平行する方向（ほぼ東西方向）に幅２ｍ，長さ約１００ｍのトレンチを５か所に設けました．その結果，最も谷側に設けたトレンチで，現地表下約５０cmの所から厚さ５０～１００cm、東西約８０mに及ぶ灰層が発見され、この付近に数基の窯址が存在すると考えられました．

以上のことから，この部分を拡張して調査することにしました。その結果，拡張した調査区で６基の窯址が発見され，また，一部露出していた１基を合わせ，計７基の窯址が確

104.25
104.41
104.1
103.9
103.95
103.98
104.15
104.14
105.7
106.10
105.63
105.1
105.16
104.9
105.61
105.66
107.36
107.93
107.9
106.95
106.75
107.97
102.13
102.06
102.16
102.9
104.7
106.01
106.49
106.1
106.00
104.4
103.35
104.47
103.08
103.45
104.65
104.22
104.46
102.01
102.48
102.59
103.93
101.9
101.65
102.21
102.85
103.50
104.15
103.95
101.39
103.71
101.97
102.67
103.9
103.61
104.14
104.53
102.16
103.02
102.95
104.62
104.91
103.2
102.51
102.70
103.4
103.41
104.33
102.96
103.91
104.61
104.46
105.79
104.75
104.73
104.34
105.5
105.87
105.73
106.00
105.89
105.80
106.41
106.71
107.17
106.50
106.01
106.96
107.56
106.77
107.6
107.29
107.39
105.7
106.3
106.85
107.19
107.00
107.66
106.8
106.03
105.90
106.65
107.54
1
2
3
4
5
6
7

認されました．

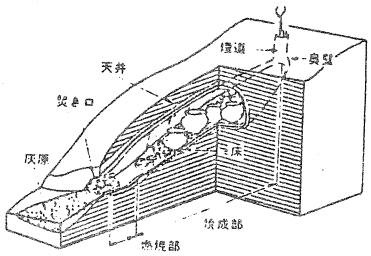
4. 窯　体

今回の調査で検出した窯体の大きさは，別表のとおりです．ここでは，各窯体の特徴を説明することにします．

	現存長m	最大幅m	現存高m	出　土　遺　物	時　　期
1号窯	7．2	1．0	0．4	鉢．瓦．	12世紀末
2号窯	2．9	1．6	0．4	鉢．椀．瓦．	〃
3号窯	4．0	1．6	0．6	鉢．椀．瓦．	〃
4号窯	1．4	0．8	0．1	鉢．椀．瓦．	〃
5号窯	4．2	2．6	0．9	甕．椀．鉢．皿．瓦．	11世紀末
6号窯	2．9	1．6	0．4	鉢．椀．瓦．	12世紀末
7号窯	1．7	1．6	0．2	鉢．椀．瓦．	〃

1号窯

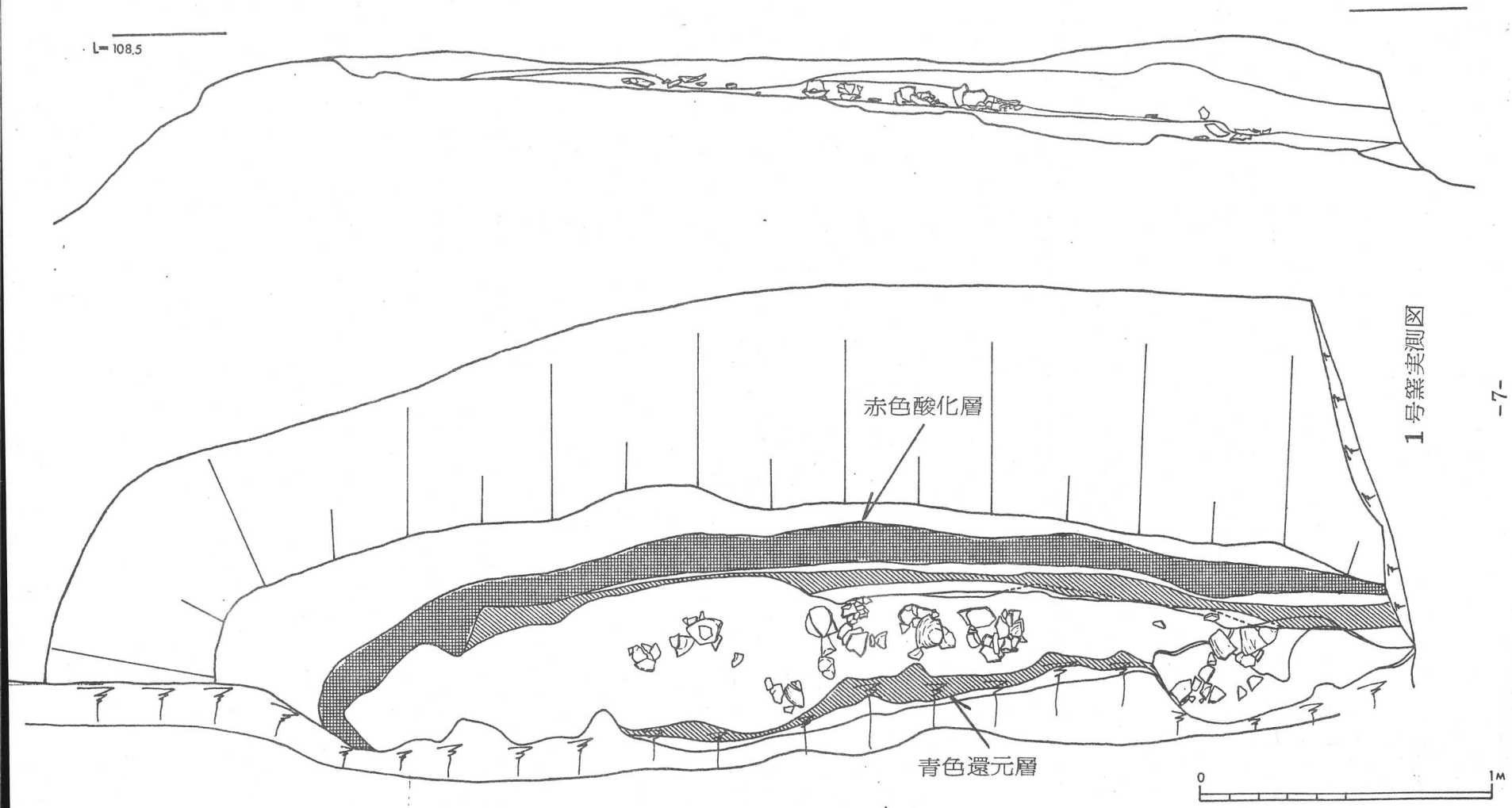
この窯は，標高107.6mの当支群中最も高い所に位置しています．窯体を築く際にまわりを削り取り，中央部を築山状に盛り上げています．そのため，窯は地上に露出したようになっています．現在は，水田によって東半分が失なわれていますが，焚口から煙り出し付近まで残っていて，全長を復元できる唯一のものです．



須恵器窯の模式図

2号窯

この窯は，新田開発の際に焼成部以上を失い，現在焚口と燃焼部が残っています．燃焼部は，平坦で段を経て焼成部へと続いていたものと思われます．窯の両側には，窯体を水から守るために排水溝が掘られています．



1号窯実測図

3 号窯

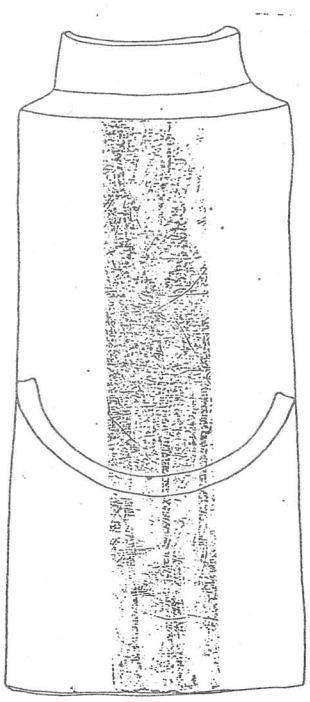
この窯は，焚口，燃焼部と焼成部の一部が残っています．焼成部には多量の遺物が残っており，煙り出しに近い部分には　鉢が，焚口の近い部分に小型の椀類が器種別に重ねて置かれており，当時の焼き方を知ることができます．この窯も両側に排水溝を持っています。

4 号窯

この窯は，最も残りが悪く焼成部の床面のみが残っています．残存状況が悪いための構造の復元はできません．

5 号窯

この窯は，当支群中最大の規模をもつものです．残念ながら削平を受けて長さを知ることはできませんが，焚口，燃焼部は，かなり良好な状況で残っています．この窯は，これまでに調査した神出古窯址群の他の窯址に比べ床面の傾斜は急で２０°をはかります．窯体の壁面には，溝状に凹むところや，凹凸のある個所があります．この窯址では捏鉢が少なく，椀や甕の多いのも特徴です．また，焼く際に土器を安定させるために用いる「焼台」が出土したのもこの窯址だけです．

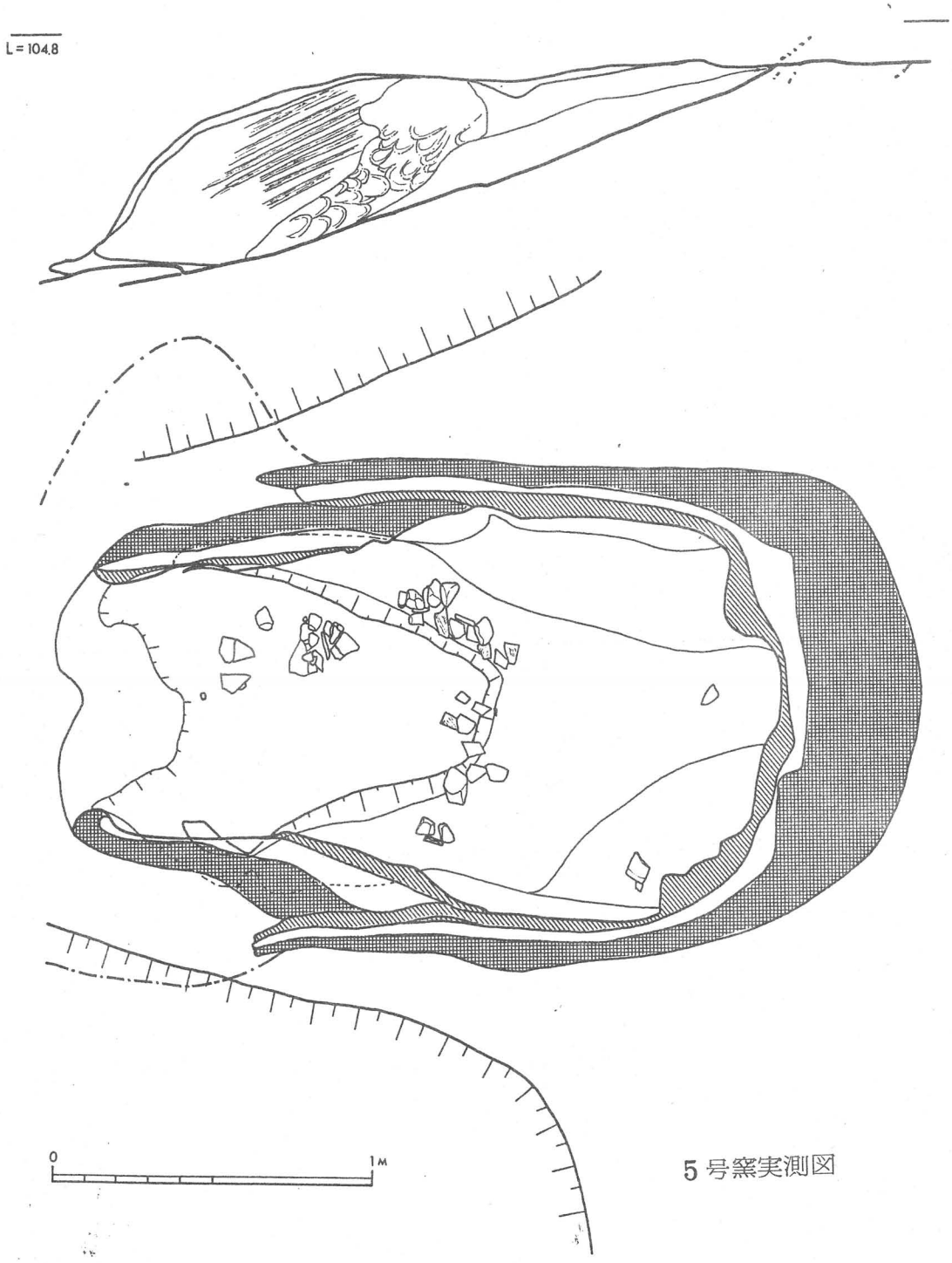


6号窯灰原出土

6 号窯

焚口，燃焼部の一部が残っています．燃焼部には多くの土器が残っていますが，３号窯

にくらべ雑然とした小破片が多く，焼いた当時の状態を示すものではないようです．



5号窯実測図

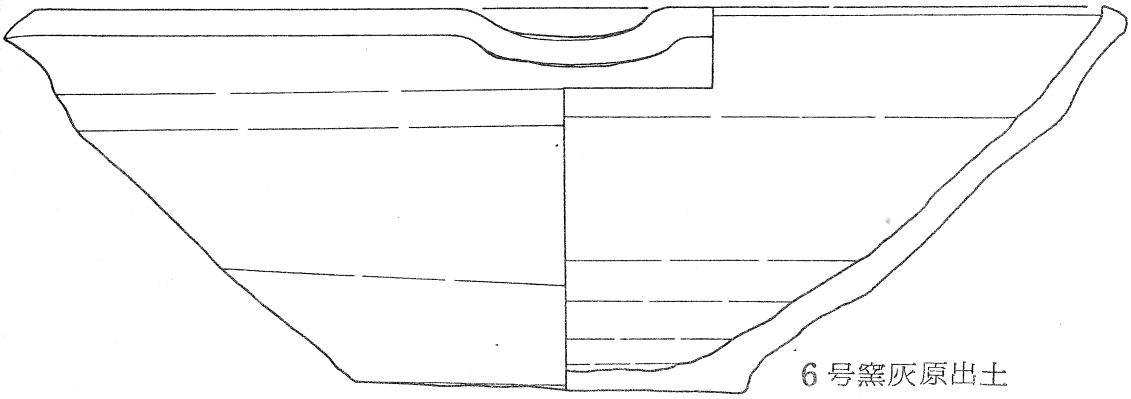
7号窯　　燃焼部のみが残っています．

以上のように各窯体の特徴をまとめることができますが，この他に1号窯をのぞく全てで，窯体の補修を確認しています．また，2号窯から7号窯までの6基は，焚口をほぼ北に向け，標高104.5m付近に東西にならんで見つかっています．これらの窯址が使われた時期は5号窯が11世紀末ごろと考えられる他，1～3，4，6，7号窯は12世紀後半ごろのものと考えられます．

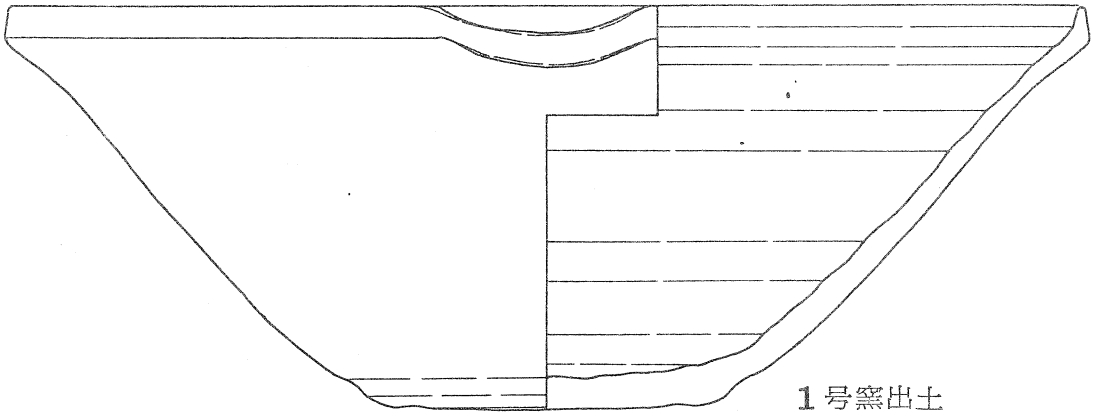
5.　出土遺物

今回の調査で出土した遺物の量は，整理用コンテナ（28ℓ）にして，1,000箱を超えます．器種別では，捏鉢が最も多く，ついで椀，瓦，甕，皿の順に続きます．その他にわずかに壷，塼（せん）も出土しています．

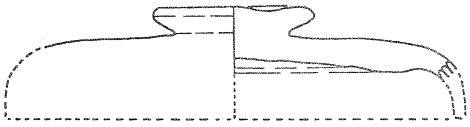
それぞれの窯体では焼かれた器種の量が異なるようで，1号窯では捏鉢が圧倒的に多く，瓦がわずかにある他，椀などはありません．5号窯では椀が多数を占め，甕，瓦などが全体のそれぞれ1／5程度出土しています．その他の窯は，多少の差はあるものの，ほとんど同じで捏鉢を主体として，椀，瓦なども焼いています．



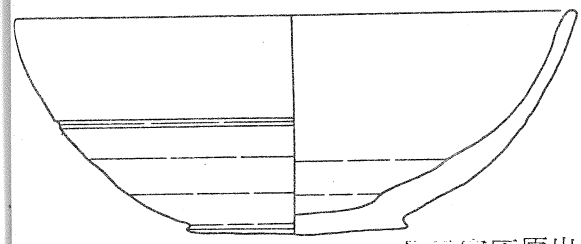
6号窯灰原出土



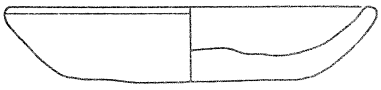
1号窯出土



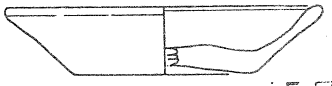
5号窯灰原出土



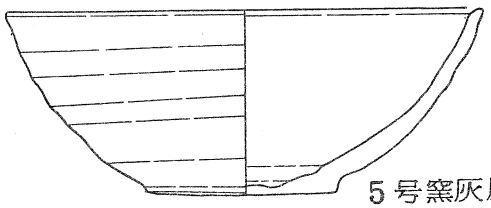
5号窯灰原出土



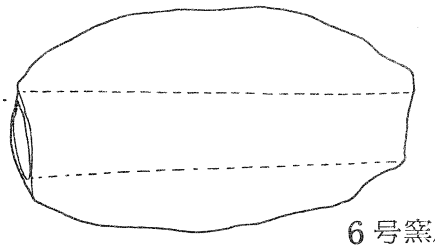
5号窯灰原出土



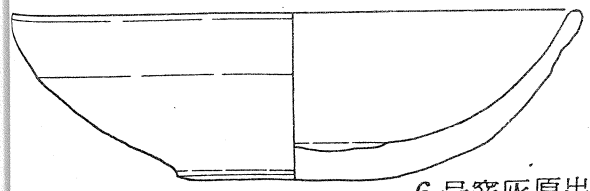
5号窯灰原出土



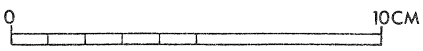
5号窯灰原出土

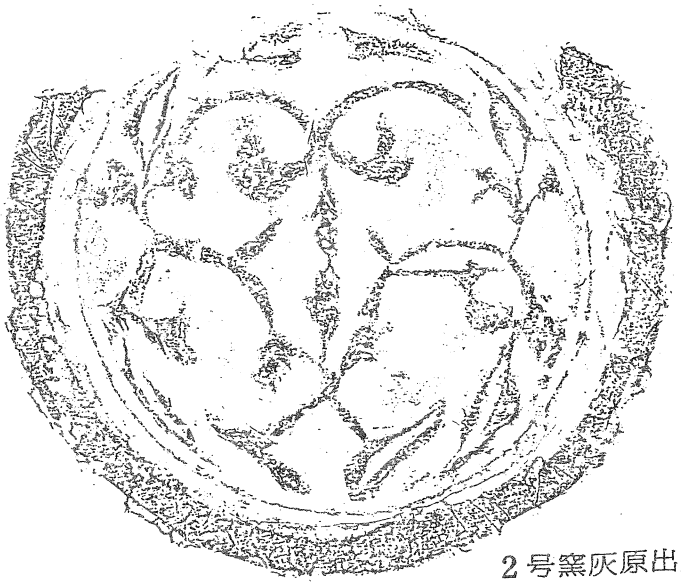


6号窯灰原出土



6号窯灰原出土



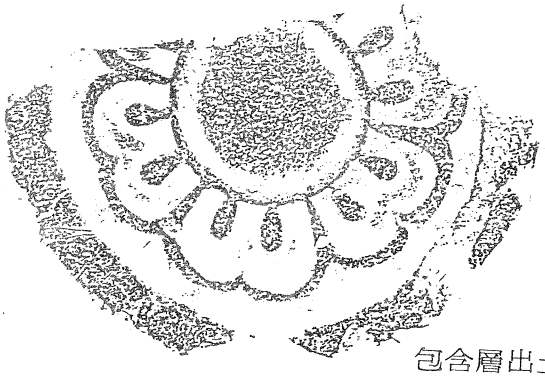


2号窯灰原出土

包含層出土

6号窯灰原出土

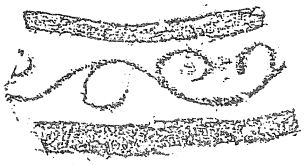
包含層出土

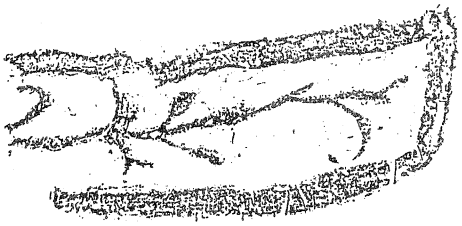


包含層出土

包含層出土

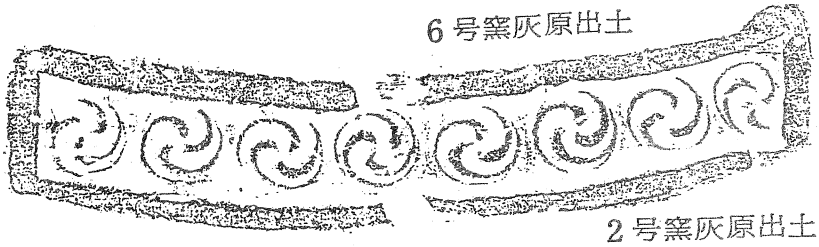
2号窯灰原出土





2号窯灰原出土

6号窯灰原出土



2号窯灰原出土

6. まとめ

今回の釜ノ口支群の調査で今年度の神出地区農業基盤整備事業に関する発掘調査は終了します．今夏の宮ノ裏支群での成果も含めて，ここで少しその成果をまとめることにします．

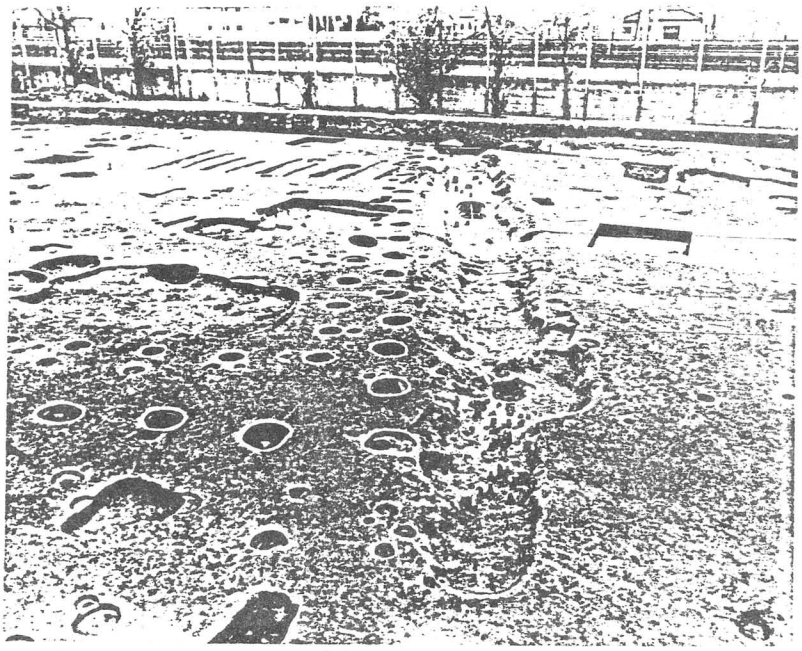
従来，確認されていた窯址は，釜ノ口1号窯だけでしたが，前回と今回の二度の調査により新たに10基が確認されました．これまで，神出古窯址群は，全体で40基ほどと考えられていましたが，今後発掘を重ねていけば，その数が増えることを十分予想させます。

出土した瓦の文様を追っていけば，都と播磨の国の政治的な背景を知る資料になると思われます．また，瓦は寺院の建立や再興の時期が古文書などで知られることから，それと共に作られた土器の時期を明らかにしてくれます．

また，釜ノ口5号窯の土器は，神出古窯址群の中でも古い時期のもので，１１世紀末ごろには，神出で須恵器生産が開始されていたことが，わかりました．今後，発掘調査を続けていけば，また新たな事実が発見されるでしょうし，これまでに発掘された資料も整理すれば，まだわれわれの知らないことも出てくると思われます．

2号窯灰原出土の忍冬唐草文様軒丸瓦

松野遺跡現地説明会資料



昭和56年12月20日

神戸市教育委員会

松野遺跡を発掘調査するにあたり、神戸市住宅局の協力を得ました。
また、長田工業高校、神戸市都市振興株式会社、水笠町自治会、宮崎ビルの協力を得ました。

表紙説明

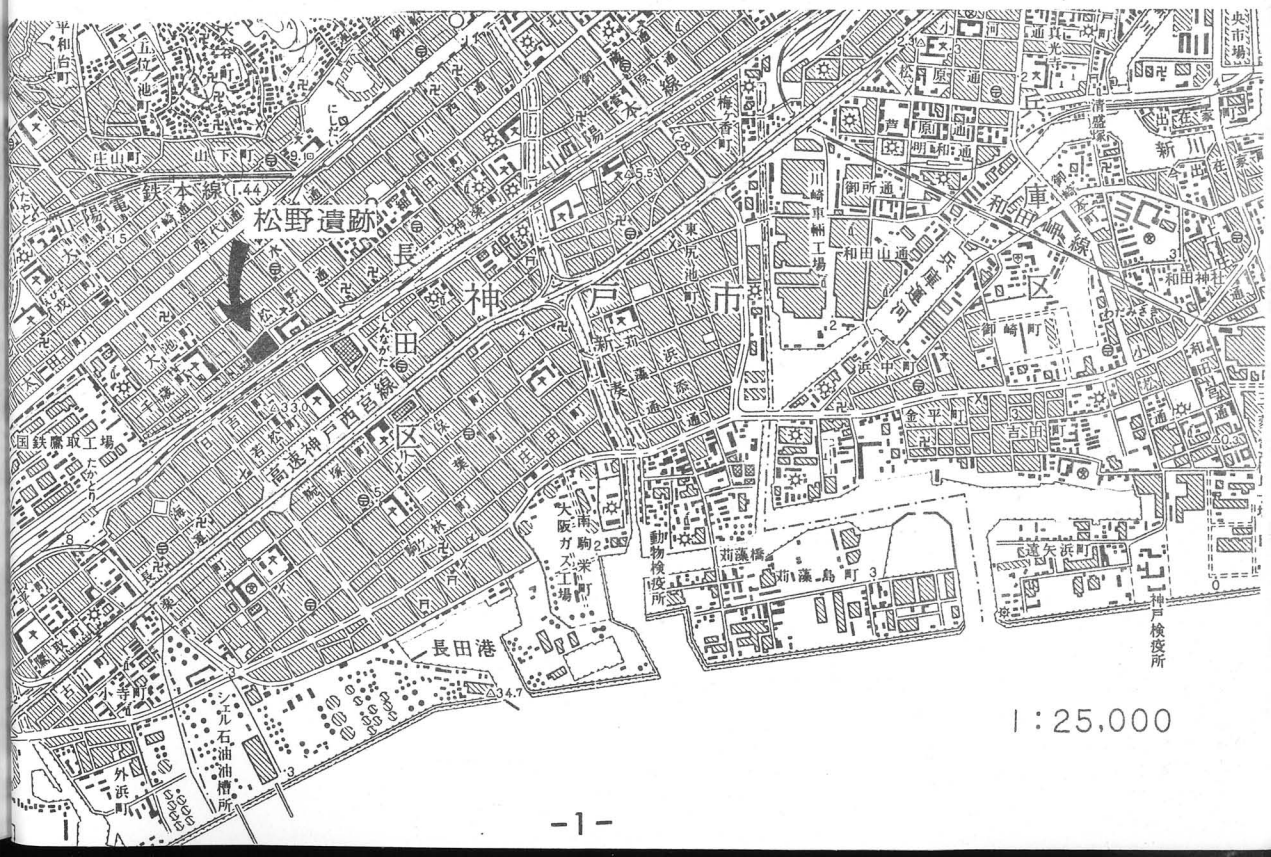
松野遺跡　柵1、2・溝（北より撮影）

1 はじめに

松野遺跡は、市営住宅建設計画に伴う遺跡確認調査で発見された遺跡です。確認調査では、弥生時代前期（２２００年前）の土器片、土製紡錘車が出土したため、ふたたび遺跡の性格、範囲を明らかにする調査を行いました。調査の結果、弥生時代の土坑や古墳時代の柱穴が発見されました。このため住居棟・集会所建設予定地内の全面発掘調査を実施することになりました。調査は住居棟予定地内１７００㎡集会所予定地内２００㎡で、昭和５６年１０月２６日から実施しています。（なお調査面積は今後、拡張を予定していますので変更となります。）

2 位置

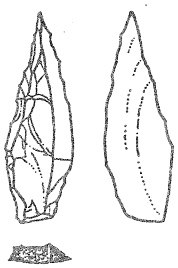
松野遺跡は、神戸市長田区松野通４丁目にあり、妙法寺川の左岸、観音山丘陵の南西にひろがる扇状地に存在しています。調査地の標高は約９ｍです。当時は、約７００ｍ 南が海であったと考えられます。



松野遺跡周辺の遺跡

松野遺跡の周辺は、近代になってから開発が進み市街地化されました。それは、明治18年作成の2万分の1の地図で、一帯が田畑であったことからもわかります。

今回の調査でも水田址が土層で確認されました。その層の下から遺構面が発見され、この周辺には、まだまだ遺跡が残っているものと思われます。



ナイフ形石器
サヌカイト製
全長　5.6cm

松野遺跡が所在する長田区は、古代には「八部郡」よばれていました。この八部郡の西部にあたる須磨区、長田区、兵庫区の遺跡を年代順に紹介し、原始、古代の人々の足跡をたどってみたいと思います。

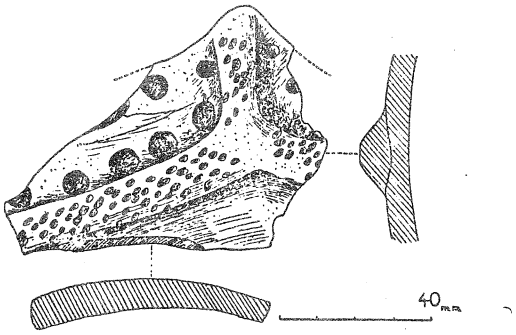
旧石器時代

松野遺跡周辺に初めて人間が住みはじめたのは、会下山遺跡で、丘陵上からナイフ型石器が発見されています。これは、旧石器時代（今から3万年前）の遺物で、石の道具を用いて生活していた時代のものです。

縄文時代

縄文時代になると、須磨浦公園内で早期（紀元前8000年）の土器が見つかっており、境川遺跡とよばれています。

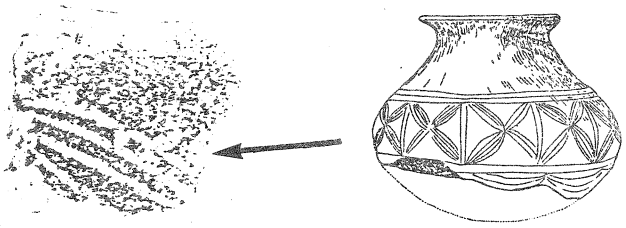
中期には、長田区名倉遺跡、晩期には、長田区五番町遺跡などがあります。



▲長田区名倉町発見の縄文土器
（直良信夫氏原図）

弥生時代

弥生時代になると、市内の中小河川沿いに集落ができ、農耕が営まれます。松野遺跡でも今回の調査で前期の木葉文のある土器が出土しています。また中央区、兵庫区にまたがる楠・荒田町遺跡なども前期の遺跡として知られています。



◀ このはもん
木葉文の土器
垂水区吉田遺跡。近畿で最も古い弥生土器といわれている。
（直良信夫氏原図）

中期になると、丘陵や段丘上に集落が営まれます。この時期の遺跡としては、兵庫区の東山遺跡、河原遺跡、熊野遺跡、会下山一本松遺跡などがあります。

後期になると、苅藻川の中・下流域の沖積地に集落が点在するようになります。長田神社境内遺跡、長田神社南遺跡、神楽町遺跡、松野遺跡などが知られています。

古墳時代

古墳時代になると、妙法寺川の右岸丘陵上に得能山古墳、苅藻川左岸丘陵上に会下山二本松古墳、湊川右岸丘陵上に夢野丸山古墳などが築かれます。これらの古墳は、すべて円墳で、古墳時代前期末から中期初頭のものと考えられています。

中期になると、苅藻川の右岸に大前方後円墳と推定される念仏山古墳（全長１８０ｍ前後）が出現します。

後期になると、現在の観音山公園付近や西灰池付近に古墳が造られましたが、今日では全くその姿をとどめません。

奈良時代

平安時代

奈良・平安時代になると、神楽町遺跡で灰釉陶器緑釉陶器など、官衙・寺院跡などで出土する遺物が出土しています。また、室内小学校やその付近からは、瓦が出土しており、「室内」という字名と考えあわせ、郡衙、あるいはそれに関連する寺院が存在したのではないかと考えられています。

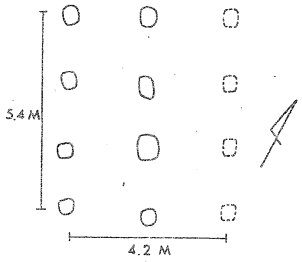
調査概要

今回の調査で発見された遺構は、弥生時代の土坑4、井戸1、古墳時代後期の掘立柱建物址4、柵列3、溝1、土坑6です。

掘立柱建物

建物 1

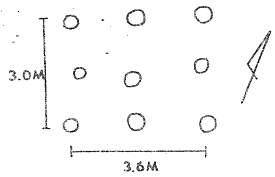
調査地の北部で発見された南北3間、東西1間以上の建物です。束柱が存在しているところから倉庫か高床の住居であったと思われます。柱間距離は、南北1.8m、東西2.1mです。柱掘形は、楕円形で、長径70cm、深さ45cm、柱穴径は15cmです。



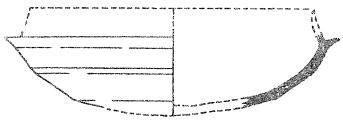
▲ 建物 1

建物 2

建物1の南4mに存在する南北2間、東西2間の建物で束柱があり、倉庫の可能性が高いと考えられます。柱間距離は、南北1.5m、東西1.6mです。柱掘形は、楕円形で長径40cm、深さ40cm、柱径は15cmです。柱掘形内から6世紀前半の須恵器片が出土しています。



▲ 建物 2

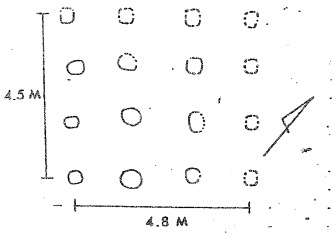


▲ 建物2 柱穴出土須恵器杯実測図

建物1、2は、柵3によって画されたところに建てられています。

建物 3

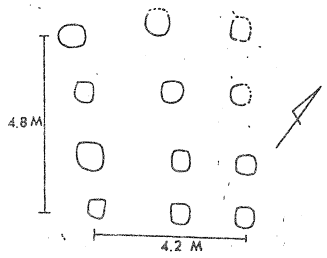
1、2の内側に建てられた建物です。南北3間(?)東西2間(?)、で束柱が存在しています。倉庫か



▲ 建物 3

高床の住居と考えられます。柱間距離は、南北1.6m、東西1.8mです。柱掘形は、1辺55cmの方形で、深さ60cm、柱穴径15cmです。

建物 4



▲ 建物 4

建物3の南にあり、南北3間（?）、東西2間で未柱があります。倉庫か高床住居と考えられます。柱間距離は、南北1.6m、東西2.1mです。柱掘形は1辺60cmの方形で、深さ30cmです。掘形内の埋土から有蓋高杯の蓋のつまみが出土しています。5世紀後半のものと考えられます。

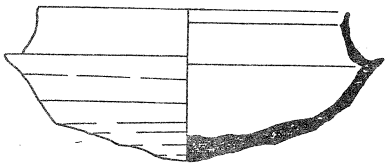
柵列

柵列は3条発見され、柵-1、柵-2は方形にめぐらされていたものであろうと考えられます。柵の中には掘立柱建物址が2棟発見されています。柵列に囲まれた内部を全域調査すれば、建物数はもう少し増えると考えられます。

柵-3は、建物を囲うようにめぐらされた柵とは考えられません。

柵列-1

東南方向に16間、これと直交する形で北東へ上下2列の柵列が接続しています。柱間距離は1.8mで、柱掘形は1辺45cmの方形で深さ60cmです。掘形の埋土内から古墳時代の須恵器が出土しています。



▲ 柵-1 柱穴出土
須恵器実測図

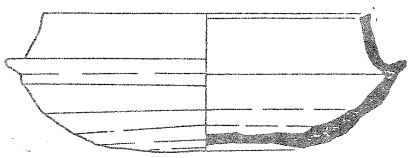
柵列-2

溝と平行に発見された柵列で、直角に接続する柵列が発見されているところから柵列と同様の性格を有する遺構であろうと考えられます。

東南方向で18間分、直角に接続する柵列は北東

方向へ4間分発見されました。柱間距離は1.8mです。柱掘形は、1辺55cmの方形で、深さ60cmです。柱穴は直径45cmです。掘形内の埋土より古墳時代の須恵器片、弥生時代の土器片が出土しました。

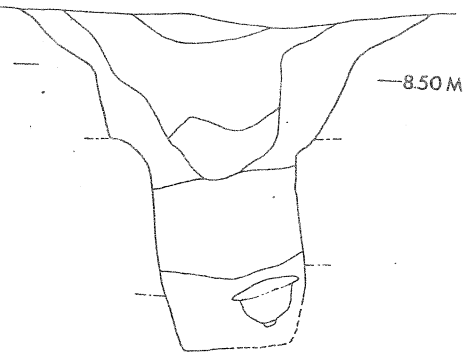
溝



▲ 溝出土須恵器杯

柵1に平行に存在するもので幅3m～4m、深さ0.6mです。溝内からは、古墳時代の須恵器杯身、杯蓋、甕、高杯、土師器甕、製塩土器、高杯が出土しています。溝1は、北にいくにしたがい浅くなっています。

井戸



調査地の南西部、トレンチに接して発見されました。長径1.7m、底径約1m、深さ1.3mの楕円形の掘形をしています。断面形は、ロート状で、底部は、約1m下の泥炭層を掘り込み、下層の青灰色砂層にまで達しています。埋土からは、弥生時代後期の鉢型土器、高杯などが出土しています。

松野遺跡検出遺構一覧表

遺構名	規模	柱間距離 東西m	柱間距離 南北m	主軸	備考
掘立柱建物1	2間以上×3間	2.1	1.8	N 27° W	
掘立柱建物2	2間 × 2間	1.6	1.5	N 22° W	柵1より新しい須恵器が柱穴より出土
掘立柱建物3	2間以上 × 3間以上	1.6	1.5	N 49° W	
掘立柱建物4	2間 × 3間以上	2.1	1.6	N 39° W	
柵1	南北1 6間以上 東西 4間以上	1.8	1.8	N 49° W	トレンチ南部で柵1が柵2を切る。柱穴内より6世紀初頭の須恵器出土。
柵2	南北1 8間以上 東西 4間以上	1.8	1.8	N 51° W	
柵3	南北 2間 東西 3間	2.3	2.0		掘立柱建物1に伴うものか
溝	幅3～4m	深さ 0.6m	長さ 35m		6世紀初頭の一括遺物出土
土坑1～5,7,9					6世紀初頭の遺物出土
土坑6,8,10					弥生時代か
井戸	直径1.5m	深さ 1.3m			弥生時代第V様式、市内初の例

ま と め

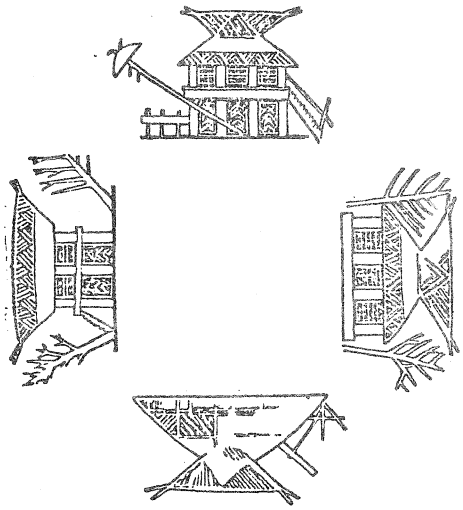
近年各地で古墳時代の掘立柱建物跡が発見されるようになってきました。これまで古墳時代の建物としては、竪穴式住居が主に発見されているだけでした。しかし、掘立柱建物は弥生時代から存在していたことが確認されています。

魏志倭人伝には、卑弥呼が生活していたところを「居処は、宮室・楼観。城柵厳かに設け、常に人有りて兵を持して守衛す」と記しています。この記事が事実であるとすれば、3世紀のころには城柵に囲まれたところで生活していた階層の人々が出現していたことになります。しかし、これまでの考古学的資料でこれを証明することはできていません。

奈良県佐味田宝塚古墳（4世紀後半）から出土した家屋文鏡には、当時の建物が4種類描出されています。その一つは、千木を備えた入母屋造の高床建築で立派なものです。豪族の住居でも表現したのでしょうか。

家屋文鏡（かおくもんきょう）

家屋文鏡建築圖



小林行雄著「日本考古学概説」より